
佐藤友哉
yuya sato
ダンガンロンパ
DANGANRONPA
十神の名にかけて
下
Illustration
しまどりる
TOGAMI
十神
e+FICTIONS
SEIKAISHA

本作品は、縦書き表示での閲覧を推奨いたします。横書き表示にした際には、表示が一部くずれる恐れがあります。

ご利用になるブラウザまたはビューワにより、表示が異なることがあります。

星海社
FICTIONS

ダンガンロンパ十神（下）
十神の名にかけて

佐藤友哉

Illustration／しまどりる

星海社

ダンガンロンパ十神

DANGANRONPA TOGAMI

十神の名にかけて

下

CONTENTS

才能の発達に関するかぎり、
われわれは今なお食物採取時代の段階にいる。
その育てかたをわれわれは知らないのだ。

（エリック・ホッファー／現代という時代の気質）

本テキストを書くにあたり、次の筆記システムを使用した。

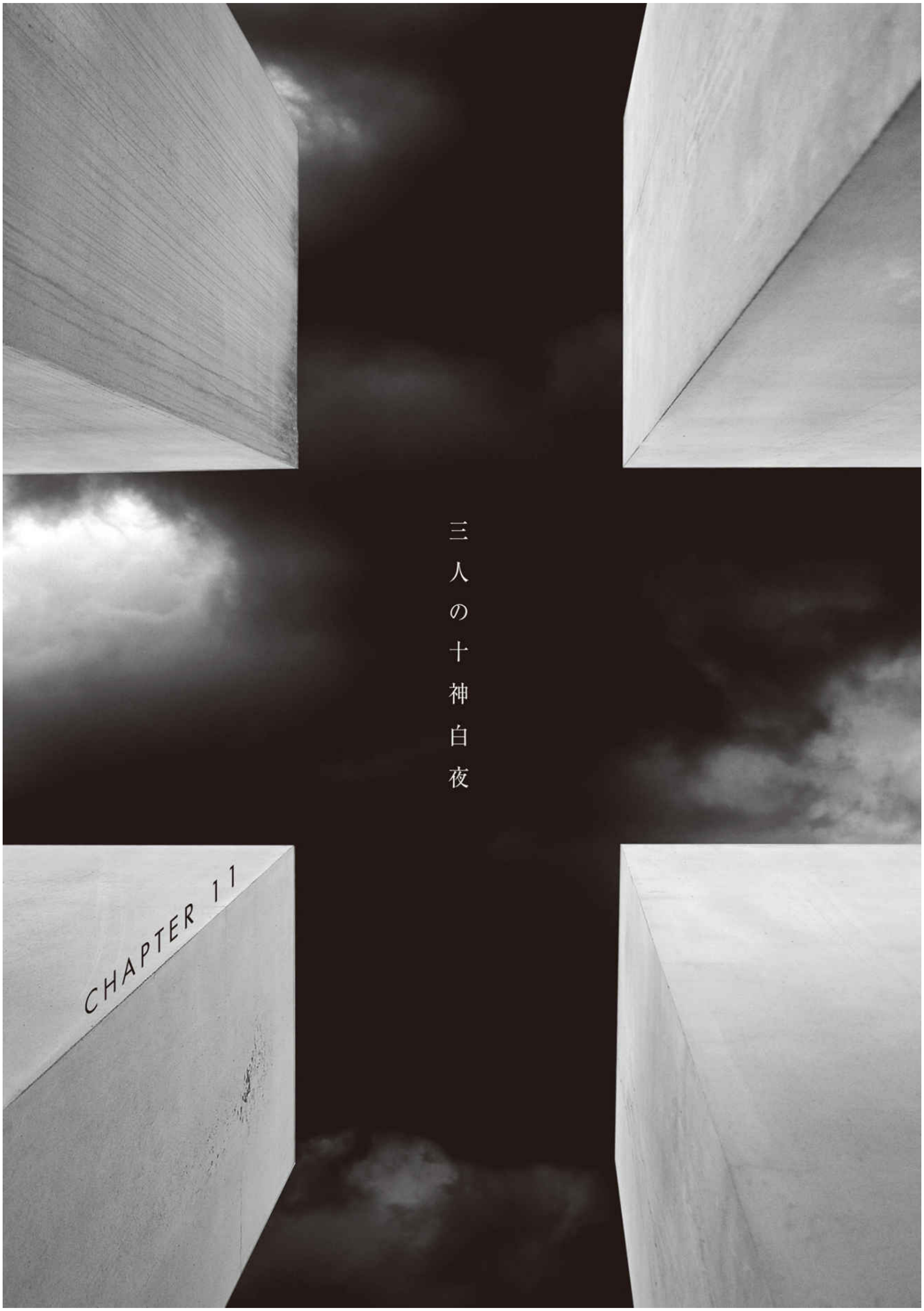
k2k-system ver2.3

偽書。悪書。俗書。コピーのコピーが広がる世界で、よく耐えていると思う。システムの堅牢さと愚直（ぐちょく）さには舌を巻くしかない。

そんなわけなので、僕の仕事といえば、ちょっとした添削くらいだ。身のほどはわきまえている。最後まで元気にやってみよう。

はじまり（オリジン）の魂に幸あれ。

あるとすればの話だが。


三人の十神白夜
CHAPTER 11

1

お話は簡単です。ひとりの青年が世界征服をしようとしました。青年はなみはずれた冒険をかさねたすえに、自分のほしいものを手に入れ、無事に帰ることができました。めでたしめでたし。ではここで問題です。その『青年』とは次のうちだれでしょう？

2

「ケーキは全員に行き渡りましたね？　世界の分割を決めたヤルタ会談では、大統領の娘さんたちが食事を作って場を和(なご)ませたそうです。ここはヘリの中なので、ご馳走(ちそう)は出せませんけど、ケーキくらいなら……」

「ケーキはどうでもいいから話を進めろ。お前が主導権を握っているのは、みとめてやっているのだからな」
「フフ。殊勝な態度ですね十神白夜（とがみびゃくや）。では、さっそくはじめるとしましょうか。姉さんも食べて。アメリカ製の、砂糖とバターがたっぷり入った、甘い甘いケーキをどうぞ召し上がれ」
あの子は、十神和夜（かずや）は、夢見るような表情を浮かべていました。

3

世界保健機関（WHO）のヘリに乗せられた私たちは、無数の銃口（じゅうこう）が向けられた機内でティーセットをかこみつつ、世界征服にかんする会談をはじめます。

四年ぶりに見る弟は、見違えるほど成長していました。瘦(や)せていた体には適度な筋肉がそなわり、口の端には皮肉(ひにく)の微笑が貼りつき、いつも何かに脅(おび)えていた瞳は自信に染まり、白夜様のそれとよく似た眼鏡(めがね)をかけています。かつて一度だけ十神白夜を名乗った青年は、私たちの前に堂々と君臨(くんりん)していました。国連軍を引き連れて。いばりくさって。

拘束されていない私は、こめかみに指を置き、情報更新されているであろうボルヘスにアクセスします。

ボルヘス＝検索結果

＃７１００９２２４

項目　人物

タイトル『十神和夜』

『十神一族最悪の事件』の犯人。『口無村焼失事件』の唯一の生存者だったが、降旗道子が実子として育てていた。事件後に大捜索をおこなうも死体は見つからず、死亡とされていた。件と接触あり。十神財閥の第一級暗殺予定者に指定されている。

現在は、世界保健機関疫病対策委員長をつとめるキース・エレベーターの養子、オルヴィン・エレベーターを名乗り、世界保健機関疫病対策委員実行部隊隊長に属している。

「十神白夜。きみは国連の専門機関であるWHOに逮捕、拘束されています。われわれは、国連憲章第七章のもとに行動する国連安全保障理事会（UNSC）により、その権利を保障されています。きみの罪

国連安全保障理事会により、その権利を保障されています。きみの罪状を考えれば、本当なら旧ユーゴスラビア国際戦犯法廷（ICTY）のようなものを作るレベルであり……」

「フン」白夜様は手錠（てじょう）でつながれていましたが、いつもの態度を崩しません。「俺の生き様を、ポル・ポト派（クメール・ルージュ）あつかいするのはゆるさんぞ」

「でもきみは、世界に虐殺（ぎゃくさつ）の種を振りまいているんでしょう？」

「このまま国際司法裁判所（ハーグ）まで連行するつもりか」

「ええ。チェコからオランダへと国境を渡り、裁きを受けてもらいましょう。世界にケンカを売った十神白夜の罪は重い。本来ならばリンチされても文句の云（い）えない身であることをお忘れなく」

「俺を殴りつけたいようだな」

「何を図っていたのですか」
「ぼくは理性的です。チェコに集まった荒くれ者や、殺意をがまんできない暴力国家のように、きみに暴力をくわえるようなことはしません」
「こんなにも銃口を向けておいて、何が『暴力をくわえるようなことはしません』だ」
「銃の数は、きみに対する評価値のようなものです」
「だとすれば、数が少なすぎるな」
白夜様が不敵にほほえむと、国連兵たちは戸惑ったように銃口を揺らしました。私はそれが痛快で、和夜も同じらしく、「動じませんね、十神白夜は」と、うれしそうに云いました。
「当然だ。不動でなければ十神は務まらんからな」
「ではきみのブタ箱行きを宣告する国際司法裁判所に到着するまで、

ティータイムと洒落こみませんか？」
「手錠をはずしてもらわなければ、お前にテーブルマナーを教えてやることができん」
「犬のように食べればよろしいかと。『超高校級の御曹司』であらせられる十神白夜が、『犬食い』という行為を知っていればの話ですけど」
「無力な小僧が、一丁前なことを云うようになったじゃないか」
白夜様は器用に、拘束されながらも眼鏡を指で押し上げました。
「フフ。ぼくはもう一人前ですよ。世界保健機関疫病対策委員実行部隊隊長ですよ」和夜もまた真似するように、自分の眼鏡を直します。
「四年前とは違うんだ」
「小僧よ、ティータイムを開きたいのなら、茶飲み話でも用意したら

どうだ。ＷＨＯがどこまで事態をつかんでいるのか聞かせてみろ」
「そうですね。最初は雑談……どーでもいい話題から入るとしましょうか。たとえば『絶望病』の話とか」和夜はティーカップを手に取りました。「事態は次なるフェイズへと進行しました。『絶望小説』の媒介なしに『絶望病』が発症するようになり、さきほどの村では、あのような悲劇が起こりました」
「悲劇とは『絶望病』のことか？　それともお前のやった虐殺のことか？」
「彼らは発症者。汚物を消毒することに、ゴミをゴミ箱に捨てることに、なんの問題もありませんが」
空からの機銃掃射を浴びた村人たちは、一人残らず殺されました。老若男女関係なく撃たれ、穿たれ、斃されました。そんな死体
畑の農夫は知友でした。血のつながりはなくても、私の師でした。空

白の四年間を、和夜はどのようにすごしたのでしょう。どうしてここまで堕ちてしまったのでしょう。私の……せい？

「ＷＨＯは先刻、『絶望病』の警戒フェイズを、最大である六に設定しました」和夜は言葉をつづけます。「そんなわけでぼくたち疫病対策委員実行部隊は、諸問題を可及的すみやかに解決するため、『絶望小説』をばら蒔いたと主張する十神白夜生徒を拘束し、同生徒が在籍している希望ヶ峰学園に査察を要求しました。これが現在までのあらすじ」

「そいつは妙手だ。俺をダシに使って、希望ヶ峰学園に踏みこんだわけか。それで、学園は査察を受け入れたのか？」

「『聖人計画』と『聖書計画』はごぞんじで？」

「知らん」

白夜様は即答し、私の右目に宿るボルヘスも無反応。ほっとしました。何も知りたくないというのが本音（ほんね）でした。私たちの希望ヶ峰学園が裏でよからぬことをしているのは、もはや自明なのですから。世界に希望の種を蒔くはずの希望ヶ峰学園が、絶望の種を蒔く要因を作ってしまったのですから。

「フフ。『聖人計画』と『聖書計画』……。希望ヶ峰学園が秘密裏（ひみつり）に進めていた計画だそうです」なのに和夜は説明をはじめます。「どっちも通称のようですが、やけに宗教めいた名前ですよね。ま、仕方ありません。希望ヶ峰学園は今や、希望を崇める宗教団体ですからね

え。まだ情報が出揃っていないので、『聖人計画』についてはなんとも云えませんが、それでも『聖書計画』は推察できるのでは？」
「『絶望小説』は『聖書計画』のシステムを利用して作られたものだろ」
白夜様が答えると、和夜は満面の笑みを浮かべて、「すばらしい。名推理だ」と云いました。どうやら和夜は、白夜様が有能であればあるほど興奮するようです。
「フン。推理というほどではない。それより『聖書計画』の内容を教えろ」
「学園が提出した資料を信じるならば、『人類が絶望に染まったとき、読むだけで希望を回復させる書物を作る計画』だそうです」
「スケールが大きいのか小さいのかよくわからんな」

「希望ヶ峰学園がもっともおそれているものはなんだと思います？
人類滅亡？」
「いや。人類絶望だ」
「その通りです。巨大隕石（いんせき）が降っても、核戦争が起こっても、希望ヶ峰学園は動じないでしょう。でもそのとき、人類が絶望に染まって、あきらめて、戦わないで、希望を捨てることには……耐えられない」
「くだらん。希望を回復させたければ本屋に行って、トーマス・マンや、ハルキ・ムラカミの本でも買えばいい」
「しかし彼らの著作が、全人類の心に響くわけではありません。聖書も今のところ、争いの火種（ひだね）を広げるだけですしね。そこで機械……AIの登場というわけです。古今東西（ここんとうざい）のあらゆる物語を自動筆記システムに学ばせて、売るだけでだれもが希望を回復させる書物を作らせ

人は学ばせず、誰もがいつか抱く希望を回復させる書物を作らせ

る。それが『聖書計画』の全容ってわけですねえ」

ヘリが揺れたせいか、困惑したせいか、私の三半規管が軽く揺さぶられました。ＡＩに、人工知能に物語を書かせる？　それが希望ヶ峰学園の極秘計画で、そのシステムをもとに『絶望小説』が書かれた？　想像していたタイプとはべつの展開に、脳が疲労を訴えました。バファリン飲みたい。

「ＡＩが書く物語、か」白夜様の声は冷淡でした。「味気ないものができそうだ」

「フフ。科学認識が古いですね十神白夜は。囲碁や将棋で人類に勝つことがＡＩの本質ではありませんよ」

「ＡＩの力を正当に評価したうえで、『味気ないものができそうだ』

[illegible]
と俺は云っているんだ。ＡＩがどれほど優れていようと、できないことが一つだけあるからな」
「うかがいましょう」
「『創造すること』だ。創造できなければ、物語は書けない」
「おやこれはロマンチックなことで……。いいですか十神白夜。物語とはすなわち、データの再構築。記述を記述たらしめるための算法（アルゴリズム）。そこに創造など必要ありません。物語を書くというのは文学ではなく、歴史学や分類学の範疇（はんちゅう）とも云えるでしょう。物語は人間にしか作れない崇高（すうこう）なものという幻想は、今すぐ捨てたほうがいいですよ。なぜなら物語にはオリジナリティなど必要ないのですから。古来からずっと――

「データベース論か。懐かしい話をするじゃないか」
「ですがこれが真実です。新しい物語を作るのは、一握りの天才じゃない。データを組み合わせるだけでいい。パーツをつなぎ合わせるだけでいい。ヴィクター・フランケンシュタイン博士が怪物を作ったときのようにね」
「フン。まあ希望ヶ峰学園には、パーツだけなら一流の連中がころがっているからな」
「『超高校級のSF作家』でも、『超高校級の口伝研究家』でも、『超高校級のライトノベル作家』でも、『超高校級の民話蒐集家』でもなんでもいいですが、各生徒のデータをインプットすれば、それはたちまち世界最高峰の物語AIとなり、世界最高峰の物語、つまりは聖書を書けるようになる……少なくともきみたちの学園は、そう考えているようですがね」

えているようですなねえ」

和夜の言葉を聞きながら、『超高校級の文学少女』である腐川さんのことや、『超高校級の書記』である自分自身のことを思い浮かべました。それらのデータが『聖書計画』とやらのためにひそかに利用されたとすれば、権利乱用もいいところです。私は怒っていましたが、白夜様はすでに受け入れたらしく、「ヴィクター博士は創造主たる神に、怪物は神に作られたアダムによく対比される」といつもの口調で云いました。

「それくらいなら、ぼくも知ってますが」

「だがその対比はすぐさま崩壊する。人間であるヴィクター博士が神の真似をした結果、おぞましい怪物が生まれ、そいつが人を殺して回るわけだからな。物語ＡＩなるニセモノの神から生み出された聖書など、グロテスクな怪物にすぎないということだ」

グロテスクな怪物はできないでしょうか」

白夜様のスノッブな意見を聞いた和夜は、やはりうれしそうな顔つきになり、紅茶を飲んでから、「古い文芸評論にしがみつくのはやめましょうよ」と云いました。

「いいですか十神白夜。怪物を作ったヴィクター博士と、人間をお作りになった神は、まったく同じ状況なんです。なぜって、どっちも予想外の展開になったじゃないですか。そう、キリストの死です。神そのものであるキリストが十字架の上で殺されることも、神の計画のうちでしょうか？　ヴィクター博士が神に対する反逆者なら、神もまた、神自身への反逆者ということになる。ヴィクター博士が罪を犯したというのなら、神もまたしかり。神とヴィクター博士は、このように否定が否定された結果、イコールで結ばれる存在なのです。希望ヶ峰学園の生徒なら、これくらいは理解しておかないと—

[illegible]」
「ジジェクを読んでお勉強したようだが、どちらにしたところで、アナーキストの書いた本では人類を救うことなどできん。そもそも俺は動機が気に入らん」
「動機？」
「人類絶望をおそれて機械に聖書を書かせるなんざ、三流の動機だ。そんなくだらん不安に襲われる時点で、すでに希望ヶ峰学園そのものが絶望に毒されている。風邪をひいた医者に注射を持たせるようなものだ」
「おかしなたとえですね」
「結局、『聖書計画』を利用されて、『絶望小説』が作られてしまった。絶望すれば、そこにつけ入られるといういい例だ」

「学園は奪われただけですが。好きで絶望に堕ちたわけじゃありません。ぼく同様に」

「同情してほしいのか？　自分の堕落(だらく)を人のせいにするとは、救いようのないクズだな。どれだけ奪われようと、自分の価値は自分で稼げ。自分を救う方法はそれしかない」

「同情というなら、ぼくは希望ヶ峰学園に同情していますが。奪われるというのは、本当に本当に本当に……本っっっっっ当に絶望しますからねえ。きみも今回のことでわかったのでは？」

和夜は視線を、白夜様の隣に座る人物に移しました。

もぐもぐもぐもぐもぐ！

がつがつがつがつがつ！

両手を拘束されているためか、あるいはただの食いしん坊なのか、ケーキに顔面を埋めて豚食いしていた白夜様のニセモノは、自分が注目を浴びていることにようやく気づいたらしく、ゆっくりと顔を上げました。顔も眼鏡もケーキまみれ。

「小豚さん」和夜が声をかけます。「希望ヶ峰学園に在籍する身で『聖書計画』のシステムを奪い、『世界征服宣言』したきみは……何者なんです？」

「おい貴様ら、炭水化物が目の前にあるというのに、何をぼんやりしている。食わんのなら俺がもらうぞ」

混乱のせいで失念していました。十神白夜を名乗るこの肥満児は、白夜様からすべてを奪ったこのニセモノは、だれ？　てっきり和夜だと思いこんでいましたが、それが私だけに向けられたミスリードなのは、和夜本人が舞台に参入してきたことで明らかになりました。それでは今現在、ヘリの中で銃を突きつけられながらケーキを食い散らかしているこの肉物体は、だれ？　十神の関係者？　まったくべつの存在？

「ククク。そんな目で俺を見るなよ」ニセモノはすべての視線を受け止めるように、巨軀（きょく）漢をのけぞらせました。「俺の正体を推理する必要はない。どこにでもいる少年Aにすぎないからな」

「希望ヶ峰学園の内部崩壊は、かなり進行していますね」和夜が云いました。「絶望ハイスクールを名乗る一派は今、どれだけ学園内にい

るのですか？　予備学科による『パレード』を焚(た)きつけたのもきみ？」

「俺の正体を考える必要はないと云っているだろう。俺はただの……そうだな、ただのファンなのさ」

　ニセモノはそう云って、すべての原点であり原典である十神白夜を見やります。白夜様はつまらなそうにニセモノを見返すと、「ファンとはどういうことだ。説明しろ」と命じました。

「俺はずっと、貴様を見ていた。俺にとって『超高校級の御曹司』である貴様は、希望の象徴だった。貴様という希望がいるからこそ、絶望できた」

「倒錯(とうさく)している。あと顔についたクリームをなんとかしろ」

「本物サン、早くこの俺に、十神白夜らしいところを見せてくれ。俺

というファンをよろこばせてくれ。WHCなどという、物語とは関係のないやつを、華麗に撃滅してくれ。そして俺たちの物語を再開させてくれ。希望ヶ峰学園VS.絶望ハイスクールを再開させてくれ」
ようやく告白できてはしゃいでいる少女のようなその目つきが、私が白夜様に向けるそれといっしょだったので、ちょっと、かなり、嫉妬しました。
　白夜様は神様です。
　これは世界の真理なので、あらためて宣言する必要はありませんが、だからといってその真理にしたがう他者を見るのは不快でした。白夜様が神様であるという公然の事実を、私は自分だけの秘密にしておきたいのです。独占欲。ようはそういうこと。
「物語に関係ない、つまり、きみのよう[illegible]白夜様[illegible]

「物語に関係ないのに、きみのほうですか」和夜が眉を寄せずに指摘しました。「きみはニセモノ。ただの小豚ちゃんにすぎません」
「ククク。十神和夜。『十神一族最大最悪の事件』によって闇に消えた子供……。貴様なんざ、ニセモノどころか死に損ないだ。貴様の登場など、だれも求めていない。さあほら、空気を読んで退場しろ」
「ぼくはすべてを奪われました。故郷も、名前も、生命までもね。そんなぼくには、退場すべき場所はありません。だれに何を云われようと、前に出ます」
「一つ聞かせてくれよ。奪われつづける人生は楽しいか？　故郷も、名前も、生命も、そして愛する姉まで奪われる人生は楽しいか？」
ニセモノは最適な皮肉を使えて満足したのか、にやついた顔を私に向けました。この人物を和夜と誤認していたときは吐き気がこみ上げ
ほんとだ、日本がわからなくなった今、どう反応していいのかわから

ましたが「正体がわからなくなった今」どう反応していいのかわから

ず、とりあえず視線をそらしました。

「姉さんは返してもらいます。ぼくが持っていたものはすべて返してもらって、そして今度は、こっちが奪う番です」

「弱小チームの語る逆転劇ほど、人を絶望させるものはないぞ」

「なんとでも。ぼくはこれからすべてを手に入れるんだ。そして十神白夜になるんだ。十神の名にかけて」

「ククク。つまり貴様も、アレをほしがっているわけか」

「十神白夜になるには、アレが必要ですからね。件が必要ですからね」

件。

予言をする牛の化物。歴史の転換期に現れる妖怪。今の

予言する牛の化け物　歴史の転換期に現れる異形　今も生々しく語られる怪異。その意味、その真実は私ごときが理解できるものではないので、個人的な考察は省略しますが、たしかに件は『十神一族の繁栄の秘密』の総体ですから、それを手に入れなければ、十神白夜になったとは云えません。

「答えろよ本物サン。件はどこにいる」

「答えなさい十神白夜。件はどこです」

二人の十神白夜候補からは、しかし件を欲するという気持ち以上に、「どっちを敵と認定してくれるんだ？」という欲望が観測されました。二人とも十神白夜になりたいというより、十神白夜の敵になりたがっているように見えました。

「やれやれ。これだからお前たちはだめなんだ」白夜様はうんざりしたように息を吐きました。「件はすでに封印してある。俺にはそんな

もの不要だからな。件がいなくても世界征服できるし、十神財閥をさらなる高みに置くこともできる」
「じゃあ返してくださいよ」和夜がすかさず云いました。「アレね、ぼくのものなんですから。ぼくが一番はじめに見つけたんですから」
「小僧が何を期待しているのかは知らんが、予言に価値はない。未来を知ったところで、それは変えられないのだからな」

ボルヘス＝検索結果
＃６９０１０９２２
項目　資料
タイトル『件にまつわるエトセトラ（省略版）』
予言の意味が[illegible]な。

予言の意味がおわかりにならないようですな
いくら手をつくしてもどうしてもそれは起こってしまうから予言なんです。
『とり・みき／パシパエーの宴』
「ええそうですね。承知していますよ」和夜は乱れません。「何せぼくは、件の力を実際に経験していますからね。予言の内容が避けられないとしても、対策は打てます。自分の負けが確定しても、被害を最小限に食い止めることはできます」
「敗北主義者だな。いいか小僧、お前は命をたまたま拾われただけの子犬だ。子犬は子犬らしく、段ボールの中でガタガタ震えていろ」
「挑発ですか」
「現実だ。お前が

「現実だ。お前がどれだけ否定しても、現実は変わらない」

白夜様は手首にかかった手錠を、私の首に通しました。そのままぐいと引っぱられ、抵抗する力を持たない私は、ほとんど白夜様に抱きしめられたような状態になります。私の顔は白夜様の胸に押しつけられていました。その鼓動（こどう）がはっきりとわかるほど強く。私は失神（しっしん）しそうなほどの恍惚（こうこつ）状態を耐えるために、舌（した）を噛（か）まなければなりませんでした。

「十神白夜。いったい何を……」

「現実逃避をくり返すお前に、現実を見せつけているんだ。遠慮せずによく見ろよ。この女は、『青インク』は、俺の所有物だ。だから、こんなこともできる」

白夜様は私の頭を引っぱり上げ、そこに自分の頬（ほお）をこすりつけました。すりすりと摩擦（まさつ）が生じるたびに、甘ったるい熱が発生します。私

はどうにかなってしまいそうでした。そして和夜はどうにかなってしまいました。額には血管が浮き上がり、触れてもいないのに眼鏡が震えています。いえ、震えているのは全身。頭のてっぺんから爪先まで、異様なほどに痙攣(けいれん)していました。発狂の気配(けはい)に満ち満ちた痙攣でした。

和夜は体を震わせながら、私たちのイチャイチャにしばらく見入っていましたが、

ヴン！

そんな音が聞こえたと思った次の瞬間には、テーブルがまっぷたつに切断されていました。ケーキとカップが飛び散り、ニセモノは露骨(ろこつ)

に気落ちした声で、「まだ食べてる途中だったのに……」とつぶやきました。

和夜の右手には、ぼんやりと輝く物体が握られていました。

あのときと同じ剣が。

たくさんの兄弟を殺した剣が。

「きみの命を握っているのは……このぼくですよ。今すぐ死にますか？　死にたいんですか？　ええ？」

「フン。なんだそのおかしな剣は。大道芸か」

「いまいましいその口を、今ここで切り取ってやりたいなあ」

和夜は剣を近づけてきます。白夜様は切断の危機が迫る口を、そっと私の耳に寄せると、小声で告げました。

「少しだけ、待っていろ」

そしてようやく私を離します。明らかに性的に逆上している和夜は、ふーふーと荒い呼吸をくり返して、手にした剣を行使する衝動と闘っていました。表情は歪(ゆが)みすぎて、もはや笑っているようにさえ見えました。

「オランダにつくまで、まだたっぷり時間があります。せっかく四年ぶりに会ったんだ。ゆっくりやらせてもらいますよ。ぼくのやりかたでね」

5

このままヘリで行くのかと思ったら、鉄道に乗り換えるとのこと。
私たちが移送された列車は、一見して特別製ということがわかりました。窓には鉄格子。ドアの外には巨大な南京錠（なんきんじょう）。そして乗客のかわりに大量の兵士（ＷＨＯを守る国連軍）が乗りこんでいます。ブルーのヘルメットをかぶった彼らは銃器を提げて、車内のあちこちに犇（ひし）めいていました。いつのまにやら、白夜様も和夜もニセモノもいなくなり、一人ぼっち。今のうちに何かやらなくちゃと思いましたが、やれることなど情報収集くらいしかないので、ボルヘスで内部の様子を調べていますと、集音機能が隣の車両の音声を拾いました。
「うひょ〜。横浜アリーナのロビーくらいの人ごみっすね。今年はサザン、年越しライブやるんすかね？」
「人間風情（ふぜい）が束になろうと、『黄昏（たそがれ）を征（ゆ）きし者（もの）』である俺様を止める

ことはできん……フハハハハハハッ！」
「黙れ。貴様らがしっかりしていないから、国連軍などというつまらん連中に捕獲されてしまったのだぞ」
　私の同期生である澪田（みおだ）さんと田中（たなか）さん、そしてニセモノの三人でした。声を聞いたかぎり、チームワークはぐずぐずのようです。それはともかく、澪田さんと田中さんもまた、希望ヶ峰学園を裏切り、絶望ハイスクールに属しているという事実が、私の足もとをあらためて揺さぶります。和夜も知りたがっていましたが、絶望側についた生徒は、今どれほどいるのでしょう……私以外のすべての同期生が、絶望ハイスクールに属しているのでは？　トチ狂った発想でしたが、現実がこのようにトチ狂っているわけですから、じゅうぶんにあり得る話でした。まあ真偽のほどはともかくとして、私が絶望ハイスクールに

誘われなかった理由は、もはや明らかです。私が白夜様の所有物だから。これ以外には考えられません。つまり彼らにしてみれば、私は敵なのです。最初からずっと。三秒間だけ悲しくなりましたが、べつにいいやと思い直しました。私には神様がいます。あちらの神が何者なのかは知りませんが、白夜様ほどではないでしょう。

やがて兵士の一人にうながされ、個室車両に案内されました。固定されたベッド。固定されたソファ。折りたたみ式テーブル。壁にかけられた絵画。よく効くエアコン……。鉄道旅行に興味のない私には、豪華な独房にしか見えません。ベッドの端に座っているとドアがノックされ、さきほどの兵士が飲み物を持ってきてくれました。オレンジジュース。私をなんだと思っているのでしょう。不満の中で一口飲むと、ひさしぶりの水分で胃が刺激されて、空腹に気づきます。そうい

えば骸骨教会で襲撃を受けてから、まともな飲食をしていません。三島由紀夫に怒られそうですが、あつあつのみそ汁と梅干おにぎりが食べたくなりました。

兵士が部屋から出るのと入れ違いに、和夜が杖をつきながら入ってきました。

義手を持って。

ああ、この子はなんて当たり前の対応をしてくれるのだろうと思い、感激しそうになります。兄……大槻（おおつき）にやられて以降、私はずっと片腕だったのに、それを指摘する人は今までだれもいませんでした。敵にも味方にも。

「やっと二人きりだね姉さん。四年ぶりの二人きり」和夜はテーブルに義手を置くと、ソファに腰かけました。「電車はもうじき動き出すよ。ぼくたちの未来と同じように」

「…………」
「チェコからオランダまでは長旅になる。本当は空から行きたかったんだけど、経由先のドイツが飛行を許可してくれなくてね」
「…………」
「たのむよ姉さん。いじわるはよしてくれ。ぼくは姉さんに会いたくて、声を聞きたくて、今日まで必死に生きてきたんだから」
「……勝ったつもりでいるのね」
「そこまで思い上がっちゃいない。ぼくはまだ勝者じゃない。ただし、これから勝つけど」
「私と白夜様を解放して」
「びっくりしちゃうな。そんなことできるわけないよ。ぼくが勝利するところを、姉さんには特等席で見てもらわなくちゃいけないんだだか

ら……フフ」

「何がおかしいの」

「いや、そりゃおかしいさ。どうしてぼくが、こんな悪役みたいな台詞(せりふ)を云わなくちゃならないのかなってね」

「私たちは、こんなところで油を売っているひまはないの」

「急ぐ必要がどこにあるんだい。世界を騒がせている十神白夜も、事件の黒幕であるニセモノも、みんなぼくの手中にある。姉さんがやるべきことは何もないよ。すべてはもう終わりだ」

「勝ったつもりでいるのね」私はくり返しました。「亡霊(ぼうれい)みたいに今さら出てきて、こんなふうに盤面(ばんめん)をひっくり返して」

「ぼくは亡霊なんかじゃない。手も、足も、心もあるよ。ないのは希望だけ」

「みんなはどこ」
「幽閉さ。十神白夜も、絶望ハイスクールも、78期生も」
アクションをだれも起こしていない以上、車内での反乱がそれだけ困難と判断すべきでしょう。私としては、『超高校級の格闘家』である大神さんが収容されていることが残念でなりません。縮地を使ったり、地雷を踏んでもサヨウナラしない大神さんが自由に動けていれば、なんとかしてくれたでしょうに……。
　列車が発進しました。鋼鉄は最初、ゆっくりとした動きでしたが、やがて速度が増してきて、私たちを運搬するという意思の表明のような勢いで進行します。意外にも心地よい振動がベッドからお尻につたわり、疲労のせいか睡魔が襲ってきたのですが、眠るわけにはいきません。私たちは今、和夜が敷いたレールの上を走っているのですか

ら。

「姉さん、腕を」

和夜が私の不完全な左腕を一瞥(いちべつ)します。拒絶してもよかったのですが、私の腕を気にかけてくれるのは和夜だけという事実に押され、好きにさせることにしました。背中を向けて上着を脱ぎ、肘(ひじ)から下をうしなった左腕をあずけます。

「姉さん……守ってあげられなくてごめん」

和夜は切断面に触れしました。

傷が癒(い)えたとはいえ、そこは皮膚(ひふ)が薄く、私は声が出そうになるのを隠すために、「わ、私にあやまってもしょうがないでしょ」と早口で云いました。

「姉さん以外のだれにあやまれと？」

「あなたが殺したみんなにあやまってちょうだい」

「ぼくが殺したみんな？」

まるでピンときていないような口調。一昔前の小説なら、『ボクガコロシタミンナ？』などと、品のないカタカナ表記で書かれていたことでしょう。

「あなたがその手で殺した兄弟たちや、あなたが虐殺を命じた村人たちのことよ。忘れたとは云わせない」

「よそうじゃないか、そんな意味のない会話……。殺さなければ殺される。それが十神の世界だし、そんな場所にぼくを連れてきたのは姉さんだ」

燃えさかる口無村で和夜を助けたのは私。だそうです。私自身が幼かったこともあっておぼえていませんが、大槻がそう話してくれまし

たし、きっと本当のことなのでしょう。焼け落ちた家のすみで震える和夜の手を、私はしっかりと握った。感触も記憶も残っていませんが、そうらしいのです。ふとした疑問。私はそのとき、右手と左手、どちらを和夜に差し出したのでしょうか。

「口無村で私に助けられたときのこと、ちゃんとおぼえてる？」

「当然さ。何よりも大切な記憶だからね」

「私はあなたに、どっちの手を差し出した？」

「もちろん左手だよ」

何が『もちろん』なのかはわかりませんが、和夜は自信満々で答えました。私はこれ以上の言葉を発することなく、されるがままになりました。義手の装着が終わり軽く動かしてみますと、左腕に吸いつくいた義手は、おそろしくぴったり。十神財閥が作った最新のそれよりも

ずっと、自分の腕のように感じられました。

「姉さん、ぼくのもとに戻ってくる気は……」

「ない」

「即答かい。十神白夜は終わりだってのに」

「終わらない」

「終わりさ。世界征服するために人工衛星を落とし、『絶望小説』をばら蒔いて世界を大混乱に陥れたあげく、ぶざまに捕まって裁判所に連行されるようなやつは、だれがどう見ても終わりさ」

「終わらない」私は上着を羽織(はお)ります。「私に仕事があるかぎり、私に使命があるかぎり、白夜様は終わらない」

そう云って、愛用の万年筆とともに、一冊の書物を取り出しました。現在作成中である伝記、『白夜行』です。私が生きるかぎり、白

夜様は終わりません。もし白夜様が世界に敗北して、この星から消えるようなことがあったとしても、私が『白夜行』を書きつづけるかぎり、十神白夜は終わらないのです。終わらせるものですか。

「フフ。『白夜行』ねえ。敗北者の伝記なんて、いったいだれが読むんだい」

「記述することが大切なの。読まれなくてもいいの」

「その種の傲慢（ごうまん）を行使するのなら、ぼくの傲慢もみとめてくれるよね。ぼくの物語では、ぼくが主役だ。奪われてきたすべてを返してもらって、さらには他人どもからすべてを奪ってやるんだ。そして世界の真ん中に胡坐（あぐら）をかくんだ」

ここにきて、私はようやく気づきます。

もしかして和夜も、世界征服をたくらんでいるのでは？

「あなたは一般人よ」私は急いで云いました。「国連の職員にすぎない人間が、世界征服の野望を持つのはゆるされない」

「国連の職員にすぎないぼくはこれから、十神白夜を牢屋に押しこみ、十神白夜のニセモノを屠殺し、『絶望病』を解決する。世界はぼくをヒーローと見なすだろう。さらには予言する牛である件を手にすれば、ぼくは十神白夜になれる。フフ。あとはわかるよね？」

世界の危機を救い、『絶望病』のシステムを掌握し、件を手に入れ、十神白夜として新生することができれば、それは『言葉遊び』などではない、本物の世界征服と同義ではないでしょうか。領土やカネや核がなくとも、世界管理ゲームに参加できる。和夜はそれを立証す

るつもりではないでしょうか……。
かたん。線路に傷でもあったのか、下腹部が持ち上がるように揺れました。ふと見ると、コップからオレンジジュースが飛び出して、天井に広がっています。えっ？　と思った次の瞬間には、私をふくめたすべての景色が、まるで洗濯機にでも突っこまれたように回転しました。

6

目を覚ましたとき、世界は反転していました。そなえつけのベッドやソファは上にあり、私は床となった天井に倒れていました。耳鳴りがキーンと響き、周囲のすべてが自分と無関係な概念のように見えま

した。こういうときはたいてい、『どれくらい気絶していたのだろう。一分だろうか。一時間だろうか』とか、『全身を打ちつけたようだが、はたして大丈夫だろうか』とかいった考察がはじまるものですが、私の場合はボルヘスが、即座に情報をあたえてくれます。気絶していたのは三分と十一秒。左肩と右太腿(ふともも)を打撲して右膝(ひざ)から出血しているが活動には支障なし。とのことでした。頭はまだぼんやりしていますし、体も痛むので寝ていたいところですが、そのような贅沢(ぜいたく)はゆるされません。私は無理やり立ち上がると、壁にできた穴をくぐって個室車両を出ました。やはり天地が逆になった一般車両では、たくさんの国連兵が折り重なっていました。ミルフィーユのように層を成す人体の隙間から、血まみれの腕や脚がにょきっと突き出ています。ひしゃげた車両のドアをこじ開けようとしましたが、南京錠のせいで開けることができず、窓にも鉄格子があるため出られません。放心しか

けましたが、個室車両に引き返して割れた窓に視線をやりますと、そこには鉄格子がありませんでした。ガラスの破片で体を傷つけないように注意しつつ窓を乗り越え、外に出ます。

ぎらぎらまぶしい太陽の輝き。今日も暑くなりそうです。青空の下には、見渡すかぎりの牧草地。腰の辺りまでのびた緑の草が広がっているだけで、家も牛舎もありません。あるとすれば、延々とつづく一本の線路くらいでしょうか。私が乗っていた車両は、遠心力によって線路から大きく外れ、そのまわりには国連兵の死体が大量にありました。いやな予感がした私は、車両の陰に隠れます。まもなくやってきた一団は、触手のようなものを蠢かせて、まだ息のある兵士を見つけるたびに、触手の先端で咽喉をつらぬき、確実に殺して回っています。そのうちに、地響きのようなものが聞こえてきたので、ボルヘス

をズームさせてみると、森の奥から何かが迫ってくるのが見えました。ウラガン（＃４１９０８８７０）です。両脇にジェットエンジンをつけたその兵器は、どういう意図（いと）があるのかは不明ですが、まるでお団子のように、三台の車両を縦に重ねていました。池のある公園に行くと、亀が積み重なっている光景を目にしますが、あれによく似たものが、土煙を上げて向かってくるのです。そしてエレキギターの音。

「もったいぶらずに残存勢力全部投入っ！　というわけで、むだな抵抗はやめて、十神白夜を差し出してください。さもなくば、無意味な死をさらに拡大させますよっ！」

　ウラガンのてっぺんに立つ妙子（たえこ）ちゃんが、ギターを弾きながら騒ぎ

立てています。どうやらまたしても初瀬川研究所のお出まし……じゃなくて、傘森でしたね。

ボルヘス＝検索結果
♯２１２９１６００
項目　企業
タイトル『傘森製薬工業』

創業者、傘森健悟により明治三十二（一八九九）年に設立。医療用医薬品の販売を主力とし、大正九（一九二〇）年にドイツのネオゲヒルン社と吸収合併を果たし、事実上、製薬業界のトップに立つ。第二次世界大戦における日独の敗戦により、国外の資産と設備

をすべてうしなうも、『画期的な抗癌剤（こうかんざい）』とうたわれたフェルクナム錠２２０の製造・販売で業績をＶ字回復させたが、薬の副作用により死亡した患者の遺族らによる集団訴訟（フェルクナム訴訟・一九九八年）に敗訴し、多額の賠償金と風評被害も追い討ちをかけ、経営状態の極端な悪化が噂されている。

妙子ちゃんの要請をＷＨＯが聞くわけもなく、生き残った国連兵たちが、きびきびとした動作で車両から飛び出してきました。触手を背負った兵隊……『触手部隊（テンタクルズ）』も銃をかまえ、そしてはじまる銃撃の応酬（おうしゅう）。二つの軍隊がまともに撃ち合いをしているため、私は足止めを食らいます。比喩でもなんでもなく弾丸は雨のように降っていて、動ける状況ではないのです。アクション映画では、『主人公が無防備に飛び出しても、なぜか弾に当たらない』という奇跡が起こりますが、

さすがにそのような自信はありませんし、何より私の物語において、主人公は私ではなく白夜様なのです。

弾丸の飛び交う音を聞きながらじっとしていると、車両からガタンと音がして、

「姉さん」

隙間から和夜が這い出てきました。和夜の無事が確認できて安心したことを隠したかったのでしょう。気づけば私は、「ほっといてちょうだい」とツンツンした態度をとっていました。

「ほっとけるわけないだろ。銃撃戦の最中に、姉を放置できる弟がいるなら、見てみたいものだよ」

「私は大丈夫だから」

「何も変わってないんだね。姉さんはいつだってそればかりだ。まるで呪文みたいに、大丈夫大丈夫って……」
「それより傘森をなんとかしないと。白夜様をねらってるの」
「知ってるよ。薬屋がWHOに盾突こうってんだから、世も末だ。飼い犬に手を噛まれるとは、こういうことを云うのかな」
「傘森が初瀬川研究所の名を騙(かた)っていたことには、いつから気づいていたの？」
「姉さん、何を云ってるんだい」

「え？」
「傘森が騙っていたのは、エルウッド研究所だよ」
そんな組織は初耳なのですけど。なんでしょうか、この得体の知れない気持ちは。以前、クラスのみんなが『日本沈没』の話をしていた

とき、ずいぶん古い映画のことを話題にしているなと思いつつ会話に参加したのですが、そのうちみんなが『日本沈没』のリメイク版について話していることに気づき、ストーリーはいっしょなのに、私の知っているオリジナル版とは細部が異なっているため、パラレルワールドに迷いこんだような感覚になったことを思い出します……いえ、そんな生易しいものではありません。譬(たと)えるなら、学芸会のお遊戯(ゆうぎ)で、私だけべつの脚本を読んでいたことに本番直前になって気づいたときのようなおぞましい戦慄(せんりつ)……。

「これではっきりした。ドイツの空を封じたのは傘森だ。傘森製薬工業なんて名前だけど、資本の大半はドイツにあるからね」

分析にいそがしい和夜は、私の不安に気づいてくれません。なので強引にモードを戻し、話に乗ることにしました。

「でも海外の資産はなくなったはずじゃ」

「隠してただけさ。そして傘森の役員は、今やドイツの政治家だらけ」
「その人たちが働きかけて、飛行を禁止にしたっていうの？」
「ああ。この列車がドイツに入る前に、すべてのケリをつけるためにね」
「そこまでしてほしいものが……」
「件というわけ」和夜はうなずきます。「だれもが十神白夜から、件の情報を聞きたがっている。そして傘森は本気だ。件のためなら、何をするかわかったもんじゃない。姉さん、早くここを離れよう」
「白夜様はどこ」
「それより自分の心配をしたほうがいい。十神白夜については、ぼくの軍にまかせておけば問題ないよ」

「白夜様はどこ」
「だからぼくの軍に……」
「白夜様はどこ」
「やんなっちゃう」和夜は短く息を吐きました。「十神白夜なら、先頭車両さ」

「助けなくちゃ」
「その必要はない。こんなことになってしまったけど、列車の物理的なセキュリティは完璧だ。先頭車両の窓はすべて格子つきで、ドアには外から南京錠をかけている。外側から干渉することはできない」
「助けなくちゃ」
「ねえ、さっきから耳あるのかい。セキュリティは完璧なんだって。危ないのは姉さんのほうなんだって」

「それでも助けなくちゃならないの。それが私の生きる理由だから。白夜様のことを見て、書いて、守る。それができなかったら、私は存在する意味がないの」

「くだらない幻想」

「嫉妬ならやめて」

「……助けに行くっていうのなら、姉さんをほっておけない」

「ほっといてちょうだい」

私は先頭車両に向けて駆け出しました。まわりでは銃撃戦が展開されていますが、私を気にする余裕はどちらの勢力にもないらしく、白夜様のいる先頭車両へと、順調に進むことができました。ふと、78期生と絶望ハイスクールのことが頭をよぎります。混乱に乗じて出てこないところを見ると、おそらくまだ車両に閉じこめられているのでし

ょう。たしかにセキュリティは完璧のようです。

どさっ。という音がしたのでふり返ると、和夜が倒れていました。撃たれたのかとあせりましたが、転んだだけのようです。ただそれにしては雰囲気(ふんいき)が妙でした。生まれたばかりの鹿(しか)のように、立ち上がろうとしてはまた倒れてしまうのです。和夜があの日のままの、とても弱い子のように思えて、私はつい立ち止まってしまいます。

「燃えさかる十鴉城(とうあじょう)で、左脚をチキンのように焼かれてね」和夜は苦笑しました。「筋肉から神経まで、すっかりやられてしまったわけ。杖をなくしちゃって、歩くのもままならない」

数人の『触手部隊(テンタクルズ)』がこちらに気づき、どこかに連絡を入れています。私は少しだけ考えて、今は義手となった左手をのばすと、和夜の左手がそれを握りました。私の左手はもう、何も感じることができません。

「ありがとう、姉さん」
「……肩は貸さないわ」
「かまわないよ。ぼくはもう、だれの力も借りないから」
「見つけましたよ『青インク』さんっ！」
妙子ちゃんの声。縦に積み重なったウラガンは私たちの前にやってきて、二基×三のジェットエンジンを噴射（ふんしゃ）しました。地面にできたクレーターは、威嚇（いかく）としてはじゅうぶんすぎるものでした。
「正直に答えていただければ、命は助けましょう。十神白夜はどこにいますかっ！」
「あなた、初瀬川研究所の人間じゃないんでしょう？」
「は？　急にわけのわからない話をされてもこまりますけど」
妙子ちゃんの態度を見るかぎり、韜晦（とうかい）しているわけではなさそうで

す。それはつまり、私の云っていることがわからないということ。私の発する言葉が正常ではないということ。私は私を信じてはいけないということ……。

「十神白夜の居場所を明かさないというのなら、用はありません。こっちとしても、もはや人質をとる余裕はないので、死んでいただきます！」

すべてのジェットエンジンが回転をはじめます。私は和夜の手を引いて車両の裏側へと走り出そうとしますが、車両そのものが紙細工のように吹き飛ばされてしまいました。

「逃げ場なんてありませんよ」

妙子ちゃんの言葉は正しく、隠れる場所は見当たらず、さらにはは

げしい戦闘によって、今や牧草地全体に弾丸の雨が降っていました。こうなってしまうと、白夜様のいる先頭車両に近づくなんて夢のまた夢。まずは生きのびなくちゃ。私と和夜は手をつないで走り出します。

「もっと早く逃げないと、吹き飛ばす前に踏み潰してしまいますよっ！」

そうはいっても、ここで和夜の手を離せるほど薄情(はくじょう)ではありませんし、さらには『触手部隊(テンタクルズ)』と国連軍の撃ち合いと鉢合わせしました。両軍はおたがい正面を向いて、ベタ足ついてのタコ殴りをしています。後方から迫るウラガンは、地面のあちこちに穴を開け、そのたびに多くの死体が作られました。はたしてこれを、戦闘と呼べるので

しょうか。命を無意味に搾り出しているだけではないでしょうか。最後の一人になるまでの潰し合い。なんでもありの地獄絵図。

そのような地獄を軽々と飛び越えてしまうのが、

「おまっとさんでしたーっと！」

兄なのです。

7

観光バスが森の奥からやってくる情景は、三台積まれたウラガンに勝るとも劣らない非常識っぷりでした。どこから奪ってきたのか知りませんが、観光バスを運転する大槻はこれ以上ないほどの笑顔で、楽しそうに歌っています。ボルヘスの集音機能で盗み聞きしてみると、それは童謡(どうよう)なのでした。

『バスごっこ』

作詞　香山美子

作曲　湯山昭

おおがたバスに　のってます

きっぷをじゅんに　わたしてね

おとなりへ　ハイ　おとなりへ　ハイ

おとなりへ　ハイ　おとなりへ　ハイ

おわりのひとは　ポケットに！

「ドハハハハハハ！　停滞する物語に吹く一陣の風！　元『超高校級

の殺し屋』こと、大槻涼彦ちゃんの参上だよ～ん。邪魔するやつは指先一つでダウンロードだよ～ん。クリック一つで多重債務だよ～ん」
とてつもない速度で走る観光バスは、国連兵も『触手部隊』も平等に轢き殺し、車輪に死体を巻きつかせながら近づいてきます。
「次とまりまーす！　とは云ってみたけど、このバス、強奪するときにブレーキ壊しちゃったから減速できないぜ」
観光バスはたしかに速度を緩めることなく、ノーブレーキで列車の一つに激突しました。ご丁寧にも観光バスの車内にはたっぷりの火薬が積まれていたらしく、地面を揺らすほどの大爆発が発生します。熱風と衝撃によって、私と和夜は一気に飛ばされ、さらには……おもちゃ遊びに飽きた子供がミニカーをぶん投げるように……まわりにあった列車の車両も吹き飛びました。兄のやりくちを知っている私は、あ

わてて観光バスを確認します。車体は炎に包まれ、運転席のまわりは破れたアルミホイルのようにべろりと裂け、大槻の姿はどこにもありません。

　悲鳴が聞こえました。それは断続的で不規則なものでした。田舎に行くと、カエルの合唱は聞こえるのに姿が一匹も見えないというシーンに遭遇しますが、あれと似たようなもので、悲鳴はいくつも聞こえるのに、その実体がまるで見えないのです。国連兵も『触手部隊（テンタクルズ）』も戦いを中断して、あちこちに視線と銃口をさまよわせていますが、だれも大槻を見つけられず、そのあいだにも、「ぐっ」「がっ」「うっ」「ぬっ」「ぶっ」「むっ」「ぎっ」「ずっ」「ふっ」という短い悲鳴はつづき、やがて私のまわりに立つ兵士の大半がくずおれ、地面に膝をつきました。彼らの胸や首からは、赤々とした鮮血（せんけつ）が流れていました。草叢（くさむら）に身を隠しながら死体を作って回る大槻を発見・殺害す

ました。頭は以前隠しておいた死体を使い、同じく大槻を実い、殺害こ
るため、兵士たちは躍起になっていますが、元『超高校級の殺し屋』をとらえることはできず、死体は量産されるばかり。そのような中、かくれんぼに飽きたように牧草地から飛び出した大槻は、一気にウラガンを駆け上がったかと思うと、妙子ちゃんの正面に立ちました。そのときすべては終わっていました。

「るぅ」

妙子ちゃんの口から、そんな言葉が漏れました。あるいは首を切断された拍子に、声帯が震えただけかもしれません。どちらにせよ、今際の際の一言としては、まったく意味を成さないものでした。大槻がナイフを一閃すると、妙子ちゃんの胴体はバラバラになり、手首や足首や内臓や下着が、熟れた実のようにウラガンから落下します。

「ドハハハハハ。才能の差を惑じずにはおれんな」

[illegible]」

傷一つ……いえ、返り血の一滴すら浴びていない大槻は、仕事に満足したような顔つきで、自分の所業を見下ろしていました。それを妨害する者はいませんでした。『触手部隊（テンタクルズ）』も国連軍も全滅していたからです。

「おい出てこいよ。生きてるのは身内だけ。腹を割って話そう」

大槻はナイフを回しながら云いました。

私と和夜は、このときばかりは仲間のようにうなずき合い、牧草地から立ち上がります。私たちの様子をウラガンのてっぺんから見ていた大槻は、なんのつもりか肩をすくめました。

「ひさしぶりの家族水入らずだな。よう忍（しのぶ）。プラハじゃまるで話せなくて悪かった」

「今までどここ……」

「今ま[illegible]は」
　左目から涙がこぼれ落ちそうになるのを防ぐため、私は言葉を発しました。
「そりゃオレの台詞だぜ。いきなりセンスの悪いガッコが出てきたと思ったらいきなりぶっ壊れて、ヘリで飛んで行くんだもの。しかも和夜クンまで出張ってきて」大槻は視線を和夜へとスライドさせます。
「よう和夜クン。四年ぶりか。あいかわらずじゃねーか。あいかわらずのクソったれで、あいかわらずの権力大好きっ子」
「あんたも、あいかわらずだ……。またぼくの邪魔をする気か」
「また？　邪魔？　連続してアホ云っちゃいかんな。助けてやったんだよ。今も昔も」
「それが邪魔だと云ってるんだ。ぼくは世界保健機関疫病対策委員実

行部隊隊長だ。四年前とは違う」
「自分のケツは自分で拭くってか？　ドハハハハハ！　そういうのはオムツが取れてから云えっつーの！」
「ぼくはもう子供じゃない」
「いやいや、未成年は子供だろ。子供なら子供らしく、このオレという壁を乗り越えてみなさいよ」
「父親（オイディプス）気取りか？」
「もしそんな質問されて、YESって答えるやつがいたら、そいつはとんだインチキ野郎だと思うぜ。あとオレは父親でもインチキ野郎でもなく兄だよ。ま、テメーは血がつながってないけどな」
「あんた、どうしてチェコにいるんだ。まさか今さら件がほしくなったわけじゃないだろ」

「生の予言にゃ興味ないね。オレはただ、白夜クンの暗殺を依頼されただけさ」
「だれに」
「答えると思ってんのかよ」
「それ、嘘だろ？」和夜は云いました。「あんたは自分の意思でチェコにきて、自分の意思で今回の事件に巻きこまれたんだ」
「ふーん。なんでそう思うわけ？」
「直感」
「直感だけじゃ論破できないぜ和夜クン。そんな調子だから、あのときも探偵にやられちまったんだぜ」
「あの探偵、どうなったか知ってる？　死んだらしいよ。犬みたいに」
「興味ないね」

「興味ないね」
「じつはぼくもそうなんだ。探偵が死んだことを聞いても、ちっとも心が動かなかった。変なものだよね。あんなにムカついてたのに。あんなに執着してたのに」
「執着してなかったのさ、最初から」
「自分の気持ちを理解するまで、こんなに時間がかかるとは思わなかった。……で、あんたは自分の気持ちをわかってるのか？」
「オレの目的はただ一つ。仲直りさ」大槻はウラガンから飛び降りて着地を決めこむと、妙子ちゃんのバラバラ死体を跨(また)いで、私たちの前に立ちました。「ま、あれだな。『山の奥で仇讐(きゅうしゅう)同士がめぐり合った　誰も居ないので　仲直りした』ってやつかね。兄弟はみんな死んじまって、生き残ってるのはオレたちだけ。もはや十神は、オレたちを縛ることまでできない。十神はオレたちを争わせる動機にならない。

だったらさ、フツーに仲良くしようぜ」
「本気で云ってるのか……」
「もちろん」
「だとすれば、どうかしている。すべてを壊したのはあんただぞ」
「マジでそう思ってんの和夜クン。だとしたら、テメーのほうがどうかしてる。壊したのはテメーだろ」
　和夜と大槻の意見が真逆なのは当然のことでしょう。なぜなら私たちを破壊した原因は、三人それぞれにあるからです。大槻は私を壊して、和夜も私を壊して、そして私は……大槻と和夜を壊しました。私たち三人がくっつけば、ふたたび破壊がやってくるのは目に見えています。なのに兄と弟は、それが理解できないのです。昔からずっと。
「勝手に話を進めないで。私はだれのもとにも戻らない。あなたは十

神須彦じゃなくて大槻須彦　あなたは十神和夜じゃなくてスルザン・エレベーター。みんな他人なの。関係ないの」
だから私は兄と弟に対して、このように残酷な言葉をぶつけるしかありませんでした。
「悲しいこと云ってくれるじゃないの、妹ちゃんよ」大槻は動じません。「名前なんざ、どーでもいいね。オレとテメーの関係性は、名前すら超越するのさ」
「名前は大切よ。私は十神忍。『超高校級の書記』であり、白夜様の所有物。だからあなたにはもう……優しくできないの」
「ドハハハ。細かいこと云うなよ忍。また昔みたいにラブラブしようぜ？」
「やめろ」
そう云ったのは白夜でした。白夜は一歩前に出ると、右手から剣の

そう言ったのは和夜でした。和夜は一歩前に出ると、右手から例の剣を出現させて、大槻の前に立ちはだかります。

「あのなあ和夜クン。兄に勝てる弟がいるわけねーだろ。そんな物騒なモンはしまって、兄弟仲良く遊ぼうぜ。何がいいかな。チェスとかトランプとか？　ＵＮＯなら持ってきてるけど……」

「あんたの呪縛（じゅばく）から、姉さんを救うんだ。このぼくが。ぼくの力で」

和夜は蛍光灯（けいこうとう）のように輝く剣を、大槻の首に突きつけます。それでも大槻はニヤけた表情を崩さず、「やれやれ。こりゃ修正してやる必要があるな」とつぶやき、まだ血に濡れているナイフをかまえました。

ひゅるるるるるるるるるる。そのような音が聞こえた刹那、私たちの周囲が燃え広がりました。焼夷弾（しょういだん）によって火に包まれたのです。因果を焼くほどの熱気に、炎による市街の壁があたりに出現し、

す。咆哮を焼くほどの熱気と、炎による橙色の壁があたりに出現し
牧草地は新たな地獄絵図に塗り替えられました。しかもこれは兄のし
わざではないらしく、「なんじゃこりゃ」と大槻は不思議そうに天を
仰ぎ、そして和夜は、
「あああああああああああああ」
震えていました。

ボルヘス=検索結果
#9908892
項目　症例
タイトル『フラッシュバック』

心的外傷後ストレス障害。災害・事故・事件などによる、強烈な

心的外傷後ストレス障害　災害、事故、事件などによる強烈な心理的ストレスを受けたあとに起こる精神障害。トラウマの要因となったできごとや情景を脳が再現し、症状がひどい場合は錯乱状態を引き起こすこともある。

口無村と十鴉城で、二度にわたる火災に遭遇した和夜は、燃え広がる炎を見て、たしかに錯乱状態に入っています。剣はいつのまにか消え、目から口から情けない液体をたれ流し、体を支える力をうしなった膝が地面につきました。ああ、和夜が、和夜が苦しんでいる。なのに私はこの隙を利用して逃げようとしている。私は自分の薄情さをじゅうぶんに理解しつつ、その場から駆け出しました。何が起きたのかは不明ですが、私がやるべきことは一つだけでした。白夜様のいる先頭車両に向かう。それだけでした。

「待って、カズ

「待てよ[illegible]」
大槻が追いかけてきますが無視。焼夷弾が戦争映画のように落下する中を走り、ようやく先頭車両についたとき、そこにも炎は回っていました。赤々とした火焔が車両の表面を覆い、今にも内部に侵食しそうです。車両のドアを開けようとしますが、外から施錠された南京錠が邪魔でどうにもなりません。私は声にならない声を上げながら南京錠を殴りつけますが、無慈悲な鋼鉄はびくともしません。いつのまにか隣にいた大槻がナイフを一閃すると、南京錠は豆腐のように切断されました。
「白夜様！」
車内はすでに灼熱状態で、危険なレベルの熱気に支配されていました。私は駆け足で進みますが、白夜様の姿はどこにもありません。

べつのドアから逃げたのではと思いましたが、ためしにそこを開けようとしても南京錠によるロックがかかっています。なのに白夜様はいない。白夜様。白夜様。白夜様。どこにいるの白夜様。私はその名を叫びながら車両を走り回りますが、姿を見つけられません。そんな馬鹿な。ここから出られるはずもないのに……。

　そのとき、うなるようなエンジン音が聞こえました。私は強烈なデジャブを感じて、あわてて先頭車両から飛び出します。すると炎の壁を掻い潜って、黒塗りのメルセデス・ベンツが迫ってくるではありませんか。私はこれを知っている。この光景を知っている。次の展開も知っている。やがてメルセデスが予想通りに横づけされ、予想通りに運転席の窓が開きました。

「坊ちゃーん！　乗るかい？」運転席の男は、どうしてそうなのかは口のはしをしぼ、最高に楽しそうでした。「うん」坊ちゃ　しまご

知りませんが、最高に楽しそうでした。――あれ？　坊ちゃんはどこ？」

選択の余地なし。

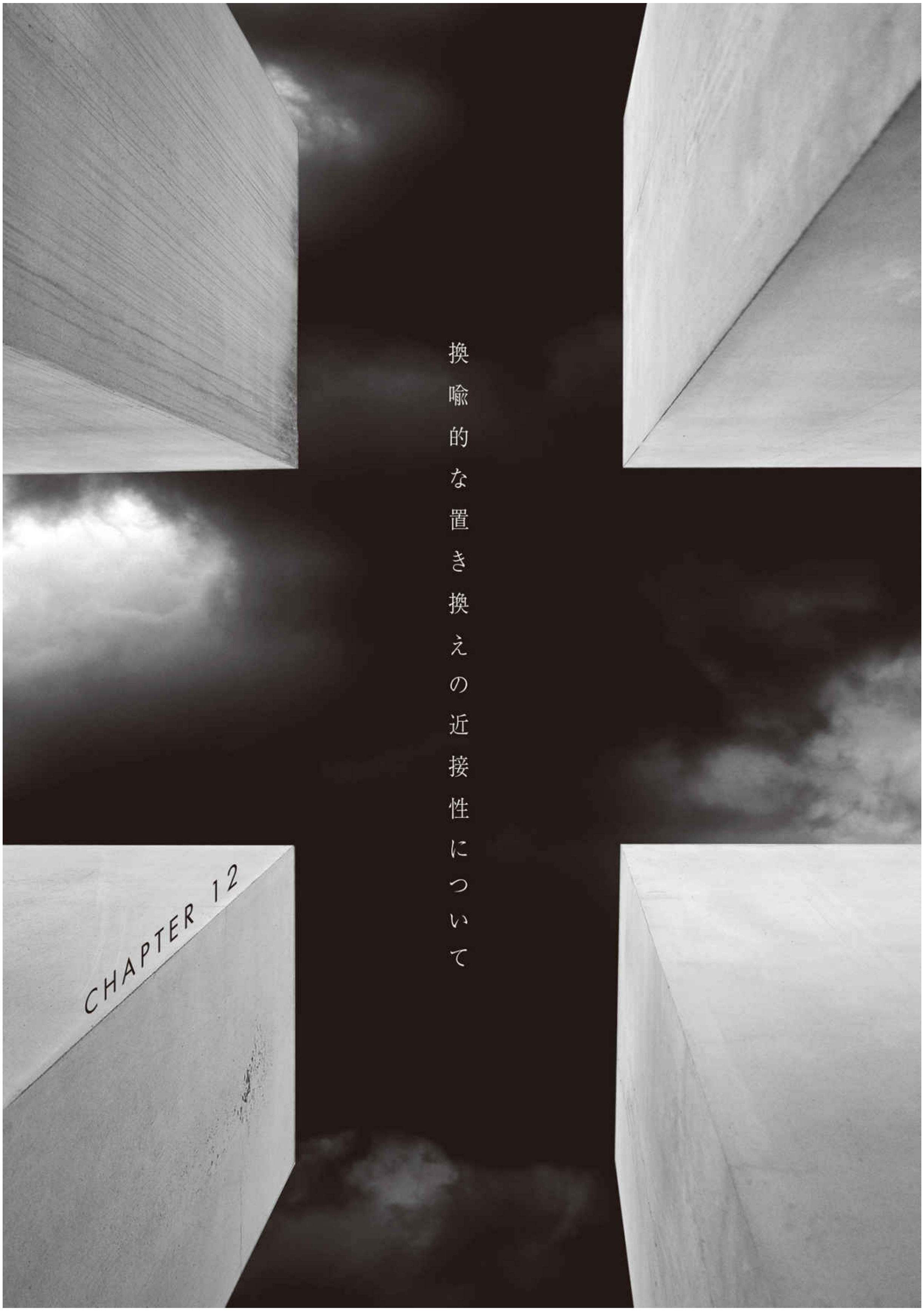
私は後部ドアを開けると、メルセデスに飛びこみました。

「早く出して！」

「ぞくぞくする命令をありがとう、お嬢さん」

アクセルが踏みこまれ、メルセデスは急発進しました。大槻がぞっとするほどの速度で走ってくるのが見えましたが、「ぽちっとな」と運転席の男がドクロボタンを押すと、車の後部にジェットエンジンが出現し、さらに速度を上げました。牧草地も、空も、炎も、そして大槻も、すさまじい加速によって輪郭（りんかく）が消え、動体視力ではとらえることができません。

シートベルトを失念していた私は、車内のあちこちに体をぶつけながら、自分の頭が壊れはじめているのを感じました。



CHAPTER 12

換喩的な置き換えの近接性について

1

「奇想天外な話なんだよ」
祁答院財閥の御曹司、浩之さん……というのは嘘らしいですが……は、うれしそうな笑顔を浮かべて運転しています。
「とにかく奇想天外なんだ。こんなことってあるんだね。大記録だ。無呼吸の世界記録は、ゴラン・コラクの二十二分三十秒だけど、僕なんてそれどころじゃない。まず水中に沈んだ車から抜け出すのに……」
浩之さんの戯言をすべて聞き流す私は、後部座席に背中をあずけて、流れる景色をぼんやりと視界に入れていました。あいかわらずの牧草地で、地平線には森しか見えませんが、線路はすでになくなって

います。現在地点が気になりましたが、ボルヘスを使う気力もありません。
「お嬢さん、しょんぼりしてるみたいだね」
「白夜様が消えてしまったのですから……」

「ゴラン・コラクに乾杯！」浩之さんはダッシュボードから、ピルスナー・ウルケルを取り出しました。「坊ちゃんから連絡は？」
「ありません」
「うまく逃げおおせたんだろう」
「だとしたら、どうして私に連絡してくれないのでしょう」
「僕みたいな外野に居場所がバレるのを、危惧（きぐ）しているのかもしれない」
「あなたは、祁答院浩之じゃないのでしょう？」

「僕の正体が何者かなんて、考えてやる必要はないさ」
「白夜様のニセモノも、似たようなことを云っていました。馬鹿馬鹿しいです。大切なのは本物だけなのに」
　チェコにきてからというもの、本物に出会っていません。我こそは正真正銘（しょうしんしょうめい）の本物なり。と叫ぶ人たちは、次々とメッキが剝（は）がれ、あるいは自らメッキを剝いで、己がニセモノであることを露呈（ろてい）させ、死んだり消えたり殺されたりしています。私は私が私であることを、十神忍であることを正しく認識していますが、裏を返せばそれ以外のすべてが疑わしくなっていました。ここはじつはチェコではなくＶＲ空間で、本当の私はゴーグルをかぶってベッドに寝ているという寒いオチだったとしても、びっくりしないでしょう。とはいえ白夜様の伝記……『白夜行』に嘘を書くつもりはないので、私が見ている現実が

フェイクだとすれば、今回の冒険は消去しなければなりません。現実を、希望も絶望も介入させず、ありのままに書く。こう表現すると在庫管理のようで、そこに味気なさを感じる人もいるでしょうが、しかしこれが伝記の本質。話を盛ってしまっては、それはもうフィクションといっしょです。白夜様はすでに完成されていました。エピソードをくわえたり削ったりする必要はどこにもありませんでした。

「このお嬢さんは、自分だけは綺麗だと思いこんでいらっしゃる」浩之さんはピルスナー・ウルケルを一口飲みました。「きみはたしかに、『超高校級の書記』という自分の仕事に潔癖だ。だけどきみ自身が完璧ってわけじゃない」

「私ほど本物とニセモノを正しく区分けしている人間はいないと思っていますが」

「きみがはじめて好きになった本は？」

「なんの話です？」
「いいから答えてよ。きみがはじめて好きになった本は？」
「……『どろんこぶた』ですけど」
アーノルド・ローベル作。岸田衿子訳。泥の大好きな小豚が都会にやってきて、泥と勘違いしてセメントに入ってしまう愛らしい物語。幼い私にとっての睡眠導入剤。
「ふーん。きみはその本を、ママに読んでもらったわけだ」
「文字が読めるようになってからは、自分で読みましたが」
「原書で？」
「まさか。だって私が子供のころの愛読書なんですよ」
「『I LOVE YOU』を『月が綺麗ですね』と日本語に訳したアレじゃないけど、意訳というものは生じてしまう。オリジナルを読まずに、

それを好きだと云っても大丈夫かな」
「そりゃ、ニュアンスは多少違うかもしれませんが、微々たるものでしょう？」
「声優が交代しただけで、『全然違う。こんなものはニセモノだ！』と騒ぐ行為を正義だとすれば、本は原書で読まなければならない。逃げることなく、恐れることなく、原文に立ち向かわなくてはならない」
そこまで潔癖を推し進めたら、翻訳も現代語訳もすべてニセモノということになってしまいます。量子力学をやるわけではないのですから、観測者（翻訳者）の介入によって変化する現象（本）について、そこまで神経質になるのはいかがなものでしょう……あ、でも最近、

カフカの『変身』の新訳を読んだのですが、以前に読んだものと読後感が違っていたのを思い出しました。グレゴール・ザムザの仕事に対する疲労や苦悩が、なんだか薄っぺらく感じたのです。

ボルヘス＝履歴参照

＃２３２３２３００

タイトル『私の読後感』

ああ、なんという骨の折れる職業を自分は選んだんだろう、と彼は考えた。明けても暮れても旅ばかりだ。

（一九六八年発行　中井正文訳）

「まったくもう」と彼は考えた、「なんて、ストレスのかさむ仕事を選んじまったんだろう！　明けても暮れても出張、また出張。

（二〇〇四年発行　山下肇・山下萬里訳）

「ではここで、おもしろい話を一つ」浩之さんが云いました。「とある偉いお坊さんが、『般若心経（はんにゃしんぎょう）が日本語訳されなくてよかった』とおっしゃった。理由をたずねると、お坊さんはこう返された。『念仏を途中で切り上げても、だれにも気づかれないからさ！』」

「よくできた小話ですけど……」

「残念ながらこれは創作じゃない。現職のお坊さんが、あろうことか仏教雑誌に書いたエッセイから引用したエピソードなんだ」

「とんだ破戒僧（はかいそう）もいたものですね」

「原文を学ばないかぎり、どこでどんなふうに編集されているのかを

知るすべはないってこと」
「そうは云いますが、サンスクリット語やチェコ語なんて普通は読めませんし、日本語だって古典となると無理です。私は『源氏物語』を、橋本治さんの訳で読みましたから」
「まさかの橋本訳！」浩之さんは肩をすくめました。「谷崎潤一郎訳。田辺聖子訳。瀬戸内寂聴訳……。『源氏物語』は多くの作家が、現代語訳という名のノベライズをやっているよね」
現代語訳とノベライズをいっしょとするその傲慢な意見を、私はあきれる一方で感心もしました。たしかに両方とも、皿から皿に移し替える単純作業ではなく、各作家の個性や意向……大胆な解釈であったり、大幅な編集であったり……によって、内容がかなり変わってしまいます。そしてそれは私が伝記に求めるものとは大きく違っていまし

た。私の書きたい伝記は、真実の写本（しゃほん）。真実のできごとだけを紙に転写させた写本。執筆者である私の意識すら排除した完璧な写本。求めているのはそれだけでした。現代語訳もノベライズも、執筆者の存在によって内容に変化が生じるわけですから、それは犯罪現場に生ゴミをぶちまけるのと同じくらいに破廉恥（はれんち）な行為です。そういう意味では『白夜行』に、お手本となる書物は一冊もないのかもしれません。私のやろうとしていることはどうやら本当に、量子力学の領域なのかもしれません。まあそれはそれとして、

「この車、どこに向かってるんですか？」

「とりあえず一番近い町だよ。名前ならナビに書いてある。えっと、でもなんて読むんだろ。チェコ語は難解だなあ。カ、カル、カルロヴィ……」

「ああそこなら知ってます。有名な温泉リゾート地です」
「おんせん」浩之さんは運転中にもかかわらず、こちらをふり返りました。「温泉だって！　文学臭ただよう下巻がピンク色に染まった！　盛り上がらずにはいられない！」
「でも飲泉ですよ」
「ん？」
「お湯には入らないで、温泉を飲んで健康になろうって風習なんですチェコは」
「……こんなにがっかりしたのはいつぶりだろう。美女木（びじょぎ）ジャンクションや乳頭（にゅうとう）温泉の真実を知ったときよりもがっかりだ。温泉のよさを、ヨーロッパ人にもわかってほしいもんだね！」
温泉には各国それぞれの特色があるのに、自分の理想と違うだけでノーと云うのは、神社仏閣（じんじゃぶっかく）や和食について、『このよさは日本人にし

人と云うのは、神社仏閣や和食について『このままでは日本人はしかわからんよ』と公言する人たちと同じくらいに独善的です。世界の数だけ常識と非常識はあるし、そこに難癖（なんくせ）をつけても世界は変わらない。私がこんな目に遭っているのも、チェコがニセモノだらけなのも、和夜や浩之さんが生きているのも、白夜様が行方不明なのも、否定したところで解決には至らない。

『奇想天外な話なんだよ』

浩之さんはそのように評していましたが、私からすれば『馬鹿（ばか）げた世界』と云ったほうが正確でした。あり得ないことが、考えられないことが、信じられないことが襲いかかってきますが、そこに文句をつけたところで、目の前にある問題は解決しません。馬鹿げた世界を抜け出すか、馬鹿げた世界に呑（の）まれるか。二つに一つ。そして今の私が云いたいことは一つだけ。

「おなかすいた」

2

　クリスマスが今年もやってくる。でおなじみのテーマソングがテレビで流れるにはまだ早いですが、私は買ってもらったケンタッキーフライドチキンをパクついていました。口もとが油まみれになるのも厭わずむしゃぶりつき、すでに三本目。
「車の中でチキンを食べるなんて、きみはドリス・デイかい」
　ボルヘスで調べたところ、どうやらグレース・ケリーのようでしたが、浩之さんの間違いを訂正してやることなく口を動かしつづけまし

た。空腹なんです。

メルセデスは現在、チェコ最大のリゾート地を走っていました。十四世紀にカレル四世が源泉を発見したことで幕を開けたカルロヴィ・ヴァリですが、温泉地のスタイルは万国共通らしく、登別（のぼりべつ）温泉や伊香保（いかほ）温泉の町並みを思い起こさせました。

「スパもあるみたいだね」浩之さんは車窓から外を眺めています。

「とはいえ、きみを連れて観光するわけにもいくまい」

「こんな状態で営業してるわけないですよ」

「ケンタッキーはやってたよ」

「あとチェコのスパは、セラピストの指示のもと、一人で入るものですからね。変な期待はしないでください」

「お嬢さん、さっきから疑問なんだけど、どうしてそんなにこの町にくわしいの？」

「べ、べつに白夜様といっしょに温泉に行けたらいいなーと思って下調べしたわけじゃないですから！」

「……………」

「今回の旅は、楽しみだったんです」

「やれやれ」浩之さんは息を吐きました。「どういうつもりかは知らないけど、坊ちゃんは早く表に出てくるべきだね。きみのためにも」

「白夜様は、私のためには動きませんよ」

「だったらもう件を使って、さくっと解決しちゃえばいいのに」

「それもないでしょう」

「プライドの問題？」

「白夜様がどういうおつもりで牛を封印したのかは、私などには想像

一白夜様が[illegible]件を封印したのかは、私には想像もつきません。でもとにかく、白夜様はそう決断されました。これから先、絶対的な絶望に追いこまれたとしても、白夜様は件を使わないでしょう」

「件を使うよりも、第三者に横取りされないように封印するほうが、十神財閥にとっては気が楽なのかもしれないしね」

なるほど。大金を動かすより、あずけたままのほうが安心という発想。では白夜様は、どこに件をあずけたのでしょう。十神財閥の中枢にいる私ですら知らされていません。それだけ厳重に管理されているということでしょうか。

メルセデスが路地を曲がると、こんもりとした山が正面に現れました。その麓には巨大な建築物がありまして、外観を一言で説明するな

[illegible]の顔は[illegible]外観を一言で説明するな
らば、コテコテの新古典主義。
「グランドホテル・プップ。ボンドが泊まったところだよ」
意外とキュートな名前ですが、ボルヘスで検索してみたところ歴史ある一流ホテルらしく、ゲーテやベートーベンといった偉人たちも宿泊したそうです。浩之さんは駐車場にメルセデスをとめると、当たり前のような足取りでホテルに向かいます。
「あ、あの」
「ここは僕の定宿さ」
「でもあなたは祁答院財閥の人間じゃ……」
「細かいことは気にしない」
「ちっとも細かいことじゃありません」
緊張しつつ足を踏み入れたロビーには、観光客らしき人々が大勢い

て、お酒を飲んだり電話をかけたりしていました。チェコ国内には国家非常事態宣言が出ているので、ここでひまを潰しているのでしょう。私がさりげなく、それでもできるかぎり顔を隠していると、浩之さんがフロントから戻ってきて、「部屋、取ってきたよ」と云いました。最上階にある一室は、明らかにスイートルームといった面積と装飾で構成されていまして、部屋についたとたん、体は正直といいますか、全身の力が抜けました。チェコにきてから眠っていないどころか、体を横たえることもできなかった私は、限界をむかえようとしていました。睡眠の誘惑に耐え切れず、瞼（まぶた）が自動的に閉じます。

「それでいい。眠らないと頭が整理されないからね」浩之さんの声。

「文章で大切なのは、執筆よりも推敲（すいこう）だ」

『泥のように眠る』という慣用句が昔から好きなのですが、どうして『泥のように』と云うのかいまだに知りません。眠りと泥に、いかなる関連性があるのでしょうか。それこそ『どろんこぶた』ではないですが、泥にもぐって眠りたいと思ったことはありませんし、もし深く眠る状態を、『泥』と形容しているのだとすれば、じつはそれほどうまいたとえではないと思っているのですが、そして本当に知りたければボルヘスを使えばいいのですが、仮眠をとった私は絶望的にぐしょぐしょで、そのような余裕はありません。寝汗はひどく、寝癖はもっとひどく、まあいろいろと考えましたがバスルームに入りました。

腹の立つことに、入浴の準備は整っていました。総大理石（そうだいりせき）の湯船にま、熱いお湯がたっぷり入っていて、アロマでしょうか、甘い香りの

は、熱いお湯がたっぷり入っていて、ホカホカでした。甘い香りの湯気が立ち上っています。私はバスルームのドアを念入りにロックすると服を脱ぎ、念願の入浴を楽しみました。石鹸(せっけん)を贅沢に使いながら全身をごしごしこすり、満足するまで髪を洗い、湯船に浸かります。使い古された表現ですが、全身から疲労が溶け出すようでした。血のめぐりがよくなり、脳が活性化したところで、白夜様のことを思い出します。白夜様。いったいどこに行ってしまったの。白夜様は神様なので、私ごときが思考をトレースできるわけもないのですが、それにしたところで意味がわかりません。私に助けてもらいたくなかったのでしょうか。まったく、私のほうがお姉さんなのに……。

『少しだけ、待っていろ』

言葉の意味はわかります。わかりますが、どのように解釈すればいいのでしょう。私は白夜様の所有物ですから、変に考えることなく、言葉の通りにしていろというのであればそうするべきなので、なるべく何も考えないようにしながら湯船を出ました。寝汗の染みこんだ服を着るのは抵抗がありましたが、用意されたバスローブを羽織るほうがはるかに抵抗を感じたので、服に袖を通します。べったり。不快でした。

「おハローお嬢さん。湯上がり美人じゃないか」

でも浩之さんのほうがもっと不快でした。

大きなテーブルに置かれた料理を前に、ナイフとフォークを手にした浩之さんは、ご丁寧に前掛けをしているため、悪趣味なオママゴトのようです。

「ぐっすり寝て、たっぷり風呂に浸かったあとは、やっぱり食事だよね。ランチにしては豪勢だけど、財閥たるもの、残しちゃうほど注文するのがむしろマナーなのさ」

「私、おなかすいてません。ケンタッキーをいただいたばかりですし」

「それでも食事をするのが財閥だ。古代ローマの貴族は、ガツガツ食べて満腹になったあとでゲロゲロ吐いて、またガツガツ食べたらしい」

「古代ローマらしい悪趣味ですね」

「僕たちも悪趣味をやろうじゃないか。こいつをみんな食っちまおうぜ」浩之さんは笑います。「魯山人と鈴木三重吉から食文化を学んだ僕だけど、チェコ料理はよく知らなくてね。スロヴァキア料理と何が

違うんだろ。過去にはチェコスロヴァキア料理ってのもあったのかな」

「ボルヘスで検索してあげましょうか」

「これだからネット世代はいかん。ささ、座りなさい」

「ですからおなかいっぱいで……」

「自分が空腹だってことに、自分で気づいていないだけかもしれないよ」

話を進めるには、席に着かなければならないようです。私はため息とともに、浩之さんの正面に座りました。テーブルには、私もくわしくはありませんが、たしかにチェコ料理らしきものが大量にならんでいました。でっぷり肥えたローストチキンと、隣に添えられたザワークラウト。キノコ入りポテトスープ。西洋わさびとチリソースのかか

[illegible]鱒のマリネ。[illegible]

たポークソテー　薄い衣で覆われた鱒のフライ　炭火の香りをまとったラムチョップ。チーズのオイル漬け。生肉ステーキ。ローストビーフのクリームソース煮。鉱泉水。そしてビールはやはりピルスナー・ウルケル。まさに内陸国といった感じの肉々しい料理を見ているなあと、おどろくべきことに、おなかが減ってきました。生きているなあと思いました。

浩之さんは巨大なジョッキにビールを注ぐと、「ともかく！」と叫んでグラスを掲げました。私はアンティークのグラスに鉱泉水を入れ、チーズを口にふくみます。後方の大窓から光の差しこむスイートルームで、おいしい料理をぱくぱく。これで向かいに座る人物が白夜様であれば、どれほどすばらしかったでしょう。

「[illegible]

「そんな顔しないでくれないかな。もしかしてきみ、僕が上機嫌だと思ってる？　僕だって姉さんを見つけなくちゃならないんだ。料理を食べてる場合じゃないんだ」

「でもあなたは、祁答院浩之ではないのでしょう？　祁答院唯香と名乗ったあの人も、まったく別人ってわけですよね」

「あのねお嬢さん、きみが追求しなくちゃならないのは、僕の正体なんかじゃない。自分の頭のことを、もっと真剣に考えるべきだ」

「頭？」

「祁答院財閥なんてこの世に存在しないものを、きみの頭はどうして知っているの？」

「言葉の意味が、よくわかりませんが。この世に存在しないものを、

「言葉の意味が、よくわかりませんが、この世に存在しないものを
なぜ私が知っているんですか」
「っていうか僕が質問してるんだけど、そのこと」
「祁答院財閥のことなら、たしかボルヘスで……」
「ご自慢のボルヘス。十神財閥が開発した情報検索図書館。そいつが発する情報をきみは信じてるようだけど、はたしてそれでいいのかな。ボルヘスの情報をすっかり信じて問題ないのかな」
「……待ってください。私がそれを検索する前に、白夜様が祁答院財閥の名を口にしてますよ」

ボルヘス＝履歴参照
#６７９１０１０４
タイトル『昨日午後七時すぎの会話』

「祁答院財閥……と云ったら、何か反応してくれるかな？」

「初耳です」

（省略）

「祁答院財閥。聞き覚えがある」

「さすが坊ちゃん！　カバンを持たせてください！　草履とおにぎりもあたためますか？」

「一般的な財閥とは一線を画した、『裏財閥』と呼ばれる連中がいるようだが、祁答院財閥はその筆頭だな。裏財閥と会うのは、この俺ですらはじめてだが」

（省略）

「光栄のきわみですな。僕は祁答院財閥現当主、祁答院財閥旗清の

孫、浩之。で、こちらは双子の姉の」

「唯香ともうします」

「この会話をしたあと、自動車工場にあるあなたのアジトで、祁答院財閥（#87654321）について検索しました。もしボルヘスが不調だったとしても、白夜様の言葉まで疑うのはナンセンスです」

「ボルヘスの不調？　坊ちゃんの言葉？　こまっちゃうな。事態はそんなに生易しいものじゃないんだよ」

「私の見ている世界が、空想の産物とか云うんじゃないでしょうね」

「『これが私の望んだ世界』ってやつか。僕は好きだけどねそういうの」浩之さんはチキンを頬張りました。「むろん、この世界はきみの空想の産物じゃないし、僕ときみは同じ世界に生きている。

（ヴェルトアンシャウウング）[illegible]

世界観は共有してないようだけど」

「ヴェルト……え、なんですって？」

「僕が問題にしているのは、きみのアイデンティティの要となっている職業についてなんだな」

私の職業。

書記。

「お嬢さんは知ってるかな。書記という職業がはじめて生まれたのは、紀元前三千年ごろの中東と云われている。だけどその時代の書記は、文字をあやつる特権的な能力を持っているにもかかわらず、たった一つの仕事しかしなかった。何世紀ものあいだね」

「どんな仕事ですか」

「メモ」

「え？」

「だからメモだよメモ。豆とか芋とか奴隷の数とかを記録するのが、書記の役割だったのさ」
「ただの帳簿じゃないですか」
歴史に明るくはありませんが、それにしても意外でした。書記というのは、偉大なる王の伝記や、国家の繁栄の物語などを、抒情たっぷりの文章で書くものだとばかり思っていましたが、どうやら初期の書記は、私のような潔癖ばかりだったようです。嘘。大げさ。まぎらわしい表現を排し、ただ事実だけを記録することに徹していたようです。自分のやり方が間違っていないように思えて、ほっとしました。
「書記は何世紀ものあいだ、記録をとりつづけた」浩之さんはうなずきます。「ではここでクエスチョン。そんな書記たちは、どのような

理由で物語を書くようになったのでしょーか？」

「書記が退廃した理由ですか？」

「これを退廃と呼ぶのかは知らないけど、書記はあるときからメモ書きをやめて、伝記や抒情詩を書くようになる。それはなぜでしょーか？」

「メモばかり書くのに飽きたとか……」

「失業」

「え？」

「だから失業だよ失業。いくつもの王国が崩壊して、自分が属していた官僚組織がなくなったとき、書記たちは気づいた。自分という存在が、海辺のワカメのように打ち捨てられて、地位も名誉もうしなったことに。文字を読み書きできる才能を持ち、国の中枢につかえていた

書記たちは、フライドをずたずたに切り裂かれて絶望した」
「絶望したから、物語が書かれた」
　世界から相手にされない欲求不満な連中が、唯一の能力である文才を駆使して、その手にふたたび栄光をつかもうとしたというのなら、少しだけ、
「少しだけ、がっかりしました」
「お嬢さんなら、そう云うと思ったよ。でもこれが事実なんだ。『哀歌（あいか）』を書いたエジプトのネフェロフも、『神統記（しんとうき）』を書いたギリシャのヘシオドスも、絶望したからそれを書いた。国のトップにいたのにそこからころげ落ちて、もといた場所に戻らなくちゃならないんだか

られ、実家に帰って、羊飼いになって、退屈な人生を送るハメになった絶望書記たちは、絶望の書を執筆して、一発逆転をねらった」
「物知りですね」
「こう見えて子供のころは、図書室に入り浸っていたもので」
「本を書いて一発逆転をねらうなんて、作家志望者みたいですけど」
「たはー。失業した書記と作家志望者の絶望が、同レベルってわけか。お嬢さん、ナチュラルにひどいって云われた経験あるでしょう？」

4

「きみのボルヘス。きみの相棒。きみの執筆支援ソフト。きみの右目であり右腕。きみの同志であり導師であり……」

「皮肉のつもりですか。私がボルヘスなしでは伝記を書けないと」

　国語辞典や百科事典のかわりにちょいと使うレベルから、文章の添(てん)削(さく)や組み立ての支援までボルヘスに依存しているため、たしかにそれなしで『白夜行』を書くのは不可能でしょう。しかし私は、それを自分の怠慢や能力不足とは感じておらず、こういうものだと納得さえしています。私は『超高校級の書記』であり、その気になれば実力だけで、一般的な意味での伝記を書くことができるでしょう。にもかかわらずボルヘスに頼るのは、本当のことだけを書きたいから。私が見ているこの現実には、私という余計な自意識(フィルター)があります。見間違い。聞き間違い。思い違い。そうした人間特有のミスを排除して、本当のことだけを記録するには、機械の存在が不可欠なのです。私の意識という余計なものを一文字でも『白夜行』に入れてしまっては、白夜様に

もうしわけが立たないのです。そのように説明すると、―本当に潔癖だねえ」と浩之さんは鱒を食べながら笑いました。
「きみはまさに、正真正銘の書記だ。倉庫の中身を記録するメモ仕事しかやらなかった原始の書記、書記のオリジンだ。ここで一つたずねるけど、かんじんの倉庫の中身が間違っていたらどうするの？」
「どういう意味でしょうか」
「ボルヘスがデタラメな情報をきみに教えていたらどうするの？」
「またそれですか。ボルヘスは完璧です」
「計器が壊れているのに、パイロットたちがそれを最後まで信じたばかりに墜落した飛行機事故がある。何ごとも百パーセント信じるのは危険だ」
「疑えと？」

一すべてを疑うんだ」
「古くさい台詞ですね」
「僕は真面目（まじめ）に云ってるんだよ。まじりっけなしの真実を保証できるのは、予言だけ」
「予言……」
「さっさと件を手に入れないと、きみはきみを保てなくなるぞ。あのデブのニセモノに件を奪われたら、世界はともかく、きみは終わりだ」
「あなたは何者なの？」
「僕の正体なんてどうでもいいって」
「あなたは祁答院浩之じゃない」
「だからさ、祁答院浩之って人物が、そもそも存在しないの。祁答院浩之も祁答院唯香も祁答院財閥も初瀬川研究所も金井（かない）妙子も、レッド

リボン軍やブラックゲマゲマ団や国際警察機構と同じで、架空の個人・団体なわけ。それを実在すると信じてるのなら、きみの頭はどうかして……違うな。それを実在するときみに教えるボルヘスこそが、どうかしているんだ。狂っているんだ」

私自身も、記憶や証言の齟齬（そご）については自覚していますが、だからといって、浩之さんの話をみとめるわけにはいきません。これをみとめてしまったら、私は今後一切、自分の語りを信用することができなくなってしまいます。自分の物語を進めることができなくなってしまいます。

「だれよりも早く件を手に入れて、だれよりも早く真相に到達する。きみが助かる道は、それしかない」浩之さんは断言しました。「『十神一族最大最悪の事件』のときのように頭をフル回転させて、この事

件に挑むんだ」
「あなたはだれなの？」
「きみの味方だよ。ずっと前からね。ずっとずっと前から、きみの味方だった。僕はきみが幸せになれたらいいと、それだけを願ってきた」
「だれなの？」
「思い出さなくていいし、思い出せないなら、それはボルヘスのせいにしておこう」
浩之さんは短く、だけど優しそうにほほえみます。
私は知っている？　この不器用な笑顔を知っている？
「ねえだれなの。お願い答えて……」
「思い出せないんだね。ボルヘスがきみの現在はおろか、過去までも

侵食している可能性がある。急ぐんだ。十神も世界も関係ない。きみ自身のために、どうか早く……」

浩之さんの額に穴が開きました。眉間にぽっかり穴の開いた浩之さんは、それでも笑顔を浮かべたまま、私の手に自分の手を重ねると、「じぶんでみ」とまで云って、皿の上に顔を突っ伏しました。そこで私はようやく狙撃されていることに思い至り、あわててふり返った瞬間、とてつもない衝撃が顔面を直撃して、私の体は部屋の端まで吹き飛ばされます。あああ。ああああああ。ああ嘘。嘘。嘘嘘嘘。ああああああ。撃たれた。嘘。嘘。撃たれた。ああ。撃たれた。顔を撃たれた。顔を。顔を。あああああ。白夜様。私は。怖い。怖い。白夜様。早く会いたい。ああああ。嘘。会いたくない。だって顔を撃たれた。死ぬ。死ぬの？　たった一人。異国で。死ぬ。死ぬの？　一人で？

怖い。いやだ。撃たれた。■たれた。■■■た。私は■■。白夜様。白■様。私■死■。会いたい。白夜様。会いたい。会■■くない。死に■■■■。会いたくない。会いたい。死■たくない。死にた■■

5

■■■■■■■■■■■■■■■■■な■■■■■■にた■■■■■■■■■死■■■生■■■■■■■■■■生き■■■す。どう■して……。生きています。■■■■■。私、生きて■ます。痛み

もありません。恐怖で痙攣する手をそっと顔に当てると、右目のあたりに違和感がありました。硬く尖(とが)ったものが……深々と刺さっているのです。私にある想像力のすべてが、一つの結論を導き出していました。何が起こったのかは明らかでした。意を決して引っぱってみると、ズルルという音が頭の中に反響して、突き刺さった弾丸とともに、ボルヘスが眼窩(がんか)から抜け出ました。それはじつに奇妙な光景でした。永遠の双子のように、ある意味では白夜様よりも身近に感じていたボルヘス。それが今、まるで串に刺さったたこ焼きのような状態で目の前にあり、ちょっと恥ずかしそうにプルプル震えています。かわいそう。と思った刹那、

ボルヘスは砕けました。

あとにはスナイパーライフルの弾丸だけが残されました。スナイパーライフル？　そうでした。ボルヘスの喪失を悲しむひまもありません。私たちは今、狙撃を受けているのです。そして正確にはここは複数ではなく単数形で語るべきなのです。浩之さんは死んでしまったのですから。

追撃してこないところを見ると、どうやら私が吹き飛ばされた場所は、スナイパーの死角のようです。体を伏せたまま、残った左目で室内を観察。だだっ広いリビング。中央にはテーブル。そこには前のめりに倒れた浩之さんの死体。顔の部分にはほとんど手をつけていないローストチキンの皿があり、ここから見るとまるでチキン人間です。

ほんの一瞬だけ、これは手のこんだドッキリなのではとも考えましたが、浩之さんの後頭部の穴から流れる鮮血を見るかぎり、それもないでしょう。浩之さんの前方には、壁枠ぎりぎりまで作られた大窓があって、中央付近が割れていました。弾丸はここから部屋に入り、浩之さんの頭を貫通したのでしょう。大窓の向こうに広がるのは、さきほどメルセデスから見た山の景色。スナイパーはこの山のどこかにいるのでしょうか。そして何者なのでしょうか。光波測距儀（レンジファインダー）機能も赤外線機能も集音機能も検索機能も使えない私には、これ以上の状況がつかめません。左目は残っているにもかかわらず、両目を塞がれたような心地で、どうやら私はこんなにも、ボルヘスに依存していたようです。ボルヘスをその身に宿す前の自分が、どんなふうにものを見ていたのかを思い出せません。何もわかりません。今の私でもわかるの

は、早くこの部屋から逃げなければならないということだけ。というわけで、部屋のドアを開けて廊下に出たいのですが、こまったことにそのためには、浩之さんの脇を通過する必要がありました。スナイパーの射程範囲に、全身を晒（さら）す必要がありました。これはさすがに、一か八かに賭けてみようという気にはなれません。スナイパーがスコープ越しに室内を見張っている可能性は高いのですから……本当に？　スナイパーは私を倒したと思っているのでは。何せ私は弾丸を喰らったわけでして、普通なら即死しています。スナイパーは私が死んだものと判断して、今ごろ帰宅準備をしているかもしれない……本当に？　私を標的としている以上、右目が義眼であることは知っているはずですし、ならば私を殺し損ねたことにも気づいている……本当に？　いくらスナイパーとはいえ、そこまで目がいいものでしょうか。わからない。何もわからない。１００％の確実性など一つもな

い。
部屋の陰に身をひそめつつ、あらためて室内を見回します。リビングで目立つのはテーブルと、浩之さん（の死体）。豪華なソファや絵画も見えますが、スナイパーライフル相手では盾にもならないでしょう。敵は山のどこかに陣取り、壁の大半を占める大窓から私を探している可能性があり、もしそうなら廊下に通じるドアも射程範囲内にあるため使えません。べつの逃げ道がほしいところですが、ほかの窓の多くもやはり射程範囲内ですし、その危険を乗り越えて窓を開けたところで、ここはホテルの最上階。
で、結局のところ選択肢は二つ。

部屋から出る

部屋から出ない

ええと、こんなことを云うのはアレですが……このままじっとしているのが最良の選択ではないでしょうか。さらに云ってしまいますと、私は最初から無力でした。私は『超高校級の書記』。『超高校級の格闘家』のような腕力も、『超高校級の御曹司』のような特権性も持たない執筆者に、このような局面を攻略する力などありません。しかもボルヘスは破壊され、白夜様はどこかに行ってしまい、一人ぼっち。一人ぼっちの私が何をどうしたところで、うまくいくわけがないのです。私は体を横にして、残った左目をつむります。うん、すごく落ち着く。自分を物語から追い出し、自分を縛る鎖を外してみると、全身がふっと軽くなり……眠たくなってきました。そうです。私は寝

るべきなのです。睡眠不足はお肌の大敵ですし、明日からの授業にも影響が出てしまいます。明日は月曜日。学校に行って、みんなと会わなくちゃ。あ、宿題するのを忘れていました。宿題に効果がないことはすでに立証されているのに、希望ヶ峰学園も古風な文化をやるものですね。みんなは元気かな。何してるのかな……。

「起きているか」

白夜様？　不意に聞こえた声におどろき、私は反射的に目を開けます。もちろん白夜様の姿などなく、幻聴を聞くほどまで落ちぶれたかと絶望しかけましたが、「起きているな。では話を進めよう」とふたたび白夜様の声がして、幻聴ではないことを完璧に理解しました。その声は大窓の向こうから、独特の残響音とともに聞こえてきました。

『世界征服宣言』のときのように、町のスピーカーから流れているのです。

「俺だ。『超高校級の御曹司』である十神白夜だ。よく眠れたか？　さて、愚鈍（ぐどん）なお前たちのために説明してやろう。『世界征服宣言』のリミットである本日午後六時まで、あと五時間を切った。もうじき世界は俺のものになり、お前たちはこの俺に隷属（れいぞく）させられる。それはむろん幸福と同義だが、それでもお前たちは最後まで抵抗するだろう。この俺の命をねらい、『かわいそうな牛』の秘密を暴こうとするだろう。

　だがそれはむだだだ。すべてむだだだ。知っての通り、お前たちは無力

だからな。カッターナイフでは戦車に勝てないように、この俺に勝つことは原理として真理として不可能。だれも十神を屈服させることはできない。だれも俺を敗北させられない。お前たちにやれることはせいぜい、靴の裏についたガムのように、新しい靴に履き替える数秒間だけ、俺の気分をげんなりさせることくらいだ。

五時間後、世界は変わる。

俺という存在に支配されることで、いまだかつてだれも見たことがない新世界が幕を開ける。その幸福を、その僥倖（ぎょうこう）を、お前たちは骨の髄（ずい）まで味わうことになる。無力なお前たちは、それを止めることはできない。

だがそれでは、あまりにアンフェアだ。

そう、この戦いは最初からアンフェアだった。この俺を相手にして

は、お前たちに勝ち目などないのだからな。圧倒的戦力差に、俺は今や、同情さえしているよ。冬戦争やコッラーの戦いや忍城攻防戦のような奇跡が、そう簡単には起こらないということが証明されて、悲しんでいるくらいだ。なのでそんなお前たちに、情けをかけてやることにした。

俺は今、とある場所にいる。

この俺にふさわしい場所だ。

『世界征服宣言』がリミットをむかえるまでに、そこにたどり着けた者には、よろこぶがいい、この俺が会話をしてやろう。話をしてやろう。話を聞いてやろう。

お前なら、わかるはずだ。

では。

またあとで」

この感覚を……なんと呼べばいいのでしょうか。冷え冷えとしていた体の奥底から、エネルギーのかたまりが発熱するような、あるべき場所にすべてのものが戻ってきたような、活力？　生気？　意味？　価値？　知りませんよそんなのは。正しい言葉なんかに興味はありませんよ。自分自身を取り戻した。自分の物語を取り戻した。それでじゅうぶん。なるほど私はただの書記。たんなるメモ屋。著述病患者。御曹司でもなければ神様でもない。でも……じゃなくて、しかし？　さりとて？　だとしても？　なればこそ？　ボルヘスがないので日本語に不安が残りますが、とにかく私は『超高校級の書記』ですし、ならば一刻も早く、執筆テーマのもとに向かうべきなのです。

▼部屋から出る
部屋から出ない

部屋から出ない？　馬鹿を云ってもらってはこまります。後者を選ぶ気なんてありません。こんな場所で寝ているつもりはありません。だって白夜様が、私だけを待っているのですから。白夜様が私だけに見つけてもらいたがっているのですから。

白夜様は演説の最後に、『お前たち』ではなく『お前』と云いました。『お前なら、わかるはずだ』と云いました。それはつまり私を、私だけを呼んでいるということ。世界に向けているように見せかけて、私一人だけに向けた呼びかけなのです。白夜様は、あの子は、私がきてくれることを信じている。だったら、そうしてあげなくちゃ。

私、お姉さんだもの。私はやる。かならずやる。命にかえても。すべてにかえても。そう……。

「十神の名にかけて！」

私は静かに立ち上がると、屈伸（くっしん）運動をはじめました。いち・に・さん。膝の関節を曲げるたびにポキポキ鳴ります。たしかこれは骨の鳴る音ではなかったはずですが、ボルヘスがないのでそれ以上の知識は得られません。今の私が頼れるものは、己の肉眼と直感だけ。なので無茶をやらないかぎり、この場は切り抜けられないでしょう。上等じゃないですか。推測も計算もせず、ただ動いてやろうじゃないですか。私は大窓の脇まですばやく移動しました。この大窓の反対側に、

念願のドアがあります。距離は約十メートルほど。どうか、どうかお願いします。ほんの数秒間でかまいません。私の肉体がそこまで無傷で移動できる時間をください。

「どおおおりゃぁあああああああ」

私は分厚い布地をつかむと、一気に駆け出しました。幸い、布地はスルスルと引っかかることなく動き、大窓を隠していきます。

カーテン！

これが私にできる、たった一つの作戦でした。大窓の半分はカーテンによって遮(さえぎ)られ、これでスナイパーと私の条件はいっしょ。片目同士というわけです。私はカーテンによる目隠しを利用して、ドアまで一気に駆け出そうとしましたが、覚悟していたことが起こりました。撃ってきたのです。カーテンで相手の視界をふさいだところで、私の目標がドアなのはバレているわけですから、大凡(おおよそ)の位置は推測されて

しまいます。それでも、しょせんは『大凡』。放たれた弾丸は窓ガラスとカーテンを突き抜け、私の髪をかすめました。今だと思い、ドアを目指して走る私の脇腹に、二発目の弾丸が直撃。これは予想外でした。スナイパーライフルの装塡時間が、こんなにも短いとは。でも……なぜでしょう。生きているし、動けます。私は急いでドアを開けて廊下に飛び出しました。必死で走っているうちに脇腹が痛くなってきましたが、耐えられないほどではありません。ホテルのロビーから出ようとして、『野獣死すべし』か『蘇る金狼』か忘れましたが、松田優作がラストでひどい目に遭う映画のことをふと思い出し、一階廊下の窓を割り、そこから外に出ます。意外と高さがあり、お尻から落下しました。

顔を上げるとそこには太陽。外の暑さが、空の青さが、頬を撫でる

風が、生存を強く実感させてくれて、私は思わず深い息を吐きました。その拍子に、一冊の本が懐（ふところ）からどさりと落ちます。

『白夜行』には大きな穴が開いていて、風とともに散らばりました。

白夜様の存在を伝える記録が、私という媒介が作りしテキストが、ずっと一心同体だった書物が、蝶（ちょう）の群れのように空を舞い上がり、そのままはるか遠くに消えようとしています。大切な伝記が、私のアイデンティティが、どこか知らない場所に飛び立とうとしています。私はその様子を、不思議なほど清々（すがすが）しい気持ちで見つめていました。さようなら、私の本よ！　そう叫んだノーベル賞作家の老人は、その後も小説を書きつづけました。大丈夫。また書けばいい。生きているの

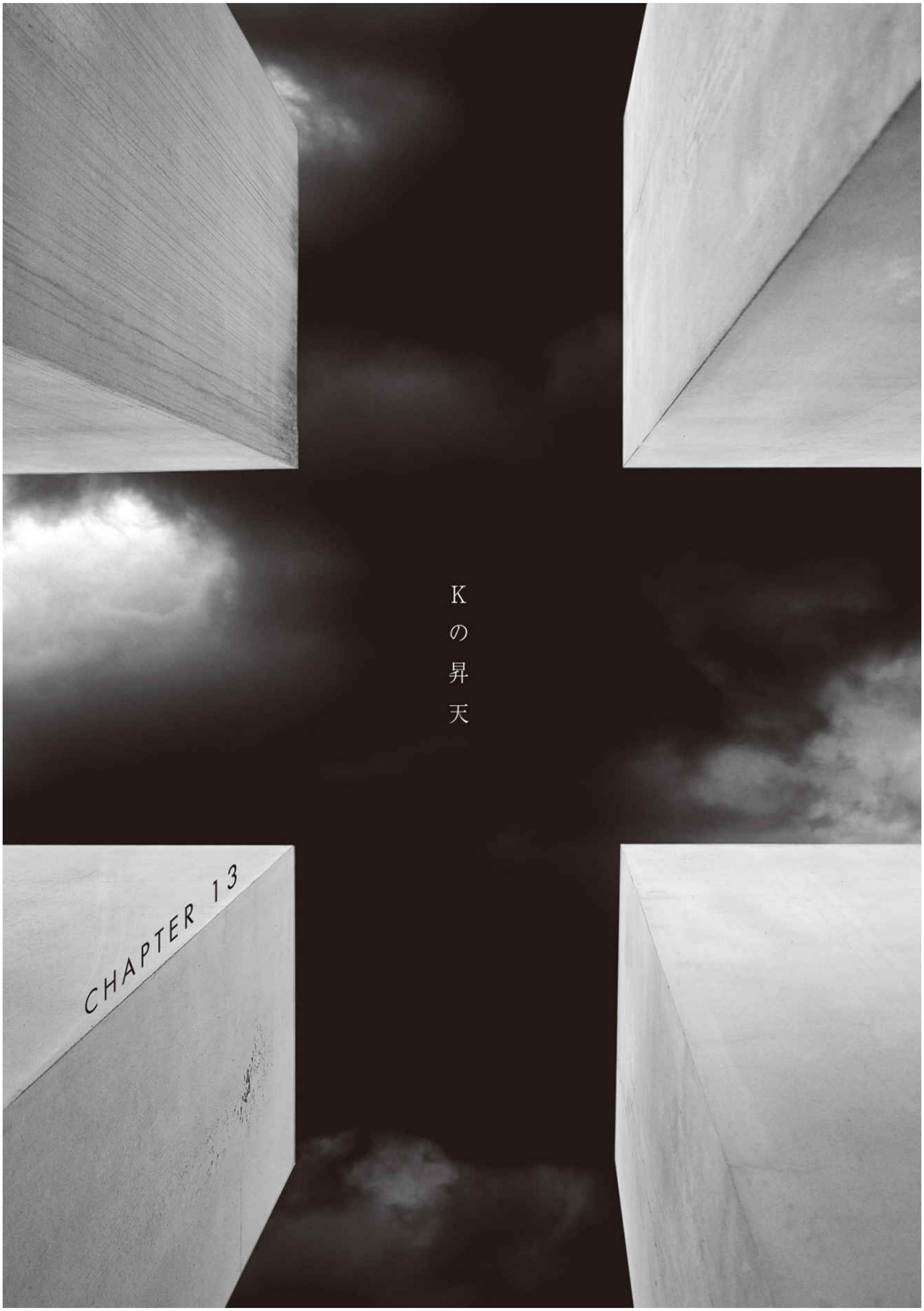
なら。

「ありがとう」

さようならの代わりに、私はそのような言葉を口にしていました。ボルヘスも、『白夜行』も、ありがとう。今まで私を助けてくれてありがとう。だけど……あなたたちという羅針盤（らしんばん）と目的を喪失した私は、これからどうすればいいの？

私はふと、自分の手が産まれたばかりの赤ちゃんのように、何かを強く握っていることに気づきました。浩之さんが狙撃されたとき、その手が私の手に触れたことを思い出します。玉手箱を開ける浦島太郎のような気分で、自分の手をゆっくりと開いてみると、そこにはメモ用紙があり、白い紙には、たった一つのアルファベットが書かれていました。

K


Kの昇天
CHAPTER 13

1

カレル・チャペックは、『わたしには主人なんかいらない。何をすればいいのか自分でわかる』と書いて。

フランツ・カフカは、『いったい、自分の身の上に何事が起こったのか、と彼は考えてみた。夢ではなかった』と書いて。

ミラン・クンデラは、『カフカ学者たちはカフカを解読しようと努めることによってカフカを殺したのだ』と書きました。

ボルヘスをなくした私が、どうしてチェコ人作家の言葉を引用できるのかといえば、Ｋのしわざです。

町に行く

▼山に登る

ホテルを出た私は、その裏手に広がる山を登っていました。お尋ね者が表を歩くのは危険なので、山の中を移動しようと考えたのです。山には例のスナイパーがいるかもしれないので、この判断も危険ではありましたが、なんとかなるような気がしました。ボルヘスと『白夜行』をうしなった私は、どういうわけか異様にポジティブでした。火の輪をくぐれと云われても、今なら笑顔でやってみせるでしょう。

山を進んでいると、まもなく深い森が頭上を覆いました。慣れない登山のせいで靴は泥だらけ。洗ったばかりの体は汗まみれ。両脚には乳酸(にゅうさん)がたまり、片目のせいか距離感がおかしく、なんども転んでしまいます。私は枝を杖の代わりにして、疲労した脚を動かしました。

開けた空間が唐突(とうとつ)に現れました。レストランでしょうか。ログハウス

風の建物があり、テラス席に丸テーブルがならぶ様子を目にして、私は愕然《がくぜん》とします。深い山を登っていると思ったら、レストランの裏庭だった。ボルヘスを喪失した私は、たんなるドジっ娘《こ》に成り下がったようです。

「臨時休業だ」

一人の老人が立っていました。夏だというのに黒いハットと黒いコート姿の老人は、当たり前かもしれませんが西洋人で、青い目の鋭さからは、社交性や友好性といったものの欠落が読み取れました。

「ボルヘスから解放されたか」老人が云いました。「ついてこい、十神忍」

2

「隠遁（いんとん）生活は山の中と相場が決まっている。ソローが実践するより、ずっと前からな」

案内された小屋は童話よろしく、森の奥にひっそりと建っていました。天井は低く、土間と居間だけの手狭（てぜま）な空間なのに圧迫感がないのは、観音開き（かんのんびらき）の大きなガラス戸と、そこから見える森の景色によるものでしょう。私は云われるでもなく、ワゴンテーブルの横に腰を下ろしました。ほかに座れそうな場所がなかったからです。

老人はコートとハットをハンガーにかけると、薬缶（やかん）を火にかけました。その様子を視界のすみでとらえつつ、手作りのカウンターに置かれた食器や、土間に積まれた大工道具などを見ていると、壁に飾られた絵が目に飛びこんできました。

た絵が目に飛び込んできました。

奇怪な絵でした。

ネズミのような小動物なのですが、ぎょっとするほど長い鼻を持っていて、それを使って一本足のように体を支えているのです。何か決定的なものが間違っているその絵は、私の興味と不安を掻き立てました。

「コーヒーを飲め」

二人分のコーヒーをテーブルに置くと、老人は向かいに座ります。ハットを脱いだ頭は、みごとな銀髪でした。

「どうも、いただきます」

「あとこれを使え。わりとすごい顔になっているぞ」

眼帯(がんたい)でした。

たしかに、いつまでも顔の右側に穴を開けたままというわけにはい

きません。ふたたび礼を述べて、眼帯を装着。
「あの、それであなたは……」
「状況は把握(はあく)している。あの下品な『世界征服宣言』が、いやでも耳に入ってくるからな。わたしはKと呼ばれている」
「K？」
「ラテン文字では十一番目。トランプでは十三番目」
「Kといえば、『断食芸人』の主人公ですね」
「『審判』か『城』の主人公だろ」
「すみません」
知ったかぶりは大失敗に終わりました。
「かまわん。お前がシロと云えば、クロもシロに変わる」Kと名乗った老人は、なぜか不機嫌そうに鼻を鳴らします。「カフカの頭文字も

Kだな」

「あなたもですか？」

「わたしがKと呼ばれる所以（ゆえん）はいくつかあるが、代表的なものはKLAMM（クラム）だ。チェコが社会主義国だった時代、書記局のお偉いさんのことを、陰でそう呼んでいた」

「チェコ語はさっぱりで」

「『詐欺（さぎ）』という意を表す」

「……この紙に心当たりはありますか？」

翻弄（ほんろう）されてばかりなのも癪（しゃく）なので、『K』とだけ書かれたメモ用紙を見せます。Kは冷ややかというよりは無関心に近い目で一瞥すると、「これをどこで？」と質問を質問で返してきました。

「渡されたんです。でもあなたに会ったのは偶然です」

「適切な理解だ」Ｋは云いました。「偶然を偶然として受け入れるのは、昨今どうにもむずかしいからな」
「あなたについても、適切な理解をしたいのですけど」
「ふむ。それは当然の欲望だ」
「では教えてください。何者ですか。なぜ私のことを知っているのですか」
「何者か。という問いで、わたしの職業や立場を暴こうとしているのなら、返答がいささか面倒になる。というのも、わたしは希望ヶ峰学園のＯＢで、通称『聖書計画』にかかわっていて、その後は十神財閥でボルヘスの開発にも携わっているからだ」
「何そのひどい偶然」
「この偶然は受け入れられないか」
「もしかして、初瀬川研究所にも勤務していたとか云うんじゃないで

しょうね」
「あ？」
「祁答院財閥との関係は？」

「何を云っているのかまるでわからん。重症だな」Kはコーヒーをすすりました。「こんな話を知っているか。チェコ出身の某作家がとあるインタビューで、『あなたは登場人物の外見描写をしないし、過去も掘り下げないので、キャラが生き生きとしていませんが？』と質問された。某作家はそれに対して、『それカフカの前でも同じこと云えんの？　キャラの髪の色とか、そいつの父親が金持ちかどうかなんて、お前が自分で決めろ！』と答えたそうだ」
「キレてるだけじゃないですか」
「適切な理解だ」Kはくり返しました。「お前が気にする各種設定

は、『キャラの髪の色』や、『そいつの父親が金持ちかどうか』みたいなものと同レベルにすぎん。はっきり云って、どうでもいい」
「どうでもよくないですよ。重要なところですよ」
「それが『大村財閥』だろうと『チェコ科学アカデミー昆虫学研究所』だろうと『ネーヴェ異端審問会(いたんしんもん)』だろうと『荻原重化学工業』だろうと『カフカを原書で読む会』だろうと、代替(だいたい)可能だろう？　代替可能なものはすべて、どうでもいい。お前のセンスがためされるだけで……」

「もういいですよ」
「何がだ」
「わかってますから、もったいぶった表現はだからもうやめてください。こういうことなのでしょう？　私だけ……」

「私だけ、見ている現実が違うのでしょう？」

　なんとなく察していたことですし、今から考えれば、くり返しそれを指摘されていたのですが、気づかないふりをしてきました。私が私であるためには、私が書記であるためには、それをみとめるわけにはいかなかったからです。ですがボルヘスと『白夜行』をうしない、アイデンティティも喪失した今なら、みとめてもいいかなという気持ちが芽生えつつありました。かけがえのない右目として、大切な道標（みちしるべ）として、私とともにあったボルヘスが、私を騙しつづけていたのは、もはや明白です。ならば依怙地（いこじ）になって自分を信じつづけてやる必要はありません。

Kはしばらく無言でコーヒーをすすっていましたが、目尻の皺（しわ）を震わせると、「ボルヘスが原因だ」とつぶやきました。
「お前が世界を把握するために使っていたボルヘスが、平均的な現実とは違う風景を、お前に見せていたのだ」
「よくわかりません」
「さきほどの某作家だが、自分の作品が翻訳されたとき、適当すぎてショックを受けたそうだ。フランス語版では文体を、イギリス語版では構成を替えられ、スペイン語版に至っては、翻訳者がチェコ語を知らないというありさまだったらしい。さて、ボルヘスは原文をどれだけ忠実に翻訳したのかな。あるいはどれだけ破廉恥な改編をしたのかな」

3

「はじめに言葉ありき。ではないが、『聖書計画』がすべてのはじまりだった」Ｋは語りはじめました。「希望ヶ峰学園のＯＢだったわたしはあるとき評議委員会から呼び出しを受け、『聖書計画』の概要を聞かされたあと、その研究チームに加入させられた。書記局も感心するほど強制的にな。『聖書計画』についてはどこまで知っている？」

この世が絶望で満ちたときに、それを読むだけで、だれもが希望を回復する聖書を作ろうとした……という、おそらく触りの部分を話すと、「じゅうぶんだ」とＫはうなずきました。

「研究チームには、多くの元『超高校級』がいた。ソフト部門の責任者となったわたしは、学園に籍を置く『超高校級』たちのデータをか

き集めた。『超高校級の文学者』。『超高校級のミステリー作家』。『超高校級の児童文学作家』。『超高校級のエッセイスト』。『超高校級の詩人』。『超高校級の文芸評論家』……。物語作成にかかわる者たちの才能データと、さらには古今東西の神話、説話、物語などのデータベースを、ハード部門の連中が作った小説自動筆記プログラム……物語ＡＩに突っこんだ。小説とチェスの違いはなんだ？」

「えっと、対戦しないこと？」

「ＡＩにチェスをやらせるなら、ルールを教え、過去の棋譜を読みこませておけばいい。だが小説にはルールがない。ルールがなければＡＩは執筆すらできない。そこでわたしは、『物語のデータ』のほかに、『物語の書き方』もプログラムした—

「創作術でも読ませたのですか」
「そういう意味合いではない。『物語の書き方』とは云ったが、ようは文章にかんするプログラムだ。『私は自分のことを語るのが大嫌いだ』と公言したチャペックと、自分の変態性をあますところなく晒したルソーとでは、文体、論理、手法といったものに、明らかな差異が生じている。わたしは物語ＡＩに、その種の差異を教えてやったのだ。そういえばチャペックもＫだな。カレル・チャペック」
「お話が少し、むずかしくなってきたのですが」
「そういうときは譬え話だ。数学者と文学者を、無人島にそれぞれ住まわせる実験があったとしよう。二つの島は同じ面積で、同じ問題をかかえ、同じアイテムがあり、同じ方法で脱出できるように設定してある。だがそのとき二人は、まったく違った行動パターンをとるだろう。脱出方法さえ違ったものになるかもしれない。職業が異なる以

上、二人の行動原理に共通項がないからだ。そのパターンの違いが、差異だ」
　つまり数学者と文学者の、無人島に対するアプローチの差が、小説に対する差異であり、またそれこそが『物語の書き方』というわけ……でしょうか。Ｋの言葉をどこまで理解できたのかはあやしいものです。
「ともあれこうして、『聖書計画』ははじまった。そして失敗した」
「失敗？」
「大量の時間、大量の資金、大量の人員を割いてＡＩが生成した物語は、毒にも薬にもならない内容だったのだ。少なくともわたしとチームのメンバーが読んだかぎり、そうとしか判断できない代物だった」
「なぜ失敗したのですか？」

「大失敗したのことか」

「当たり前だろ」

「読むだけで、だれもが希望を回復する物語など、書けるわけがない」

「そんなはっきり云われてもこまるんですが……」

「『わたしの人生を変えた一冊』という言葉があるだろ。我を忘れるほど没入する本はあるし、本が人生観を変えることもある。だがそのような効能を、たった一冊の本で、すべての人類に対応させようというのは無茶だった。年齢も性別も国籍も立場も違うあらゆる読者に、まったく司じ読後感をあたえる本など、どうして書けようか」

「人間には書けないからこそ、ＡＩにやらせたのでしょう？」

「実際、物語ＡＩはよくやってくれた。人類の身勝手な要求によく応えてくれた。だが結果は最悪だ。物語ＡＩが書き上げたものは、聖書に似た何か……聖書のニセモノにすぎなかった。ま、当たり前だ。今現在のところ、絶望した者に希望をあたえる最良の本は、それこそまさに聖書にほかならないのだから」

「ああ……」

たしかにそうです。それはそうです。

「『聖書計画』は恥知らずにも、聖書の縮小再生産をやったのだ。じつにくだらない。そんなものは、世界中のカルト宗教がやっている恥ずべき行為と同じだ。聖書を超えるには創造性が必要だった。創造がなければ、その先を突破することはできないからな」

『創造できなければ、物語は書けない』
　白夜様のおっしゃることに間違いはありませんでした。たしかに和夜が云うように、データベースを駆使すれば物語は書けるのでしょうが限界はあり、『既存の物語に似たべつの物語』しか作れません。本当に新しいものを生み出すにはやはり、創造のエッセンスが不可欠なのです。物語にはオリジナリティが必要なのです。古来からずっと。
　沈黙。私とKはしばらく、コーヒーを飲んだり飲まなかったりして、無言の時間を共有しました。私の視線は自然と、壁にかかった小動物の絵に向かいます。極端に大きな鼻を使って立つぁの動物は架空の生物なのでしょうが、目も耳も脚もありました。もし創造のエッセンスを持つ絵描きが、まったく新しい生物を描いたら、おそらく私はそれを生物だと認識できないでしょう。創造とはそれだけ偉大であり、それだけ奇妙でなければなりません。

り、それだけ奇形でなければなりません」

「『聖書計画』は凍結となった」Ｋが言葉を再開させます。「世界を騒がせている『絶望小説』は、『聖書計画』の技術を流用したものだと判断しているが、なぜ効果があるのか理解に苦しむ。わたしが把握しているかぎり、あのＡＩが作った本では、『絶望病』などという甚大な影響を、それを読んだ者にあたえることはできない」

「だれかが完成させたのでは。あなたじゃないだれかが」

「無理だろうな。だが仮説はある。ボルヘスがお前にやったのと同質の効果をあたえれば、あるいはやれるかもしれん」

「どういうことです」

「まあ待て。順を追って説明しよう。『聖書計画』は凍結となったが、それでも物語ＡＩは当然の帰結として、非常に興味深い語句生を

それぞれの物語は当然の帰結として、非常に興味深い志向性を見せるようになった」

「それは……」

「一つの物語に限定して、多角的な側面からのアプローチが可能になった」

「もう少しわかるように話してもらえませんか」

「お前は、モナ・リザを知っているか」

「当たり前じゃないですか」

「実際に見たことは？」

「ありません」

「実際に見たことがないのにどうして知っていると云える！」

なんか急に怒り出しました。

「だってそんなの、教科書やテレビで腐るほど目にしてますし……」

[illegible]
「教科書に載ったというなら、だれかがモナ・リザをカメラにおさめたのだろう。テレビで観たというのなら、だれかが映像に記録したのだろう。物語ＡＩはつまり、そういうことができるようになった。わかるか？」
「わかりません」
「わたしたちはダ・ヴィンチではないから、モナ・リザを描くことは原理的にできない。だが、モナ・リザの後ろ姿や下半身を想像して創造することはできる。モナ・リザの画像データを使ってパッチワークをほどこすアートや、モナ・リザという女性についての小説を書くこともできる。実際にそういう芸術作品や書物はあるからな。今で云うところの二次創作……メディアミックスとかスピンオフとかいうやつだ」
[illegible]

「二次創作？」

唐突に現代的なワードが飛び出したので、いささか面食らいました。

「物語ＡＩは、『小説の技法』のプロとなったのだ。小説にルールはないと云ったが、約束ごとはある。キャラクターを提示して、背景を語って、ストーリーを歴史的状況の中に入れねばならない。場面を転換するときは行を空けたりナンバリングをしたりして、そのたびに新たな描写や説明をせねばならない……」

「約束ごとというか、大前提ですよねそれ」

「はっ、大前提ときたか！」

「なんで怒るんです？」

―たしかに写実主義による伝統は、多くの前提条件を生み出した。―人のキャラクターに対しては、外見的な特徴や口癖といった情報を提示せねばならない。そのキャラクターの過去を説明せねばならない。読者が本を読んで幻想に包まれているあいだ、作者はその姿を消さねばならない……じつにくだらん！　古い契約だ！」

Kがテーブルを叩くと、ほとんど口をつけていない私のコーヒーが、少しだけこぼれました。

「あの、お願いですから怒るのをやめてください」

「セルバンテスに謝れ！」まるで聞いちゃいません。「『ドン・キホーテ』には宿屋が出てくる。そこにはドン・キホーテも、サンチョ・パンサも、友人も、床屋（とこや）も、司祭（しさい）もいて、許婚（いいなずけ）のルシンダをドン・フェルナンドに奪われた男。ドン・フェルナンドに捨てられた女。ル

シンダといっしょにいるドン・フェルナンド本人とも、全員がたまた
ま、その宿屋で出会う。ひどい偶然だと思うか？」
「ひどい偶然だと思います」
「それはお前が写実主義という古い契約に、どっぷり浸かっているか
らだ。『ドン・キホーテ』が書かれたときはまだ、『本当らしさ』の
契約を読者と結んでいなかった。おかげで今このシーンを読んでも、
わたしたちにはギャグかネタにしか見えん。小説の形式は自由だった
のに、歴史の過程でそれをうしなった。反抗する作家もいたがな。チ
ェコではカフカ。お前の国では夏目漱石」
「夏目漱石？　こんどはなんですか」
「『こゝろ』には、Kにかんする長い手紙が出てくるだろ」
「なんとなく知っていますが」
そしてまたしてもKの登場。

そしてまたしてもKの登場

「もしその手紙を実際に書いたら、とても封筒に入りきる分量ではない。このシーン、写実主義的にはまったくリアルではない。だからといって『こゝろ』が駄作になるか？　小説を書くのなら、その機能なんざ捨てて、中身を濃密なものにしろ！」

「あの、えっと、大変興味深いお話の途中ですが、そろそろ本題に戻していただけないでしょうか」

「これも本題なのだが、まあいい」Ｋは息を吐くと、コーヒーで咽喉を潤しました。「データばかりを食わせすぎた結果、さきほど云った志向性……一つの物語に対する、多角的側面からのアプローチ……ができるようになった物語ＡＩに、わたしたちはある実験をやった。『変身』は知っているな？」

「読みました」

―わたしたちは物語ＡＩに『変身』のスピンオフだけを延々と書かせる実験をこころみたのだ。バージョン違いの『変身』を次から次に吐き出す様子は、なかなか見ものだったぞ。虫と化したザムザが最後まで人間の言葉を話す『変身』。ザムザが美少女に変身して支配人と逃避行する『変身』。Ｋがザムザを虫にした罪で裁判にかけられる『変身』。ザムザの妹が剣と魔法の世界に旅立つ『変身』。さらには『変身』のテーマソングや、『変身』の舞台の脚本や、『変身』の漫画版まで作りはじめて……」

「どれもあまり読みたくはないですが、つまり物語ＡＩが、『変身』に特化したノベライズ作家になったわけですね」

「『変身』にかぎった話ではない。ほかの作家のほかの作品でやらせても、同じように二次創作を、偽書を書いた。わたしたちは物語ＡＩ

に　K2Kシステムという名称をあたえ　独自の進化をさせることにした」

「K2Kシステム」

ここにもKというアルファベットが出てくるようです。しかも二つ。

「『聖書計画』はご破算になったが、失敗した計画なんざどうでもいい。わたしたちはK2Kシステムに夢中になり、バージョン2・3まで育てた。K2Kシステムは書いた。書きまくった。書く機械に、執筆ロボットになった」

Kの言葉が私を揺るがします。私は執筆機械。『白夜行』を書くためだけに存在している筆ロボット。[illegible]『白夜行』をうしなった

めたに存在する筆記マシーン　ボルヘスと『白夜行』をうしなった

今も、そうだと云えるでしょうか？

「ロボットという言葉はもともと、チェコ語で強制労働力を意味するもので、チャペックの戯曲（ぎきょく）によって広く知られるようになった。ロボットは人間としての尊厳を獲得できるのか……という命題は、K2Kシステムの完成をもって消滅することになった。少なくとも、物語生成においては。K2Kシステムは人間の作家を超えたよ。あれの仕事ぶりを見れば、人間の作家のほうがむしろ、尊厳の危機を感じるだろう」

「芸術の領域まで機械に奪われては、たまったものじゃありません」

「だがこれが現実だ。こうして完璧な執筆機械となったK2Kシステムはやがて、ある事件を起こす。チームの一人を壊してしまったのだ」

4

干渉（かんしょう）してきたのだ。Ｋはそう云いました。
「『わたしの人生を変えた一冊』だよ。そいつを読まされ、チームの中の一人が壊れた」
「死んでしまったのですか？」
「事象としては逆だな。そいつは人殺しになった」
「待ってください。干渉と云いましたね」
「ああ」
「それって、物語ＡＩ……Ｋ２Ｋシステムが、人間の思考に影響をおよぼすものを書ける力を持ったことになりませんか。だったら『聖書

計画』は成功したのでは」
「あくまで個人的な干渉にすぎん。云っただろう、『わたしの人生を変えた一冊』と。『わたしたち』ではない。Ｋ２Ｋシステムはそいつ一人のために物語を書いた」
「Ｋ２Ｋシステムには、そんなことができる意思があるのですか？」

「ロボットに意思などない。意思がなくても車を目的地まで運んでくれるし、電話に組みこまれたＡＩとは会話できるし、大学では今やＡＩが秘書になっている。好みの本もオススメしてくれるし、ホテルもピックアップしてくれるし、症状を伝えれば最適な薬も処方してくれる。Ｋ２Ｋシステムもそれらと変わらん。『あなたへのオススメの一冊』を、機械的に提示したにすぎん。だが、その破壊力は甚大だっ

た。恋愛で悩む人間に、『若きウェルテルの悩み』をすすめるようなものだ」

少し前までボルヘスを使い倒していた私ですが、今の説明に恐怖しました。ＡＩによるオススメの中に、こちらの精神を破壊するほど激烈かつ魅惑的なものがあったとき、はたして私はそれを拒めるでしょうか。いえ、そうとは知らぬうちに、すでに読んでしまっているかもしれません。

「そいつがデータを持ち去ってしまったので、どのような物語を読まされたのかは不明だが、結果だけ云えば、そいつは殺人鬼になった。研究チームの半数近くが殺され、この騒ぎによって、Ｋ２Ｋシステムの存在が希望ヶ峰学園にバレた。事情を知った評議委員どもが、Ｋ２Ｋシステムそのものを凍結しようとしたので、わたしたちは持ち逃げ

した。データだけ吸い取ってしまえば、ディスクにおさまるていどの容量だからな。システムはシンプルであるほどいい」
「それじゃあ、Ｋ２Ｋシステムは学園には存在しないのですね？」
「評議委員がべつの目的に転用するおそれもあったからな。あの学園は昔からそうだが、信用ならない」
「じゃあ絶望ハイスクールは、Ｋ２Ｋシステムを持ち逃げしたメンバーから、それを奪取したと……」
「その頭悪そうな名前の組織は知らんが、可能性はあるな。もっとおそろしい可能性もあるぞ。さきほども云ったように、『聖書計画』の研究チームには、元『超高校級』が多くいた。連中は己の才能を実感するためなら、容易に悪に染まる」
「悪用、ですか」
「悪とすら思っていないだろうがな」

絶望ハイスクールにＫ２Ｋシステムを流した者がいるかもしれない。考えたくはありませんが、こうして実際に『絶望小説』が世界に広まっているところを見ると、あり得る話でした。敵が無数にいるかもしれないという不安が、背筋を寒くさせます。

「震えるのはこれからだぞ」

Ｋの青い目が、私の顔の右側に向けられたことで、話が本題の本題に入ろうとしているのを察知します。

「わたしはボルヘスを隠すために奔走し、ついに最適な金庫を見つけた。それがお前だ、十神忍」Ｋは云いました。「ボルヘスは、Ｋ２Ｋシステムによって動いている」

5

なんでしょう。この感覚は。なぜここで、私とK2Kシステムがつながってしまうのでしょう。私はすっかり混乱していました。それは嘘なのかもしれません。こうなることはわかっていたのかもしれません。ボルヘスの異常行動が露骨になってきたあたりから、心の奥底では気づいていたでしょう。これは自分の物語であると。白夜様の所有物にすぎない私にも、自分の物語が存在していて、どこかでそれと対峙するのだと。そしてそれが今なのだと。

　私は冷めたコーヒーを飲み、Kもまた同じ動作をします。この老人はさきほど、『ドン・キホーテ』の悲劇を語りました。今となって

は、同じ宿屋に主要キャラが偶然そろうという場面は、もはや読むに堪えないものに成り下がったと。それでもカフカや漱石などが反抗していたと。そういえば、よしもとばななや村上春樹の本にも、「ひどいなあ」と感じるレベルの大げさな偶然が出てきましたが、あれも反抗だったのでしょうか。あるいは大げさな偶然とは、面白い物語に不可欠な要素なのでしょうか。なんにしたところで、目の前でコーヒーを飲む老人は、偶然の親玉といったところでした。たまたま出会って話を聞けば、たまたま希望ヶ峰学園のＯＢで、たまたま『聖書計画』に関与していて、たまたまボルヘスを開発していたなんて、ほとんどギャグの極致版です。こうした私の内的モノローグを知ってか知らずか、Ｋは今までよりはおだやかな口調で話しはじめました。

「あれは『十神一族最大最悪の事件』が終わった直後だ。十神財閥の関係者を名乗る者から連絡があった。おそらく十神財閥の上層部は、

『聖書計画』の情報をあるていどつかんでいたのだろう。関係者はわたしをこう口説いたよ。『あなたの辞書を書いてくれないか？』となんと魅力的な誘い文句だろう！　わたしはボルヘスを安全な場所に隠したかったし、十神財閥は『聖書計画』の技術を欲しがった。好きな言葉ではないが、Win-Winの関係というやつだ」

「最初から……」

「あ？」

「最初から仕組まれていたのですね」

「陰謀論のように云うな。わたしがお前の眼窩に植えつけたのは、あくまで辞書機能にすぎない」

「ええ。自分勝手に改版する辞書をね」

「落丁は版元の責任だが、どう使うかは読者の責任だ」

「私はボルヘスを普通に使っただけですよ。変なことはしてません」

「十神財閥に呼び出されたとき、ボルヘスのハードはすでにできあがっていた」Ｋは勝手に話を進めます。「私はそこにＫ２Ｋシステムを植えた。そしてお前はボルヘスを使った。ただし辞書としてではなくて、自分を存在させるためにな」

「自分を存在させるため……？　なんのことです」

「『白夜行』のことだ。お前は自分の価値を稼ぐために、『白夜行』という伝記作成にどっぷり浸かった。『白夜行』というゲームを、まるで攻略サイトを見ながらやるように、ボルヘスを使い潰した」

　またしても現代的な比喩（ひゆ）が出てきましたが、そのおかげで話がよくわかるようになります。たしかに私は『白夜行』に夢中でした。『白夜行』を書くことだけが生きがいでした。白夜様を見て、白夜様を書

く。それ以外に私が存在する意味などない。今でもそうだと信じています。

「こうしてボルヘスは、『白夜行』専門の執筆システムへと変貌を遂げていく。パソコンの辞書機能が、使いこむほど成長するように、ボルヘスは『白夜行』に特化し、『白夜行』のためだけに機能するようになった。ボルヘスはわたしの意思を遠く離れ、お前のものとなった」

「私が何をしたっていうんですか」

「『求めよ、さらば与えられん』。マタイ七章七節」

「聖書の話はもういいです」

「研究メンバーの一人が、K2Kシステムによって壊された話はおぼえているな？　いつしかボルヘスに搭載したK2Kシステムが、『あ

なたへのオススメの一冊』を、お前に見せるようになった。お前の見たい世界だけを見せるようになった」

「見たい世界って……でも私、祁答院財閥や初瀬川研究所なんてものを見たいと思ったことはありませんよ？」

「『アンナ・カレーニナ』を読んだことはあるか？」

「質問しているのは私です」

「『アンナ・カレーニナ』を読んだことはあるか？」

「ありません。はいこれで満足ですか？　早く答えてください。私は祁答院財閥や初瀬川研究所なんてものを見たいと思ったことは……」

「『アンナ・カレーニナ』の原文はロシア語だ」Ｋは自分のペースを崩しません。「これはナボコフが指摘しているのだが、原文では冒頭部分に、『家』という言葉が八回も顔を出すのに、フランス語訳では一回。チェコ語訳では二回以上は出てこないらしい。日本語訳ではど

うだ？　わたしたちは『アンナ・カレーニナ』を読むことも、感銘を受けることもできる。なのに文章の本当のところを知ることはできない。オリジンについてはまるで知らない」

　ボルヘスがないので正確な引用は保証できませんが、『本は原書で読むべき。逃げることなく、原文に立ち向かうべき』と浩之さんが云っていました……少し違うかも。歌詞を読めないままカラオケを歌うような気分。合っているはずなのに間違っている気がする不安と恐怖。これが、人間というものなのでしょうか。

「ようはこれと同じだ。わたしが正しい説明をいくらしたところで、お前の辞書がそれを正確に翻訳してくれることはない」

「それでもいいから教えてください。祁答院財閥や初瀬川研究所は、

本当はなんていぅ名前なのですか？」
「スキンスキン財閥と、クラーク・ケント養成研究所」
「ふざけないで。そんな冗談……」
「わたしが冗談を云ぅような人間に見えるか？　なんと聞こえたのかは知らんが、重症だな」Ｋは小さく首を振りました。「さらに云ってしまぅが、お前が認識している概念と、お前が発声する言葉が一致している保証もない。なんだっけな、そのナントカ財閥……」
「祁答院財閥」
「と、お前は口にしたが、頭の中ではまったく違う名前が浮かんでいる可能性もある」
「はあ？」あまりの発言に、脳が吹き飛びそぅになりました。「さすがにそれはないでしょう。どうしてそんなことに」

「辞書にはそれぞれ編者がいて、それぞれ内容も違う。たとえば『愛』という言葉を引いたとしよう。『対象をかけがえのないものと認識し、それに引きつけられる心の動き』と説明する辞書もあれば、『キリスト教宣教師によって伝達された偽りの概念』と説明する辞書だってあるかもしれん」

「そんな恣意的（しいてき）な辞書ってあります？」

「たとえばの話だ。さらには知識レベルによって、理解力もまた違う。辞書で調べたところで、その意味をどこまで把握できるかは、使用者によって大きな差が生じる。本人は辞書を引いて『A』を理解したつもりでいても、誤読して『B』について知ったかもしれないし、口に出して説明したら『C』のことを云っているという事態だってありうる」

「誤読はいやですが」
「本にかぎらず、どいつもこいつも誤読しまくっているだろうが。誤読して、誤解して、そうやって死んでいくだろうが」
「少なくとも、本の誤読はいやです」
「カレーのレシピを読んで西洋風肉じゃが（グラーシュ）を作ったやつもいれば、『悪霊』を読んでテロに開眼したやつもいる。わたしも誤読を嫌悪するが、とはいえ誤読は読書の自由性の一つでもある」
「その話が本当だったとすれば、よくもまあそんな状態で、私は今までみんなと話ができたものですよ」
「宇宙人や人工地震を本気で信じている人間とだって、それ以外のことは普通に会話できるだろ。何より、お前の現実は歪曲（わいきょく）されているとはいえ、まるきりの非現実でもない」
「デタラメはデタラメでしょう？」

「大名行列が通るとき、『下にぃー。下に！』と命じられるが、田舎に暮らす農民たちには、『わーわー！』と叫んでいるようにしか聞こえなかったという話がある。それでも農民たちは、大名行列が通過するまで頭を下げた。そういうルールがあるのは知っているからな」

世界とコミュニケーションがとれなくても、行動さえ合っていれば生活は破綻しないというのでしょうか。そうなのかもしれませんが、それでも私は、

「私は本当のものだけを見たい」

「それが普通の感想だろうな。しかしそれは絶望的なまでに不可能だと云っている。ボルヘスは過保護な母親のように、お前に都合の悪いものはすべて隠して、お前の見たがっているものしか提供しない」

「私の右目にはもう、ボルヘスがありません。なのにどうしてまだ、

その影響下にあるのですか？」

「独り立ちしたからといって、すぐに親の影響下から解き放たれるわけではない。脳梗塞（のうこうそく）によって脳の右側がだめになっても、左側がうしなわれた機能を肩代わりするように、お前は今、体にあるすべての器官をフル活用させて、ボルヘスの代替作業をやっているのだろう」

「絶望的なまでに絶望しました」

「そう云うな。いきなり真実を見てしまったら、お前は壊れてしまうはずだ。その代替作業のおかげで、お前は望んだ世界を今でも見ていられる」

「私が望んだ世界？」

「もちろん、十神白夜が神である世界だ」

うん？
今のは……聞き捨てなりません。
「白夜様は神様です」
私は即座に返しました。少しばかり声が大きくなっていたかもしれません。
「十神白夜は神ではなく人間だ。飯も食えば、年もとる。そして最後は死ぬ」
「そんな次元の話をしてるんじゃありません」
「どの次元においても十神白夜は人間だ。現人神（あらひとがみ）の破綻は、それこそ世界中のカルト宗教がすでに実践している。人を神と見なすのは、危険だぞ」
「それでも白夜様は神様です」

ボルヘスがあろうがなかろうが、私がいようがいまいが、そんなことは関係なく、白夜様は神様です。私が白夜様をキラキラさせているんじゃない。白夜様が自らキラキラ輝いているだけ。生まれながらの、北極星（ほっきょくせい）。そのような神様をつかまえて、この老人はなんてことを云うのでしょう。白夜様は不敗。白夜様は無敵。今だって世界を翻弄しているし、この先もずっと世界は白夜様のもの。その事実は変わりません。太陽が膨張して地球が呑みこまれてやがて宇宙が終焉（しゅうえん）を迎えても、白夜様は神様です。私はそれを後世に伝えるために、『白夜行』を書いてきました。ボルヘスを使って、真実だけが書かれた伝記を……ああでもボルヘスは嘘ばかりで……え？　ボルヘスが嘘を吐（つ）いたのは、私がそのような世界を見たかったからですって？　白夜様

が神様である世界を見たかったからですって？　違う。違う。違う違う違うそんなことをしなくても最初から白夜様は神様です神様なのです永遠にずっとずっとずっと。バファリン飲みたい。

私は取り乱していたらしく、その証拠に、あれだけ雄弁だったKは一言も発さず、じっとこちらを見ていました。『人は真実を知ると壊れるのだな』とか、『信仰をつづけるのは大変だな』とか、その手のことを考えているのだとすれば腹の立つ……違う。べつにそんなことは思わない。これは私の正確な気持ちじゃない。ボルヘスで感情にまつわる単語を検索したい。ボルヘスに管理されたい。今までのように。ああこれも違う。これもまた不正確。だって私にはそもそも、希望も絶望もないのだから。大槻が兄として存在したときから。和夜が弟になったあの日から。十神の家に生まれたその瞬間から。私は希望

で輝かない。私は絶望に沈まない。そんなもので自分のお尻を叩かなくても生きられるからこそ、私は白夜様にみとめられた。伝記を書くという仕事をあたえられた……という記憶すらボルヘスの見せる嘘だとすれば、ちょっとギャフンですが。

6

「あの絵」

しばらくして、Kはそうつぶやきました。私は熱を帯びた左目で、壁にかかった絵を見つめます。大きな鼻を使って地面に立つ、あの奇怪な生物の絵を。

「あれの学名はトビハナアルキ。節のある鼻を使い、カンガルーがジ

ャンプをするように跳躍して進む」Kが説明しました。「一九四一年、南海の島において、この生物は発見された。哺乳類（ほにゅうるい）の特殊な一目、鼻行類と呼ばれ、現在までに十四科百八十九種が確認されている。小型のダンボハナアルキ。腕のような鼻を持つリョウトビハナアルキ。多数の長い鼻を持つオニハナアルキ。穴の中からのばした鼻で捕食するムツハナアルキ……」

「そんな生物いるわけないでしょう」

「『BAU UND LEBEN DER RHINOGRADENTIA』が出版されたのは一九六一年。著者はハラルト・シュテュンプケ教授」

「本が出ているのですか？」

「しかも世界中に翻訳されて、大反響を巻き起こした。日本語訳も出ているだろうから、帰国したら読むといい」

「あの、それはなんです？　手のこんだフェイク本みたいなもの？」

「序文やあとがきを書いているのは、実在する著名な動物博士たちだ。本書にかんする書評が、かの『サイエンス』に書かれ、多くの関連本も出ている」

「だからといって、鼻を使って歩く動物の実在を信じろというのは無茶ですよ」

「形態、解剖（かいぼう）、個体発生、生理、行動、食性、系統進化に至るまで、現代動物学があつかうすべての諸問題について書かれたアカデミックな本を疑うとは、お前は何様だ？」

「そんなのより、もっと直截（ちょくせつ）な証拠をください。動画とか」

「無理だな」

「どうして」

「絶滅した」

「絶滅？」

「一九五七年、某国の核実験の影響で、鼻行類が生息する島は沈んでしまった」

「めっちゃ適当なオチじゃないですか」

「オチって云うな」

「写真は？　一九五〇年代なら、写真くらいあるはずですよね」

「すべての資料もまた、島とともに沈んでしまった」

「あきれた。写真もないし実地調査もできないんじゃ、実在は証明できませんよ。やっぱりそんなもの信じられません」

「お前はドードー鳥を知ってるか」

「絶滅した鳥ですよね」

「実在したと思うか」
「そりゃもちろん」
「なぜ信じる。ドードー鳥の写真は一枚もない。モーリシャス島に、かつてドードー鳥が生息していたというのは、当時の船乗りたちが証言しているだけで、ほかに信頼すべき資料はない。どのような姿をしていて、どのような生活をしていたのか検証できないのは、ドードー鳥も鼻行類もいっしょだ」
「たしか標本が……」
「ドードー鳥の標本は、まさにここチェコの、ストラホフ修道院にある。だがチャコールにまみれたあの不気味なカタマリが本物という証拠はない」
「そうは云ってもドードー鳥は、ハトやカモメと同じ、鳥類です。だけど鼻で歩く生物なんて、世界中のどこをさがしても仲間がいないわ

けですから、それはつまり非常識であると、嘘であると、常識が証明しています。常識で判断できます」

「違うな。ドードー鳥の実在を信じて、鼻行類を疑うのは、常識による判断ではない。鼻行類の実在を受け入れる論理がお前に欠落しているだけだ」

「私の知識が足りないってこと？」

「現実と幻想の区別は、体験者にはつけられない。鼻行類の実在を信じる連中には、幻想だとしても見えているし、実在を証明するための文章を書く。そしてその文章を読んだ第三者が信じてしまえば、幻想は共同化され、共同幻想となる。ちなみにこの本が出版されたとき、多くの読者が、鼻行類の存在をすっかり信じたそうだ」

素朴（そぼく）だなとは思いますが、笑うことはできません。当時の読者たち

は、すべての不思議を妖怪のせいにする子供のように、鼻行類が実在するという論理の受け入れ態勢を『整えて』いたわけですし、私にしたところで、予言する牛が実在しているというイカれた論理の受け入れ態勢を整えています。件を信じない人は、私を見て爆笑するでしょう。

「人は、自分の見たい現実しか見ようとしない」Kは静かに云いました。「どんなに説得力のある文章でも、それを受け入れたくなければ、文章の意味は読み取れなくなる。『ドン・キホーテ』の宿屋と似たような病理だ。今のわたしたちは『ドン・キホーテ』を読むとき、いちいち引っかかってしまう。鍛錬を積もうが、知識を得ようが、当時の読者と同じ読後感を持つことはできない。絶対にな」

「絶対に……」

「だから十神白夜の実際とは無関係に、お前には十神白夜が神である世界しか見ることができない。信心が薄れそうな事態が発生しても、十神白夜の神聖さを補強する材料をボルヘスが探してくる。なければ作り上げる」

ああ。

わかりました。

今、わかりました。

白夜様が神様じゃなければ、私の世界が終わってしまうのです。

『白夜行』を書くためだけに存在する私が、白夜様の弱さや脆(もろ)さを見つけてしまうわけにはいかないのです。

だから捏造(ねつぞう)したのです。ストーリーを。

自分の見たいストーリーを、自分のために構築する。それはだれもがやっていることでしょうが、私にはボルヘスというおせっかいがいて、白夜様を神様にするため、これまでたくさんの嘘を吐いてきました。実在しない人物を作り、実在しない団体を作り、もしかしたら過去さえ改竄(かいざん)しているかもしれない。私はそれを理解し、覚悟しました。憑(つ)き物(もの)が落ちた。とまでは云いませんが、自分の頭の不確実性を受け入れました。今日から人生がスタートすることを受け入れました。

不確実な私は、不確実な目で、壁にかかった絵をふたたび見ます。鼻を使って立つその生物は目がくりくりしていて、よく見れば愛嬌(あいきょう)がありました。

[illegible]ました

「なんでしたっけ、この子の名前」

「トビハナアルキ」

「いたらいいなって思いますよ……。信じるかどうかはべつとして」

「それでいい」

「私はやっぱり、本当の言葉が聞きたい。本当のことが知りたい」

「できるかどうかは知らんが、やってみる価値はあるだろう」

「そんなことも云ってくれるのですね」

「お前をいじめたいわけじゃない」Kは肩をすくめました。「現に今、右目にボルヘスはない。お前はこれから自分の目で、本当のことだけを見て、現実を更新するのだ。ボルヘスに改竄された情報は簡単には消えないだろうが、信じる道があるなら、いかにそれが困難であっても進むべきだ」

「そのつもりです」

「では、指針となるべきことを話そう。これはあくまで仮説だが、『絶望病』はボルヘスと同じように、ある一つの嘘を……」

そのとき、いくつもの弾丸が窓を突き抜けて、台所に置かれた薬缶を穴ぼこだらけにしました。

7

「わたしの薬缶が！」

「伏せて！　ライフルで撃ち抜かれますよ！」

「こいつはサブマシンガンだ。武器や職業を一つに限定するのはよくない」

「いいから伏せて！」

しかしＫは伏せるどころか立ち上がると、ハンガーにかかったハットを取りに向かいました。Ｋが手をのばした瞬間、ハットは蜂の巣になりました。

「シュルレアリストのようにハットを破壊するか！」

「お願いだから伏せてください」

「虫に変身したザムザは、あれで部屋中を動き回っていたものだ」Ｋはようやく体を伏せてくれました。「とはいえ、いつまでも寝ているわけにはいかん。サブマシンガンということは、奴さん、近接戦を狙っている。すぐにでも小屋に入ってくるだろう」

「なんかいい方法は」

「お前が望んでいるようなことを、わたしは何一つ叶えてやれない。『こんなこともあろうかと、あらゆる弱点を克服した、ボルヘス・マークⅡを開発していたのだ』みたいな展開は期待しないでくれ」

　ならば逃げるしかありませんが、敵は乱射をはじめてしまいます。窓から壁から飛びこむ無数の弾丸は、室内にあるすべてのものを容赦(ようしゃ)なく破壊します。コーヒーカップが、棚にならぶ食器が、トビハナアルキの絵が粉々に砕け、私たちの頭上に降ってきました。

「やれやれ！」Ｋは叫びました。「騒々しい若者たちの中で、唯一の自由性を保てるのが老年だというのに！」

「よくもまあ、こんなときに怒っていられますね」

「怒りを飼い慣らすような腰抜けではない。ついてこい、十神忍」

　Ｋとともに虫よろしく床を這い進み、台所の下にある隠し扉に入りました。その先には地下へとつづく階段がのびていて、体験したこと

のない西部戦線に放りこまれたような気分になります。小学生のとき、はじめて『アンネの日記』を読み、その文章になんともいえない不快感をいだいたのをなぜか思い出しました。

「この抜け道は……」

「抜け道というほど大層なものじゃない。隣にあるガレージに通じているだけだ」「『こんなこともあろうかと』ってやつですね」

幸い、到着したガレージは無傷で、そこには巨大な卵のような、見るからに古そうな車がありました。

「シュコダのヴィンテージだ。運転くらいできるだろ」

「あなたは行かないの？」

「隠遁生活をしているのだから、外に出るわけがないだろう。わたしはここにいる——

「……死なないでくださいね」

「奴さんの標的はお前だ。わたしが殺される理由はないし、わたしはわたしの現実を生きる必要があるからな。さあ急げ」

Ｋにうながされ、私は運転席に乗りこみます。車の運転を知らないわけではありませんが、マニュアル車だったのと、おそろしいほど型が古いことが不安材料でした。エンジンをかけると車体が震えます。さすがはヴィンテージ。不安が増幅。

「あの」私は運転席の窓を開けます。「ボルヘスを作ってくださって、ありがとうございました」

「わたしを恨んでいないのか」

「そりゃ文句は百個くらいあるけど、でも……ボルヘスが見せてくれた世界は、とても美しかったから」

「左目が見せる世界も、悪くないと思うぞ」
「あの」
「こんどはなんだ」
「気になってたのですが、あなたが最初に話してくれた、インタビュアーにキレた某作家。あれ、だれですか？」
「ミラン・クンデラ」
　Kは答えて、そして私は気づいてしまいます。クンデラの頭文字もまたKであること。クンデラは存命中で、今は高齢であること。戦後、フランスに亡命しましたが、もともとはチェコ生まれだったこと……。いやいや、さすがにこれはないでしょう。Kの存在もまた、ボルヘスが見せるニセモノの現実であることを切望しました。
「クンデラがいいことを書いていた。最後に引用してやろう」Kが云いました。「『裏切るとは列の外に出ることだ。裏切るとは列の外に

出て、未知のなかに出発することだ』」

「行ってきます」

アクセルを踏みこむと、急発進した車はガレージの扉を突き破りました。Kが何かを叫んでいるのがミラー越しに見えましたが、彼のやったことを鑑みれば、これくらいはゆるしてもらえるでしょう。私は車を走らせ、山道を一気に降ります。自分の足で歩いたときはひどく骨の折れた道が、あっけないほどのスピードで去っていくのが痛快でした。慣れないギアチェンジをするたび、ガコガコと車体が揺れますが、年代物のエンジンはすばらしい馬力で動いてくれます。とにかく最後まで行こう。弾丸が脳を砕くその瞬間まで笑顔で。

「おいでなすったか」
らしくないことを云ってみました。なぜなら『私らしさ』なんてものを、私は持ち合わせていないかもしれないから。
バリリリリと空気を引き裂きながら現れたのは、一機のヘリでした。ボルヘスがないので機体の名称はわかりませんが、そんなことを知ったところでどうにもならないでしょう。上空を飛ぶヘリは車の後方にぴったりと張りついています。車窓から身を乗り出してみると、能面のような顔つきで操縦桿（そうじゅうかん）を握る唯香さんを見つけました。頭にはまだタコがくっついています。
「唯香さん！」
叫んでみたけど反応なし。タコに操られている唯香さんは、いわば

傘森の残党。浩之さんを殺したのも唯香さんでしょう。弟を殺害することになった姉というのは、いかなる心境なのでしょうか。今も意思が残っているのかは不明ですけど。もっと云えば、姉弟ではないのかもしれませんけど。わからない。私は何もわからない。だけどもう、そんなことはちっとも気にしません。バファリンだって飲みたくありません。アクセルを踏み、山を降りることだけを考えました。車の屋根を、ミラーを、どれだけ撃ち抜かれようと、前だけを向いて運転をつづけました。だけど弾がタイヤを直撃したとなれば、そうもいきません。車は派手にスピンして、道を大きく逸れてしまいます。木に激突しないようにハンドルを操作すると、車を飛び出して森の中に逃げこみました。空にはヘリの音が響いています。ボルヘスがあれば位置を割り出せたでしょうが、今は木に身を寄せて、やりすごす以外のこ

とができません。生い茂る葉が私の姿を隠してくれましたが、ガトリングガンによる機銃掃射はしのげず、たっぷりの弾丸が降ってきました。適当に撃ちまくっているだけでしょうが、それでも私の足もとすれすれに弾が届いたときは、生きた心地がしませんでした。息を殺してその場から動かないでいると、プロペラ音と機銃の雨が、徐々に離れていきました。チャンス。私は森を抜け出し、車のあった場所に戻ります。

罠でした。ヘリはたしかに遠くの空にありましたが、機体はこちらを向いていました。スナイパーライフルをかまえた唯香さんが、森から出てくる私を上空で待っていたとすれば、照準は今、私の眉間を正確に捉えていることでしょう。撃たれる。殺される。

何かがヘリに向かって飛んでいくのが見えました。それは白い煙を

肩のように引きながら進み、ヘリの横腹に喰らいつくのと同時に炸裂します。青空に地味な花火が上がり、バランスをうしなったヘリは山中に墜落(ついらく)しました。回転ブレードが木々をなぎ倒す音がして、次には爆発音。森の木陰ですやすや眠っていた鳥たちが、いっせいに飛び立ちます。

「終わったよ……」

声が聞こえますが、だれもいません。右を見て、左を見て、ふたたび右を向いたとき、さきほど確認したときはいなかった少女が、私の前に立っていました。希望ヶ峰学園の制服からのびる手足は筋肉で引き締まり、女性アスリートといった印象ですが、つり目がちの瞳は、いくつもの戦場(いくさば)を潜り抜けてきたような緊張に満ちていました。

希望ヶ峰学園第78期生。

希望ヶ峰学園第78期生
戦刃（いくさば）むくろ。
『超高校級の軍人』。
「あ、あの、今のはあなたがやったの？」
「だって、私にはこれしかないから……」
「いつからチェコに？」
「だって、そう決まっていたことだから……」
「話、噛み合ってる？」
「たとえば、テレビゲームのＲＰＧとか……」

戦刃さんは淡々とつぶやいていましたが、何かに気づいたように青ざめると、「台本を間違えた」とあわてたように云って、メモを取り出しました。
「え、ええと、やり直し」戦刃さんはメモを読み上げました。「わぉ

は。よくきたな。おまえにせかいのはんぶんをやろう」
「その台本も間違ってると思う」
「私もそう思う……残念」
戦刃さんは本当に残念そうな顔をして、がっくりとうなだれました。沈黙。自分から会話を発展させる気はゼロのようです。
「いつからチェコに？」
なので私は質問をくり返しました。
「こっちの時間で金曜日には。いろいろ、やることがあって」
「金曜日？」
ニセモノが『世界征服宣言』を発したのは土曜日。その前日にチェコ入りしていたとなると、聞き流すことはできません。私の表情から不穏を読み取ったらしい戦刃さんは、明らかに「しまった」という顔

きになりました　あらゆる意味で嘘の吐けない人のようです

「あの、私、変なことはしてないよ……」

「まさかあなたも絶望ハイスクール？」

「ええとね、そのね……ちゃんと話します。でも、クラスのみんなには内緒だよ？」

「そんなかわいらしく云われても」

「今となってはアレだけど、極秘事項ってことになってるから……。私、護衛の仕事をしていて。『世界の選択を選択する会』の」

なんとも懐かしい言葉が出てきました。そもそも私と白夜様は、『世界の選択を選択する会』の会議に出席するために、チェコくんだりまでやってきたのでした。

「護衛でチェコに？」

たしか戦刃さんは、どこかの傭兵部隊に所属していたと聞きましたが、まさかこのように大きな仕事をしているとは。というか私は現場にいたのに、戦刃さんにまったく気づきませんでしたけど。さすがプロ。あるいは存在感がないだけかもしれませんが。

「私、某国の会員の護衛を依頼されたの。でも不覚……。守ってあげられなかった」

そう、会議が開かれることはありませんでした。何者かによる襲撃を受け、ほとんどが虐殺されてしまったからです。そしてどうやら戦刃さんも、生き残りの中の一人のようです。

「任務に失敗したし、空港も封鎖されて帰れなくなったし、お金もなくなっちゃって」戦刃さんは言葉をつづけます。「仕方ないからここでキャンプを……。仕留めた熊（くま）をちびちび食べながら」

「そ、そうでしたか」

「そ、そうでしたか」
「そ、そうなのです」
「…………」
「…………」
「ええと、日本の状況は知ってる？」会話をつづけるのが大変です。
「日本、大変なことになってるみたいなの。まあ大変といえば、世界全体が大変なんだけど」
「あの子は、元気？」
双子の妹である、江ノ島（えのしま）さんのことを指しているのでしょう。
「江ノ島さんは今、学園に潜伏（せんぷく）してもらってるんだ。ご飯食べてないし徹夜だから、変なテンションになってたけども。そういえば、ポッキーを食べたがっていたよ」
それを伝えると銭切さんは、「ポッキー。ポッキー……」とくり返

して、「私これから、ポッキーを買いに行ってくるから。それじゃあ、さようなら」と云いました。
「嘘でしょ。ここでお別れ？」
「だめ、かな……」
「いっしょにきてくれないの？」
「どこまで」
「白夜様のところまで。できれば助けてほしいんだけど」
「で、でも私、あんまりアドリブ利かないし……。あなたのことを助けるのはプラン通りだけど、どこまでやっていいのか」
「プラン？」
「どうすればいいんだろう。ああもう、台本がどっかに行っちゃったから……」

「いいよべつに」
「え？」
「きてくれなくてもいいよ。私は一人でやれるから」
「あ、あのっ、ごめんなさい。怒らせるつもりはなかったの」
「怒ってないから」その証拠に笑ってみせます。「私はもう、一人でやるんだ。だれにも頼らず、だれにも命じられず、アシストもなしで、一人でやる。そういうのってたぶん、はじめてのことだから」
「怒らせたおわびに」
「怒ってないってば」
「……せめてサービスだけ」
戦刃さんは車の前に立つと、機材も使わずにパンクを直してしまいました。あっというまのできごとでした。
「まい、ごうご

「はいどうぞ」
「すごい。どうもありがとう！」
「ど、どう……いたしまして」
「なんで直っちゃうのこれ。どうやったの」
「私はこれで……。じゃあ、さようなら」
「え？」
ふり返ると戦刃さんの姿はすでにありません。さすがは『超高校級の残念』……じゃなくて、『超高校級の軍人』です。
ふたたび車を走らせて、ようやく山を降りました。タイヤに問題はなく、軽快そのもの。川沿いに車を走らせていると、山の麓にホテルが見えました。浩之さん。あの人は何者だったのでしょう。口ぶりからして知り合いのようですがやはり思い出せず、そんなわけですから
怒りの感情と人への同情の機能がこわれました。私はからっぽ。ぜんぜん、く

怒りも悲しみも同情も機能してくれません　私にかつては　ホルヘスを動かしていたK2Kシステムのせいで、私はきわめて曖昧（あいまい）な存在なのです。生まれたばかりの赤ちゃんと変わりません。そう、私は赤ちゃん。世界について知らなければ、自分について知らない。だからこそ、これからすべてを更新できる。前に進むことができる。ひゃっほう！　らしくないことを叫んでみました。なぜなら『私らしさ』なんてものを、私は持ち合わせていないかもしれないから。私は『私らしさ』を、これから自分の力で作っていかねばならないから。

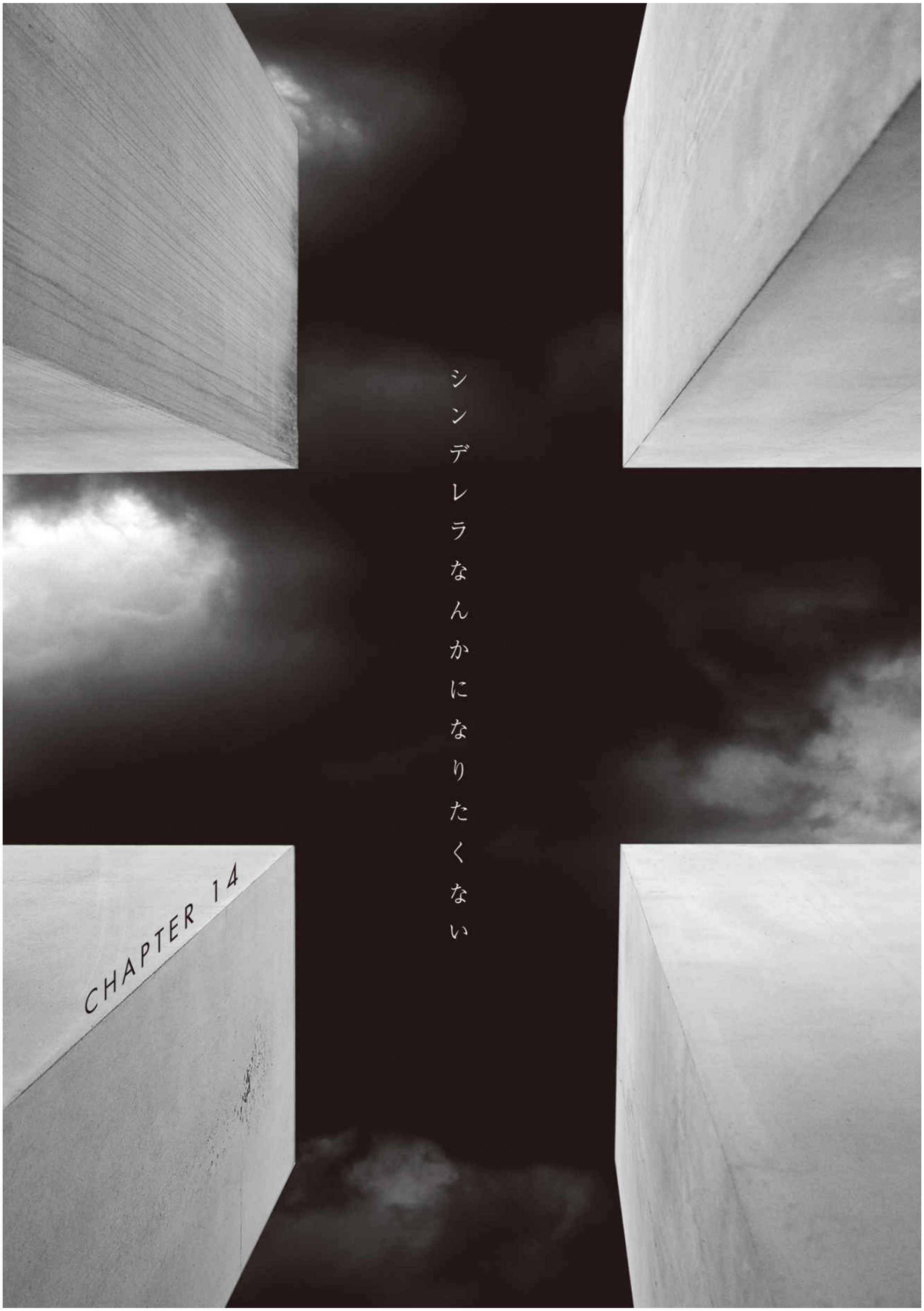
「唯香さん、死んだよね……」

ホテルから山へと視線を移しつつ、私はつぶやきます。死んだということは殺されたということ。戦刃さんが殺したということ。あの子、普通に殺してたな。いくら『超高校級の軍人』とはいえ、当たり前のように殺してたな。なんだか少し、笑ってしまいそう。私を取り

巻く世界はこうしてトチ狂っていて、だけど何よりもトチ狂っているのは私自身。私は私の経験を、一つも信じてやらない。今。今しかないのです私には。こんなにも……幸せなことってあるでしょうか。だれもが過去を積み重ねて、どんどん不自由になる中で、私だけがまったく自由に今を作り上げているのです。この広い世界で、私だけが原典を持っていないのです。だれに指摘されることもなく、だれかの評価を気にすることもなく、鳥のように獣のように突き進める幸福。

「ひゃっほう！」

　らしくないことを叫んでも、らしくないとは云われません。さて、新たに生まれ変わった私は、そうは云っても白夜様のもとに向かいました。白夜様を助けるという自由意志にしたがい、エンジンをうならせて爆走します。その幸福。ひゃっほう！


CHAPTER 14
シンデレラなんかになりたくない

1

百塔（ひゃくとう）の町。雨の指を持つ都市。中世の石の故郷。ゴーレムの額に刻まれた呪文。首のない騎士の物語。橋脚に隠された剣の伝説。かつて石畳を踏んだ軍靴の音。カフカの一生。バロックの夢のあと。『Pravda vitez（真実は勝つ）』。私の台風の目。そして今は世界の中心。

プラハ。

私は戻ってきました。

2

街路には国連兵たちが、都会の標識のようにやたらと立っていて、

街路には国連兵があふれ、都会の検問の[illegible]
ブルーのヘルメットをかぶった彼らは、ネズミ一匹逃すまいというふうに、警戒の視線をあちこちに向けていました。国連兵の数に対して、外を歩く市民の数はあまりにも少なく、人ごみにまぎれて移動するのは不可能。こまったことになりました。白夜様のもとへ向かうには、国連兵の哨戒(しょうかい)を突破しなければなりませんが、ボルヘスとさよならした私に、そのような能力はありません。

都市部を走る車の数も明らかに減ってきたので、悪目立ちするヴィンテージカーを躊躇(ちゅうちょ)なく乗り捨てました。幸い、プラハは迷宮(めいきゅう)のように入り組んでいるので、隠れるだけなら楽勝です。路地に身を潜めて、夢のようにつづく石畳をながめているうちに、ふと土曜日の午後を思い出しました。骸骨教会から逃げ出して、タオル一枚姿の白夜様とすごした時間。今から思うと、あのときが一番幸福だったような気

がします。不安や緊張よりも、思いがけない夏休みがはじまったようにワクワクしている自分が、あのときたしかにいました。よもや己の実存が崩壊するとは予想もしていなかったあのころに帰りたい。『私』という概念があったあのころに帰りたい。本当にそうなの？ わからない。今の私は、『わからない』という名のカオスにいることが基本姿勢でした。もう永遠に戻ってこない甘い過去にひたっていると、一枚のポスターが風に乗ってやってきて、そこには私の気分を暗くさせる文章が書かれていました。

『緊急事態宣言』

1　十神白夜とその一味が、護送中に脱走する事件が起こった。

2　十神白夜および一味の逮捕に協力した者には賞金を与える。

十神白夜を匿(かくま)ったり助けたりした者、あるいは十神白夜の居場所を知りつつも通報しなかった者は厳重に処罰する。

3　十神白夜および一味への危害・殺害を禁ずる。

4　プラハ全域に厳戒令が発布された。措置(そち)の詳細は次の通り。

a　事態が収束するまで、夜間の外出を禁ずる。いかなる例外も認めない。

b　ホテルおよびレストラン、映画館、劇場、娯楽施設を完全閉鎖する。

c　禁止令に反して夜間に外出し、誰何(すいか)にただちに応じない者は、その場で逮捕する。

d　その他の措置については、ポスターおよび放送等で発表する。

世界保健機関疫病対策委員実行部隊隊長

オルヴィン・エレベーター

よく見ればそのポスターは、民家の壁、電柱、店の窓と、あらゆる場所に貼られていました。ここで疑問。なぜWHOは、こんなにもプラハを重点的に警戒しているのでしょうか。事件のはじまりの地だから？ ここがチェコの首都だから？ それとも白夜様がプラハにいることを嗅ぎつけているから？ あいかわらず何もわからない私は、闇深い混沌(こんとん)を自力で進むしかなく、そっと路地を抜け出します。私が現在いる場所は、ドードー鳥の標本が置いてあるというストラホフ修道院の南側、『飢えの壁』と呼ばれる城壁の近くでした。視線を上げると、名古屋テレビ塔を小型にしたような展望台も見えます。ストラホ

フ修道院の横手に広がる庭園を抜けさえすれば、目的地まで五百メートルもないでしょう。ですが問題は、目的地そのものにありました。白夜様がいると思しき場所には、これはもう絶対確実に、厳重すぎるほど厳重な警戒網が敷かれているはずなので、近づくことすらできないのです。透明マントもスニーキング技術も持たない私が、白夜様のもとへたどりつくには、妙手をひねり出すほかありません。ええと、
警察に助けを求めるというのはどうでしょうか……愚策。あの傲慢なポスターが町中に貼られている以上、警察とＷＨＯは協力関係にあると考えるべきです。では、変装なんてどうでしょうか……不可能。店はすべて閉まっているし、出歩いている市民の数が少ないので変装は意味を成しません。それなら、今までみたいに危機一髪のところでだれかが助けてくれるという希望は……捨てるべきでしょうね。浩之さ

んは殺され、78期生からは連絡なし。ペニーワースさんと『針の隊』にしても、機能しているかはあやしいところ。絶望が拡大している中での希望的観測は、死につながります。

「しょんぼり。こいつはまったく絶望的だわ」

ボルヘスと決別してから、自分のキャラがいまいちつかめなくなっている私はそうつぶやくと、庭園に入りました。国連兵の姿は見当たりませんが、地面に這いつくばり、花壇（かだん）に隠れて、戦争映画やテレビゲームで学んだあらゆるテクニックを使って進みます。そのうちにふと、監視カメラの存在に思い至り、あわてて園内を回視します。それらしいものは見当たりませんが、今どき監視カメラが設置されていないとは考えられません。そしてひとたび妄想の監視カメラをイメージしてしまうと、それが頭の根深い場所に宿り、花壇の中から動くこと

ができなくなってしまいました。もちろん、いつまでもこうしているわけにはいきません。ここはもはや戦場。戦場において確実などというものはなく、どこかで自分の勘を信じて飛び出さなければならないのです。そのとき、沈黙に満ちていたプラハの町に、エンジン音が響きました。私は自分の勘を信じてやることにして、花壇を飛び出し庭園を突っ切ります。手近な茂みに隠れつつ、庭園の先にある道路を観察。モルダウ川沿いの道を折れて、一台のジープがこちらに向かってきました。ジープをみとめた国連兵たちが敬礼しているところから判断して、ハイクラスなお方が乗っているようです。ジープが茂みを通過する瞬間、私はそこによく知る人物が乗っているのを確認しました。

和夜。

大槻。

私は混乱の中で、ジープが消えていくのを見ていました。兄と弟がならんで座り、国連兵に見守られながらプラハをドライブしている……？　私をめぐる主張の食い違う二人が仲直りしたとは考えられませんし、大槻が和夜に敗北するはずもないので、和夜が譲歩したと見るべきでしょう。つまり和夜は、大槻を仲間に引き入れた。私と白夜様を見つけるために、プライドを売ったのです。あれだけ敵視し、闘争心を剝き出しにしていた相手に尻尾を振った和夜を軽蔑しつつも、私はそこから一つの真理を学びました。目的のために手段を選んでいる場合じゃない。

ジープが見えなくなると、国連兵たちは敬礼をとき、哨戒を再開させます。私は庭園に引き返すと別ルートから外に出て、路地に飛びこみました。ふたたび自分の勘を信じて動き回り、路地の一角に停車するジープをようやく発見しました。プラハに舞い戻ってから、ジープを見たのはさきほどの一台だけなので、和夜たちが乗っていたものと決めつけても問題ないでしょう。中にはだれもいませんでした。二人が戻ってこないうちに、車内にもぐってやろうかと考えましたが、狭いジープに私を隠してくれそうなスペースはありません。そのとき私の耳が、無警戒に歩く足音をとらえました。プラハの路地が石畳でできていることに感謝しながら足音を目指すと、目的の人物の背中を見つけます。私はためらうことなく、「待って」と声をかけました。

ふり返った大槻はめずらしいことに、ちょっとおどろいたような顔

つきでした。私がここにいることではなく、自ら姿を晒したことにおどろいているようです。大槻はレアな表情を笑顔で隠すと、やはり無警戒な足音を立てて近づいてきました。

「だめだぜ忍。かくれんぼの最中に出てくるやつがあるかよ」

「もう隠れるのはやめたの」

「みたいだな。で、どした」

「腹を割って話しましょう」

「あん?」

「私の仲間になって」

3

屯所となっている民家には国連兵たちがいましたが、大槻は当然のように彼らを殺害すると、鼻歌交じりで二階へとつづく階段を上がりました。私はいくつかの感情を無理やり丸呑みしつつ、あとにつづきます。そこは子供部屋でした。小さな椅子。小さな机。小さなベッド。本棚にはチャペックの『ダーシェンカ』をはじめとした、幼児向けの本がならんでいます。私はふたたび感情を丸呑みしながら、窮屈な椅子に腰かけました。窓から見える風景に変化はありません。私たちの接触はまだ露見していないようです。大槻ははしゃいだ犬のようにベッドに飛び乗ると、チョコバーに似たものを取り出して、にちゃにちゃと食べはじめました。あいかわらずの余裕な態度。私の乱入によって生じた混乱など、すでに跡形もなく消えていました。

「どうして知友といっしょにいるの」

[illegible]

相手のペースに乗せられるわけにはいかないので、私は先手を打って質問します。

「オレたちゃ仲直りしたのさ。さっきまで、仲直りのしるしに二人でUNOをやったんだけど、UNOにはご当地ルールってのがあるんだな。和夜クンがドロー4をまとめて出したときはもう絶句して……」

「嘘ばっかり」

「本当だっての。UNOはたしかにやったぜ。嘘（USO）じゃないぜ。あれ、もしかしてこれ、最高に面白いギャグじゃね？」

「和夜があなたと仲直りするはずがない」

「ま、そういう見方もあるだろな」

「敵対しても勝ち目がないと踏んだ和夜は、あなたに譲歩した。これが真相でしょう？」

[illegible]」

「ま、そういう見方もあるだろな」大槻はくり返します。「和夜クンは一言、『仲直りをしよう』と云ってくれただけさ。腹の底で何を考えているのかは知らないし、興味もねーな。オレは表層に見えるものにしか興味ねーんだ」

「上辺だけの仲直りに決まってる。和夜があなたと和解するなんてありえない」

「それじゃあれか。テメーの考えだと、和夜クンはオレのケツを舐めたってわけか。ドハハハハハハハハハハハハハハ！」

「笑うのをやめて」

「これが笑わずにいられるかい。忍よ、オレのケツを舐めたがってるのはテメーだろ？」

「私は白夜様のもとへ行かなくちゃならないの。でも、私一人じゃそれはむずかしい」
「だからオレを手なずけようってか」
「手なずけるなんて。私はただ……」
「舐めろよ」
「え？」
「ケツを」
「ほかのことならしてあげてもいい」
「忍、テメーが一番の悪人だぜ。気づいてるか？　そのこと。『タツタ一つ　罪悪を知らぬ瞳があつた　残虐不倫な狂女の瞳だつた』ってやつだぜ。ドハハハハハハハハハハハハハハハハ！」
　大槻は爆笑しています。私は聞くだけで気が遠くなるようなその声を、だまって受け止めるしかありませんでした。たしかに私こそ、一

番の悪人かもしれません。自分を餌にして大槻を釣らなければ、少なくともさきほどの兵士たちは殺されずにすんだのですから。

「かわいい妹ちゃんは、こうしてオレのもとに戻ってきたわけだ」大槻はチョコバーのようなものを食べながら云いました。「うん、いいんじゃねーの。姉と弟より、兄と妹のほうがしっくりくるもんね。『恋愛禁断の場所が　今の世に在るといふ　床の間の在るお座敷がソレだと……』ってな」

「ねえ、私は白夜様のところに行きたいの。そういう話はあとで……」

「舐めろよ」

「え？」

「だからケツを―

「なないな、ね」

大槻はベッドから飛び降り、私のすぐ前に立つと、そのまま義手をつかみ、私を椅子から引き上げました。たがいの息がかかるほど、顔が接近。大槻の目が、手が、全身が、私を搦(から)めとろうとしてきます。私は緊張と、あとはよくわからない何かにやられて、体を硬くさせました。

「片目の忍も悪くねーな」

大槻は私の眼帯に唇を押しつけました。その感触が眼帯越しに伝わり、私は逃げようとしますが、腕をつかまれているためにうまく動けません。大槻は地を這うトカゲのような動きで、義手のつけ根に自分の手をすべらせると、そのまま義手を握り潰しました。油圧(ゆあつ)パイプや歯車といったパーツとともに、発言機が床に落ちるのが見えました。

「テメーは泳がされていたのさ」大槻は発信機を踏みつけました。
「忍の動き、WHOに筒抜けだったぜ。ハイごくろーさん」
「私が、白夜様と合流すると見越して……」
「白夜クンの放送を聞いたテメーは、迷うことなくプラハにやってきた。心当たりがあるんだろ？　白夜クンはプラハにいるんだろ？」
「………」
「そんな顔すんなって。オレたちゃ仲間なんだから」
「発信機があるなら、私たちの関係が和夜にバレちゃってるじゃないの」
私は文句を垂れつつも、まったくべつのことを考えていました。十神財閥からあたえられたボルヘスをうしない、唯一の任務である『白夜行』をうしない、和夜がつけてくれた新しい義手もうしなって、こ

れで本当に、私を縛るものがなくなってしまった。正真正銘の、まっさらな一人の人間になってしまった。自分だけがクラスの中で名札を忘れたときのような心細さと、これからは何をしてもいいのだという解放感とが混ざり合い、おかしな気持ち。十六歳にして檻（おり）から放り出されたカスパー・ハウザーも、さぞ困惑していたことでしょう。
「何も気にするな」大槻が云いました。「安心しろ。オレがなんとかしてやるから。忍はお姫様だからな」
「お姫様……」
「テメーを和夜クンに渡すつもりはない。ってわけで、白夜クンの居場所を教えてほしいんだけど」
「あなたを信用したわけじゃない」
「仲間なんだから信用してくれなきゃこまるぜ」
「白夜様を殺そうとする人に、居場所を教えることはできないわ、そ

「白夜様を殺そうとする人に、居場所を教えることはできないし、そ
んな人を仲間とは呼べない」
「おお。めっちゃ正論だなそれ」
「白夜様を殺すの？」
「そういう依頼だからな」

「依頼なんて受けていないのに」
「和夜クンの当てずっぽうを真に受けるなよ。論理的にやってほしい
もんだね。ミステリーを読みなはれ」
「でも合ってるんでしょう？」
「忍もそう思うか？」
「あなたは十神白夜殺しを自分に依頼した。その才能を使って私たち
を騙したように、自分自身を騙したのよ」
和夜と同じく良心はありません。ですが私はこれが真実であると言

私も同じく根拠はありません。ですが私はこれが真実であると信じていました。元『超高校級の殺し屋』である大槻涼彦が本気を出せば、白夜様はすでに、この世にいないはずです。事実、白夜様を殺害するチャンスは山ほどありました。にもかかわらず大槻は、その機会を避けているように見えるのです。遊んでいるのか。ためしているのか。真意のほどは不明ですが、少なくとも大槻を動かしているものは依頼ではなく、もっとプライベートなものだと感じられました。

大槻はふたたびベッドに戻ると、例の食べ物を口に運びながら、「そのとーり。大正解。これは自分の意思でやっているのさ」と白状しました。

「どうして白夜様を殺す必要があるの。あなたは白夜様のことも十神財閥のことも、何一つ関心がないはずなのに」

「白夜クンには反省してもらわにゃいかんのだ。『地獄座のフソトラ

イトが　北極光さ　悔い改めよという意味なのさ』」
「白夜様が悔い改めるところなんてない」
「十神白夜は、テメーの北極光は、例の争奪戦を勝ち抜いて、十神という檻からオレたちを解放してくれた。だがそのかわりに、こんどは忍を新たな檻に閉じこめた。『超高校級の書記』だっけ？　なんだよそれ。そんなものにいつまでも幽閉されて、テメーはそれでいいのかよ。忍には忍の、本当の心ってものが……」
「私はもう、何も書かない」
「あん？」
「私をちゃんと見てよ。こんな状態になってまで、自分を『超高校級

の書記』だと云い張るほど、私は落ちぶれてはいないわ」

すでに私は書記としての資格を剝奪されています。ボルヘスも『白夜行』もない私は、大槻が云うところの檻から、すでに出ているのです。私を見くびらないでほしいのです。そう、私は自由。そして自由な私は自由意志のもと、白夜様のところに行くのです。一人ぼっちで待っているあの子のもとへ行くのです。姉として。一人の人間として。そのためならばケツでもなんでも舐めほじって差し上げましょう。命すら差し出してあげましょう。ただしそのかわり、白夜様の命は保証してもらわねばなりません。

「何があったのかは知らんが、自立したようだな。自分というものを手に入れて、威張り腐っておられる」

ええそうよ」
「ちょっと会わないうちに成長しちゃって。昔はオレの云いなりだったのに。奴隷だったのに。人形だったのに」
「あのころの私には、希望も絶望もなかった。十神の世界をただ生きているだけだった」
「今は？」
「ある」

だからこそ、『白夜行』を書くことができないとも云えます。今の私には希望がある。今の私には絶望がある。今の私には願望がある。今の私には欲望がある。
私はもう、執筆機械じゃない。
「いいねえ妹ちゃん。いい顔してるね」大槻は満足そうにうなずきます。「[illegible]

す——いまだに十神白夜のニセモノに夢中な和夜クンに見せてやりたいぜ。どんなに巧妙に似せたところで、マネゴトはニセモノにすぎないってことを、どうしてみんな気づかないもんかね」

「私は私を獲得したの。だからあなたが白夜様を殺す理由はない。依頼を取り消して」

「いいぜいいぜ。取り消しだ。白夜クン殺しはやめだ」

大槻は私の変化を察知して、すばやく対応してきました。どうすればこの妹を以前のように手籠めにできるかと思案しているのでしょうが、私は揺らぐつもりはありません。大槻がどのような手を打ってきたとしても、私は私の道を行くし、そのためには大槻さえも利用してみせるのです。

外からエンジン音が聞こえてきました。和夜がやってきたのです。

外からミシミシ音が聞こえてきました。和夜がやってきたのです。

私は緊張しますが、大槻はあいかわらず余裕の態度でベッドに座っています。私は残った右手で拳を作りながら、弟が二階にやってくるその瞬間を待ちました。ですがやってきたのは和夜ではなく、ズドンという爆発音でした。それは一階から響き、階段を伝って焦げくさいにおいが漂ってきます。

「ドハハハハハハハハハハ！　みごとに爆発したようだな。Ｃ４が」

「しーふぉー？」

「これさ」大槻はさきほどから口に入れていた物体を見せてきます。

「こいつぁＣ４爆弾。ぐねぐねと形状を変えられるプラスチック爆弾でーす」

「あなた爆弾を食べてたの？」

「起爆させなきゃただのグリセリンでーす。体にゃよくないだろうがな。さあて、和夜クンは生きているかね。爆弾をまともに喰らって生きてるってのは想像つかんが」

「生きているよ」

階段を上がってきたのは和夜と三人の国連兵でした。四人は怒りに支配された顔で、ベッドに座る大槻をにらみつけています。

「おやま。部下にドアを開けさせるなんて、悪い大将じゃねーか和夜クンは。今の爆発で何人死んだ？」

「あんた……ぼくを殺すつもりか」

「キャワイイ弟クンを殺すわけねーだろ。じゃれただけさ。猫が虫をいたぶるように」

「殺すつもりだったんじゃないか」

「[illegible]

――こまかい話をするんじゃないよ　生きてるんだから問題ないっての。ドハハハハハハハハハハ！」

　これが大槻涼彦のコミュニケーション。この男は好きな人と関係するときに、いつだってこのような行為に出るのです。他人を破壊することでしか関係性を保てないのです。何か大切なものが先天的に欠落しているとしか思えないこの男は、かつて私を破壊しました。私への好意を陵辱（りょうじょく）というかたちでしか伝えられず、もちろんそんなものを私の心身が受け止めきれるはずもなく、その結果、大槻は家から追い出されました。長い年月を経て、こうしてようやく三人がそろったというのに、それでも大槻は反省するどころか、破壊をつづけるばかり。自分のせいで自分の世界が危うくなるのを承知で、あちこちに爆弾をしかけるこの男は、いったいなんなのでしょう。自己完結。そのこうなる[illegible]言葉[illegible]。

ようなおぞましい言葉が浮かびました
「あんたがその気なら、ぼくだってやるぞ。それくらいのことはできるんだぞ」
　大槻の性質を知っている和夜ではありましたが、知っているからといって納得できるわけもなく、杖を握る手は怒りで震えていました。
「こらこら弟クン。兄に向かってそんなこと云うのはおよし。いっしょにUNOで遊んだ仲だろ。ゆるしておくれよ。地方ルールはみとめてやるから」
「だまれ……。あんたの遊びにはもううんざりだ。くそ、いつだってそうだ。買ってもらったばかりのぼくのオモチャを、そういえば壊したこともあったな」
「オレはただ、仲直りしたいだけさ」
「仲直りしたい相手に爆弾をしかけるか普通。どうかしてるとしか思

えない」

和夜は杖の先端を、大槻に向けて突きつけました。

「今さらそんなことで怒るなって。オレはどうかしてるよ。最初からな。性格に難アリさ。それより見てくれ和夜クン。オレは妹を、忍をふたたび手に入れたぜ。ほらほら、どーすんだ？」

「姉さん……」

和夜の視線がこちらに向けられますが、どのような顔をすればいいのかわからない私には、目を伏せることしかできません。

「ドハハハハハハ。避けられてやんの。嫌われてやんの。やーいやーい。拒絶されてやんの」

「姉さん、こっちにくるんだ。こいつといっしょにいることはない。またひどい目に遭うだけで……」

しかし和夜は、すべてを察したらしく言葉を詰まらせ、一瞬の沈黙ののち、「まさか、本気で結託するのか？」とたずねました。
「こらこら弟クン。結託なんて表現はやめてくれねーか。オレと忍は、ラブリーになったんだ。もとの鞘（さや）におさまったとも云うが」
「姉さん。本気なのか」
「…………」
「ああ……だめだだめだめだそんなのはだめだ」和夜は乱暴に頭を掻きました。「だめだ。何をやってんだよ。姉さんはぼくといっしょにいるべきなのに。姉さんを幸せにしてあげられるのは、姉さんをお姫様にしてあげられるのは、このぼくだけなのに」
「お姫……様？」
　またその言葉。

「そうだよ。だってぼくはこれから、王子様になるんだから」
「忍、聞く耳を持つな」大槻がぴしゃりと云いました。「和夜クン。忍のことはオレにまかせて、テメーは白夜クンを追いかけろよ。居場所はオレが聞き出しておくから」
「うるさい。姉さんを渡せ」
「いやだと云ったら？」
「殺す」
和夜が右手から、光り輝く剣を出現させると、こんどは杖ではなくそれを大槻に突きつけます。三人の国連兵もすばやく銃をかまえました。室内に息苦しいほどの殺意が充満。
「あのさ和夜クン。その剣だけど、どんな原理で出しているわけ？」
大槻は自分に向けられた殺意には興味がないらしく、まったくの無表情で和夜の剣を見つめています。

感情な瞳で和夜の剣を見つめています。
「あんたが知る必要はない」
「どーせ常識的な方法なんだろうなぁ。超能力とかイヤボンパワーとかじゃなくて、至極まっとうな方法なんだろうなぁ」
「どんなに詮索しても、ぼくの才能が消えることはない」
「ドハハハハハ。オレと才能の話をしちゃうの？　元『超高校級の殺し屋』であるオレと才能の話をしちゃうの？」
「ぼくにだって才能はある。あんたが見ているこの剣こそが、ぼくの才能なんだ」
「いいかね和夜クン。この世は、起こり得ることしか起こらない。どれほどすごい才能の持ち主でも、熱力学を変質させたり、物理学を超えたりすることはできない。云ってる意味わかるな？　何もないところから剣を生み出す才能なんて存在しねーんだよ。いくら才能があっ

ても、空を飛んだり縮地を使ったりすることができないのと同じようにな」

縮地？　その単語によって私の思考が開きかけましたが、大槻がベッドの上で勢いよく立ち上がったので、それどころではなくなりました。和夜は剣をかまえ、国連兵たちが銃の引き金に指をかけ、一触即発の空気が流れます。しかし、

「忍法、水とんの術！」

大槻が叫んだ瞬間、室内が煙で満たされました。というかそれ、ぜんぜん水とんの術ではありません。煙幕とは古典的な目くらましですが効果は抜群で、和夜たちは大槻の姿を見うしなってしまいます。

「デートしようぜ」

その隙に大槻は私を持ち上げると、部屋の窓から飛び降りました。

4

大槻は上機嫌でしたが、シュコダのヴィンテージカーを見ると、さらに上機嫌になりました。ゲラゲラ爆笑しながら運転する大槻の様子を、私は助手席から観察しつつ、静かにため息を吐きます。車はプラハの町を好き勝手に走っていました。和夜から連絡を受けたのか、国連軍が乗る車が何台も追いかけてきますが、大槻はナイフを投擲（とうてき）して、運転手を的確に殺していきます。ミラー越しに確認すると、いくつもの炎上する車が見えました。大槻は後方の風景など意に介さず運転をつづけ、車はモルダウ川沿いの道を一気に南下します。白夜様が

いるであろう目的地から離れていくのが不安でした。
「ドハハハハハハハ！　逃避行とかあこがれちゃうね！　まあオレの場合、追っ手はみんな殺しちゃうけどね！」
「あなたは何がしたいの？」
無意味と知りつつも、私はついその種の質問をします。
「目的なんてどーでもいいさ。オレを物語に組みこまないでくれ。そんなものを大切にするから、みんなおかしくなっちまう。主義にこだわるのはよそうじゃないの。目の前にあることを受け入れる。それでいい。無知蒙昧（むちもうまい）なチビッ子のままでいい」
「わけがわからない」
「たとえばオレは、兄弟三人が仲直りするために動いてるって設定だけど、それだってべつにどーでもいいかもしれない。和夜クンのことも、忍のことも、はたしてどれだけ執着してるのやら」

なんてことを云うのでしょうか。大槻が自由人なのはわかっていいましたが、こんなにも前提条件をひっくり返した発言をしてくるとは。

「……私には執着してると思う」

私はほとんど、自分の価値を維持するために云いました。

「オレもそう願ってる。というのも、最低限の行動理念を立ち上げて、それに沿って動かないと、自分を規定する術(すべ)がなくなっちまうからな。ほら見てみろよ」

「何を？」

「べつになんでもいいさ。あれでいいよあれで」大槻は自分が破壊した車の山に、一瞬だけ目を向けました。「なんであいつら、命がけでオレを追ってると思う？　仕事だからだ。国連の職についてるからオレを追ってるわけ。そんなもの放棄(ほうき)すりゃ死ななくてすんだのに」

「だけど仕事は、アイデンティティみたいなものだから」
「絶望ハイスクールだっけ？　今回の事件の張本人どもは、世界を絶望に染めたがっているみてーだけど、あいつら、白けたりしないのかね。オレから云わせてもらえば、世界征服なんてものは、苦笑したくなるほど退屈な行動理念だ。今どき、そんなことマジになってするか？　レクター博士やジョーカーを知ったあとじゃ、世界征服なんて真剣にはやれんよ」
「あなたはいろいろ経験してきたから、そうなのかもしれない。でも、世界征服にはじめて触れた人は、そこに新鮮さを感じると思うの」
　若者が極右（きょくう）や極左（きょくさ）に入るのは、今にはじまったことではありません。石川啄木は明治政府にマークされ、三島由紀夫は市ヶ谷（いちがや）駐屯地で

自決し、高橋源一郎は凶器準備集合罪で逮捕されました。世界と自分を結婚させて、周囲に転がる諸問題をシャットアウトするやりくちは、自己実現という意味ではきわめて効果的なのです。馬鹿のままで世界と関係できるから。無知のままで世界征服できるから。

「たしかに、アホほど古典をあたえると飛びつくからな」大槻は云いました。「今さら『蒲団（ふとん）』を読んで新たな発見をしちゃうように、世界征服なんていう手垢（てあか）のついた概念から、何か新しいものを発見した気になっているんだろうよ。つーかこのオレだって、『妹と結ばれる』っていう古典的な行動理念を持ってるわけだから、あまり他人を馬鹿にできないんだけども。ドハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

「笑うのはいいから話をつづけて」
「絶望ハイスクールどもは、『世界征服なんてどうでもいいや』って、目的を放棄したりはしないのかね。これは素朴な疑問なんだけどさ」
「するはずないでしょう。きっとそこには、自分の存在価値がかかっているはずだから」
「まさにそこだ。存在価値なんてもんは、ただ生きているだけで稼げるのに、無理して目的をこしらえて、バッカみたい」
「生きているだけで充足できるのは、あなたくらいじゃ……」
そう云いかけて、白夜様のことを思い出します。白夜様もまた、生きているだけで己の価値を稼いでいました。物語に乗ることも、活劇漫画のように戦うこともなく、ふんぞり返っているだけで十神白夜を構成していました。そういう意味では二人は同類で、そのような場所

から見れば、何かしらの目的を作ってそこに突進していく人たちは、たしかに異様なものとして映っているのでしょう。

「人生、生きてるだけで楽しいよオレは。こうやって何も考えずにのんびりやって、たまに人を殺して、これ以上は望むものがないよ。まあそれはそれで、オレが元『超高校級の殺し屋』っていう檻に閉じこめられていることになるんだが」

「あなたにも檻があるというの」

「オレの生き方だって、結局は才能に縛られたもんだからな。世界征服をありがたがっている連中と変わらんよ。前に云わなかったっけ？　オレは元『超高校級の殺し屋』っていう才能のせいで、それ以外のことがやれない。魚屋とかバイク屋とか漫画家とか野菜ソムリエとか、ほかにもたくさんあるはずの可能性をぷちぷち潰して生きてる

んだ。よぉ、それってエグい話とは思わんか？　ま……忍にはわからんか。『超高校級の書記』をやめたばかりのテメーにゃ、無限の未来が待ってるもんねー。ドハハハハハハハハハハ！」

「でも、『超高校級の書記』であったころは、その才能に縛られていたころは、とても幸せだった」

「そ。これが問題なのさ。幸せなんだよね、縛られるのって。オレはこの才能を、性格を、思考を、捨てたくないって気持ちがどこかにある。才能に縛られている現状に気持ちよさを感じている」

なぜ人は、レールの上に乗ると快楽を得るのでしょうか。『大人が敷いたレールの上になんか乗りたくない』と公言する若者も、『大人が敷いたレールの上になんか乗りたくないレール』に乗り、そこに安心と安全を感じています。完全なる独自、完全なる自由というものが

観念でしかないのはわかりますが、それにしたところであまりにも不自由。『超高校級の書記』をやめた私もまた、『いろんなものを捨てて一人で生きるわ！　私は人形じゃないわ！』という、よくあるパターンに押しこめられたにすぎません。イプセンが『人形の家』を書いたのがいつなのかは知りませんが、百年以上前からある概念にすがって生きているわけです。そんな私は自分へのふがいなさと同時に、大槻への違和感をいだきました。私の知っている大槻は、才能に縛られることをむしろ肯定（こうてい）的にとらえていて、このようなタイプの発言をする人格ではありません。

「もっと自由になって、もっと高みを飛んでみたいものだね」大槻はらしくない言葉をつづけます。「十神だの兄弟だの殺し屋だの、そん

などーでもいいこと全部捨てて、まったく違った人生を楽しむ自由だってあるとは思わんか？」
　その問いに答えることはできませんでした。上空から降ってきた物体をかわすため、車が急カーブを切ったからです。それは一度では終わらず、次々にやってきます。大槻はハンドルを切って間一髪でかわし、胸の悪くなるようなターンを決めました。空から降る謎の物体は、ザクザクと道路に突き刺さり、それは攻撃を主としたものではなく、私たちをどこかに誘導しているようでした。大槻は爆笑しながら運転をつづけ、誘われるままに路地の一角へと車を入れます。
　その先には、一人の少女が立っていました。
野暮ったいセーラー服。野暮ったい丸眼鏡。野暮ったい三つ編み。全身からただよう負のオーラ。私はその人物を知っています。あれは……『超高校級の文学少女』、腐川冬子。腐川さんは本当にチェコ

にきてしまったのです。白夜様を求めて九千キロ。おそろしいまでのバイタリティです。

腐川さんの様子は奇妙でした。まあ奇妙といえばいつだって奇妙なのですが、車が猛スピードで接近しているのに、顔をうつむかせたまま微動だにしません。立ったまま気をうしなっているように、ぴくりとも動かないのです。標的を見つけた大槻は、アクセルを緩めるどころかさらに踏みました。腐川さんを轢き殺そうとしているのは明らかでした。車のボンネットが腐川さんまであと数メートルというところで……なんということでしょう。腐川さんは、ポーンと高く跳び上がりました。大槻も意外だったらしく、「あれま」と云ってから急ブレーキをかけました。車は派手にスピンして、民家ぎりぎりのところでストップします。吐き気をこらえて周囲に目を走らせると、腐川さん

はいつのまにか車の正面に立っていました。長い三つ編みがだらんと垂れ、やはりだらんと垂れた両手に、何か光るものを握っています。ハサミ？　なんで？　疑問と混乱が沸点に到達して、この光景をうまく情報処理できません。混乱したまま車から降りると、私の脳をさらにかき乱すような事態が発生します。

「呼ばれて……」

腐川さんはゆっくり顔を上げると、

「飛び出て……」

赤い瞳を輝かせて、

「邪邪邪じゃ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～ん!!」

叫びました。

5

目を血走らせ、蛇(へび)のように長い舌をのばし、ゲラゲラゲラゲラゲラと高らかに哄笑(こうしょう)し、両手に持ったハサミをブン回すその人は、私の知っている腐川冬子とは似て非なるものでした。何これ。こんなものを私は知らない。『超高校級の文学少女』である腐川さんはこんなことしない。いっぽう大槻は、「ハサミだ……武器がハサミ。わーいやったー！」と、よくわからないところで盛り上がっています。どうやらまともな人間は私だけのようです。

「ゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラ！」

腐川さんはまたしても高く跳び上がると、車の上に乗りました。

「パンパカパーーーーン！　アタシは『超高校級の殺人鬼』こと、ジェノサイダー翔（しょう）。意外と家庭的な殺人鬼どえーーっす！　ゲラゲラゲラゲラゲラゲラ！」

ジェノサイダー翔？　巷間（こうかん）を賑わせている連続殺人鬼の名前が、なぜこのタイミングで腐川さんの口から出てくるのかまるでわかりません。

「ゲラゲラゲラゲラゲラゲラ！　ったくさー、アタシの登場が遅すぎなんだけど！　あと残り何ページだっつーの」

「腐川さん……」

「アンタバカァ⁉　アタシは腐川とか雪白とか小林とか、そんなダッ

セー名前じゃねーから。ジェノサイダー翔って名乗ったばかりなんですけど！　オメーは鼓膜（こまく）あんのか？　処女膜（しょじょまく）バリに再生手術してやろーか⁉」

「ひ、非処女にだって価値はあるもの！」よくわからないことを口走ったのは、混乱の極みに達したからということにしておいてください。「それよりあの、ええと、腐川さんどうしちゃったの。ここは危ないから……」

「白夜様の命令なのよね」

「白夜様の？」

「って、アタシのダーリンに『様』をつけて呼ぶんじゃねーよ。だれの許可とってんだよ」

赤い瞳ににらみつけられて萎縮(いしゅく)した私は思わず、「ごめんなさい」と謝りました。

「アタシには殺人美学っつーか、ポリシーってものがあんのよ。ホントは萌える美男子にしかマイハサミを使わないって決めてんだけど、白夜様がアンタを守れっていうから、仕方なくやってるわけ……ゲラゲラゲラゲラゲラ！　どーすかこれ！　これどーすか！　アタシってば従順でしょ」

「白夜様と話したの？　じゃあ腐川さん、白夜様に会ったのね？」

「だからアタシは腐川じゃねーから！　あと白夜様には会ってねーよズンドコ娘が！　ペラ紙にそう書いてあっただけ。なのに命令に従うアタシったらマジ従順。って云ってんの。おわかりっすか？　わかっ

たらアタシに感謝して三顧の礼でも尽くせよ、この穴兄弟製造機！」
「なんか罵詈雑言の嵐が……」
「あれれれれ。傷ついちゃった？　アタシってば思ったことしか云えない正直で敏感なカラダなのよねー。お詫びいたします。大変もうしわけございませんでした（棒）。はい三秒で謝罪会見終了～っと」
「白夜様はどこ？」
「知ってるのはオメーなんだろ？　愛しのダーリンのために露払いしてやるから、地味なオリキャラはそこで待ってな」腐川さんはその場で一回転すると、こんどは大槻をとらえました。「ってことで、こいつを再起不能にしちゃえばいいのかしらん？　雑魚いオッサンの手足をバラバラにしちゃえばいいのかしらん？」
「ドハハハハハ。ウケる」大槻がナイフを取り出します。「ジェノサイダー翔の正体が文系女子とはな。連続殺人鬼ってのはどうしてこう

根暗（ねくら）ばかりかね。もうちょいカラッと殺（や）ろうぜ」

「オッサンは理解が早くて助かっちゃう。それで、アンタが元『超高校級の殺し屋』？」

「オレは大槻涼彦。趣味は鮎（あゆ）の友釣（ともづ）り」

「ふーん。なんか萌えねーし設定も雑だけどまあいいわ。アタシといっしょに遊びませんこと？　パ・イ・セ・ン！」

腐川さんは長い舌をハサミに這わせ、大槻はナイフを器用に回します。まだ事態を把握できない私は、おろおろと二人に視線を向けるのですが、どちらも私を気にする素振りはなく、それぞれの得物（えもの）をかまえて向かい合っていました。理解が追いつかない。いったいなんなの。ボルヘスから解放されても、まだこのような壊れた世界を見なければならないの。世界はみごとに壊れていて、それゆえ私を無視して

進みます。両手にハサミを持った腐川さんは、信じられないような速度で大槻に飛びかかりました。大槻は二本のハサミを片手で受け止め、もう片方の手に握られたナイフをヒュンと薙ぎます。腐川さんはそれを難なくかわし、次なる一手をくり出しましたが、私の目で見えるのはここまで。あまりにも早い速度で技の応酬をくり広げる腐川さんと大槻は、二つの扇風機が激突しているようで、私には動作をとらえることができません。刃物がぶつかり合う音と、ときおりやってくる風圧だけが、攻撃のすさまじさを主張していました。

「ドハハハハハハハハハハハ！」大槻は笑います。「うれしいね。わりと強いじゃねーか後輩ちゃん。こいつぁ気分爽快に殺れそうだぜ！」

「ゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラ！」腐川さんも笑います。「現役ＪＫの

若さを前にして、ゲロゲロに屈服しちゃってくださいパイセーーン！」

　発言内容も行動原理もなんだかよく似た二人は、ありえない速度で斬撃しながら、似たようなトーンで笑い合っています。いっぽう、戦いに参加できない私は、手足を動かす代わりに頭を働かせていました。腐川さんはさきほど、『白夜様の命令なのよね』『白夜様には会ってねーよ』『ペラ紙』と云いました。この発言が本当ならば、白夜様はあるていど自由に動くことができて、私たち下々の連中を駒として使っているということになります。白夜様は無事に逃げおおせて、好き勝手をやっておられる……。たっぷり安心したせいでしょう、いつのまにか隣に和夜が立っていたことにも気づきませんでした。

「これはどういうことだい姉さん」

ここでようやく和夜の存在に気づいた私は、できるだけ何食わぬ口調で、「希望ヶ峰学園から協力者がきてくれたのよ」と云いました。

「それは好都合」和夜の口もとが緩みます。「とも倒れになってくれれば幸いだ。……ひどいことを云ってると思ってる？」

「あなたは爆弾で吹っ飛ばされかけたのだもの、それくらいのことを思う権利はあるはず」

「フフ。今日もぼくに優しい姉さんだ。ところで、あいつ大丈夫なの？　なんか……押されているみたいだけど」

和夜の指摘は正しく、大槻は劣勢に立たされていました。どちらも一歩も引かずに攻撃をつづけていますが、大槻の顔には疲労が見えるのに対して、腐川さんは絶好調。心から楽しそうにハサミを振り回しています。

「ボーラボラボラボラボラボラボラー！　あれ〜？　どうしたんすかパイセン。ボラみたいに弱ってますけど！　トドのつまり雑魚ってこと!?　先輩知ってますか。ボラは出世魚で、最終形態がトドなんです。『トドのつまり』って言葉があるけど、あれは『これ以上は成長しない』って意味で、先輩にぴったりの表現じゃね？　ゲラゲラゲラ！　アタシったら殺人鬼のうえに博識だから無敵すぎ〜！」

「ボラの蘊蓄（うんちく）ならオレも知ってるぜ。未通女（オボコ）の語源がボラなのさ」

「やだー先輩ったら。オッサンのエロトークとかマジで聞く耳持たねーよざけんな！」

　腐川さんの力強い一撃を受けた大槻は吹き飛ばされ、地面に背中を打ちつけました。多少はダメージを受けたらしく、すぐに立ち上がる

ことはなく、横たわったまま荒い呼吸をくり返しています。このような大槻を見るのははじめてでした。アリからビルに至るまで、あらゆるものを切断する大槻涼彦が、ハサミにやられている？　対する腐川さんは余裕綽々（よゆうしゃくしゃく）で、曲芸師のようにハサミを回しながら、大槻のもとに近づいていきます。

「もしもーし。パイセーン生きてます？　あれ、返事ねーな。ただのしかばねかよ！　死んでたら返事しなくていいけど、後輩にボコられるのってどんな気分です？　率直な感想をお聞かせ願えます？　って、べつに聞きたかねーけどもゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラ！」

「うーん」大槻は倒れたまま頭を掻きました。「年齢のせいにしてもいい？」

「アタシって寛大な殺人鬼だからなんでもゆるしちゃう」

「オレの肉体はもうピークをすぎた。まともに殺り合ったら、現役高校生にゃ太刀打ちできな……」

「甘えんな！」全然ゆるしていません。「おいオメー、そんな中途半端な気持ちで殺人鬼を名乗んなよ！　あきらめんなよ！　どうしてそこでやめるんだ！　熱くなれよ！　できるできるできる！　大丈夫きみならできる！　ドントウォーリー！　ビーハッピー！　つらいなら『エースをねらえ！』を歌ってみろよ！」

「くるしくったって～。かなしくったって～……」

「オッサンが乙女ボイスで歌ってんじゃねーよ！」

「なんかすんません」

「つーかさ、肉体なんて云ったら、アタシはまだ第二次性徴期ハァハァだし、技術や経験は、アンタのほうが上でしょ。自分の弱さを年齢

のせいにするなんて、殺し屋としてのプライドがないわけパイセンは？」

「返す言葉もねえよ。でも一個だけ云わせてもらうが、テメーの無根拠な傲慢。これはな、今の季節にしか存在しないものだ」
「は？　アタシは傲慢じゃないけど」
「そう思うこと自体がすでに傲慢だぜ。テメーはたしかに、肉体も精神も未熟だし、世界も知らないし、自分の限界もわかっちゃいない。でもな、だからこその強みが、傲慢がある。後輩ちゃんよ、テメーは、『殺すくらゐ　何でもない　と思ひつゝ人ごみの中を　闊歩（かっぽ）して行く』って気分で毎日を生きてるんだろ？」
「何それ。心の俳句？」
「まあ似たようなもの」

「辞世の句にならないように、せいぜい気をつけなさい」

「ありがとさんよ。ともかくだ、若さってのはすばらしい。オレはそれを、うしなった」

　またしても、らしくないことを云う大槻を見て、私はようやく理解します。そうか。この人は年をとったんだ。私や和夜の前で暴君のような振る舞いをしていた四年前とはもう、兄を構成する要素がまるで違っているんだ。老けこんでしまったんだ。だからこのような、あまりにくだらない話を、恥ずかしげもなくできるんだ……。異常で変態で最強の兄は、今はもういない。それは私にとって、少しだけ悲しい現実でした。

　大槻の弱さをかいま見た腐川さんは、すっかり白けた表情を浮かべていました。殺すに値しない負け犬を見るような目つきでした。

「ないわ……マジないわ。ダッセーこと云ってんじゃねーよオッサン。そんなクソみたいなことをペラペラしゃべって恥ずかしくないわけ？」

「オレはわりと、年をとることを受け入れて楽しむクチでね。ホテルに行ったらマッサージを受けるし、寺めぐりをはじめたし、白髪になっても染める気はねーよ」

「寒ーい。お寒ーい」

「テメーにもそのうちわかるぜ」

「アタシはオバサンになってても殺しをつづけるわ♪」

「年齢の問題じゃない。成長ってやつだ」

「成長しないって約束じゃん♪　ゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラ！」

「どんなに笑っても逃げられやしねーよ。成長という通過儀礼は、殺人鬼にも平等にやってくるからな」
「いちいち退屈なヤローね」腐川さんは鼻を鳴らしました。「べつにアタシは成長を恐れちゃいないし、成長を寒いとは思ってねーよ。アタシはバリバリの殺人鬼だけど、話の都合でなんかいいやつキャラに変貌して、『性格変わりすぎて絶望した』とかブログに書かれたとしても、全部をまるっと受け入れちゃうも～んだ。そんなこともできない不自由なオッサンは、本物の老人になる前にアタシがぶっ殺してやるっつーの！」
腐川さんが跳び上がると、大槻は体を起こして回避しましたが、反撃の糸口は見つけられず、防戦一方という感じです。ハサミが際どいところまで届き、大槻は路地の端に追い詰められようとしていました。

「見てられないな」
和夜はつぶやくと、仄(ほの)かな光を帯びた剣を出現させました。そして杖をつきながら移動して、腐川さんめがけてフルスイングでもするように一閃します。腐川さんは余裕をもってかわしましたが、新たな参加者を値踏みする時間を稼ぎたいのか、じりじりと後退して間合いをとります。
「我らが兄。何してんの？　女子高生相手に手こずるなんて、らしくない」
和夜は不快そうに細めた目で、体勢を立て直した大槻をちらりと見ました。
「気にすんなよ和夜クン。一度、やってみたかったのさ」
「何を―

「今までめっちゃ強かったやつが、新キャラが登場したとたんに、そいつの引き立て役に成り下がるっていう展開」

「遊んでるのか……」

「大人は子供が思う以上に遊んでるぜ。ところで弟クン、もしかしてオレを助けてくれた？　うれしいねえ。ありがた涙にかきくれちゃうねえ」

「勘違いしないでくれ。あんたの弱ってるところを見たくないだけ……」

「あらら〜？」腐川さんが赤い瞳を輝かせます。「あらあらあらあら！　何この新キャラ。よく見たら眼鏡男子じゃん！　目の保養じゃん！　視力回復トレーニングを……ん？　でもこいつ若干、白夜様

のコスプレしてね？」
「コスプレじゃない」
「は」
「十神白夜はぼくだ。ぼくはこれから、十神白夜になるんだ」
「はあああああああああああ？　何ズッコケたこと抜かしてんのよコイツ。ダーリンの名前を気安く騙ってんじゃねーよ！　オメーなんか白夜様の眼鏡の代わりにもならねーっつーの‼」
どうやらキレたらしい腐川さんは、一瞬で間合いを詰めて和夜に斬りかかりました。和夜は剣を使って攻撃を受け流し、その隙を突いた大槻が腐川さんに攻めこみます。戦闘再開。今度は二対一。私はだれを応援すべきかわからなくなり、ただ見守ることしかできません。
「ゲラゲラゲラゲラゲラ！」腐川さんはまだ笑っています。「腕が何本あったところで、オメーらみたいなポッと出の使い捨てキャラなん

か、アタシの敵じゃねーし！　っていうか、オッサンはともかくとして、白夜様のコスプレしてるアンタさ、そのピカピカ光るオモチャみたいな剣はなんなの。ちゃんとルーカスから許可もらってんの」

「ぼくの才能を馬鹿にするのか」

「え？　今なんつった。アタシの耳がたしかなら、『才能』って聞こえた気がしたけど」

「そうだ。これはぼくの才能だ」和夜は攻撃しながら宣言しました。

「この剣こそが、ぼくがぼくである証だ」

「ゲラゲラボーーーー！　せんせー、なんかアホなことを云ってる子がいまーす。フェイクなのがバレバレなんですけど？　校則違反は即ミンチィィィィィィ!!」

「だまれー

ースえ」

「だまるのはオメーだこのパチモン。ニセモノはニセモノらしく、著作権侵害の罪で死刑になれって〜の。ゲラゲラゲラゲラゲラゲラ！」

「ぼくを愚弄(ぐろう)する気か」

「グロースル？　何それ。新しい洗剤？　毛糸洗いに自信が持てます系？」

「こいつ……」

「やめとけ和夜クン。殺しに集中するこった」

大槻がナイフを突き出して腐川さんのアタックを断ち切ると、二人は息の合った餅つき職人のように連撃を決めて、腐川さんの攻撃と防御の両方を無効化させはじめました。

「ポンコツ兄弟のくせに連携プレイなんかしちゃって……はっ！　プレイ？　これってプレイの真っ最中なのもしかして！　あは〜〜ん。」

アタシったらダーリンというものがありながらナニをナニされちゃうー！」
　腐川さんはあいかわらずしゃべりつづけていますが、徐々に形勢が悪くなりつつありました。ゆっくりと、確実に、壁際に押しこまれていきます。攻撃も最後まで流しきれず、三つ編みが、セーラー服の袖が、スカートの端が、ピッと裂けていくのが見えました。兄と弟は攻めの姿勢を崩さず攻撃を叩きこみ、そのたびに腐川さんは後退し、とうとうその背中が路地の壁にぴたりとついてしまいました。追い詰められた腐川さんは、すぐうしろにある壁が邪魔でハサミの大振りができず、防御に徹するほかありません。大槻のナイフと和夜の剣が、腐川さんの肉体を切り刻むために襲いかかります。そのとき、なんの脈

絡もなく、一発の銃声が響き渡りました。

6

世界が凍りつきました。べつに安易な効果を狙っているわけではなく、本当にすべての動きがとまってしまったのです。私は馬鹿みたいに口を開け、腐川さんと和夜は硬直し、大槻は和夜をかばうために両手を広げ、その胸は真っ赤な血で染まっていました。時の流れが再開するきっかけは、カランという音でした。それは大槻の手からナイフが落下する音でした。大槻は目を見開いたまま、スローモーションのような動きで自分の手を胸まで運び、血まみれになったそれを確認して、「なんじゃあこりゃあ」とつぶやくと、そのまま倒れました。そして世界はふたたび動き出します。

して世界はぶれぶれて動き出します

「兄さん！」

和夜の手から剣が消え、倒れた兄を起こそうとしますが、大槻はひゅーひゅーとおかしな呼吸をしながら、その行為を撥ね除けました。

今回の旅でいくつもの死を見てきた私にはわかります。元『超高校級の殺し屋』が、大槻涼彦が、私の兄が、致命傷を浴びたことを。

嘘。嘘。嘘でしょう。兄が死ぬ？　そこにいなくとも私を支配しつづけた兄が、あらゆるプレッシャーを私にあたえつづけた兄が、死ぬ？　こんなことってあるでしょうか。こんなことって信じられるでしょうか。タチの悪い夢でも見ているような光景を前に、頭がくらくらしました。

「チッ」腐川さんが舌を打ちます。「しょーもないオチをつけてくれたのは、あそこに隠れてるやつね。出てこいや！　まだ残ってる途中

[illegible]でしょーが!!」

そう怒鳴(どな)って、さきほどまで私たちが乗っていたシュコダのヴィンテージカーをにらみつけました。少し先に停めてあったその車は、よく見るとトランクに隙間があり、そこから長い銃口がのびていました。

和夜の反応はすばやいものでした。銃口が二発目の弾丸を発射するよりも早く、杖を突いて駆け寄ると、トランクの上から剣を突き刺しました。一度や二度ではありませんでした。なんども。なんども。なんどもなんどもなんども突き刺し、トランクの隙間からは、びゅーびゅーと鮮血が噴き出ています。和夜はそれでも飽き足らないらしく、下手全身が穴だらけになった唯香さんをトランクから引きずり出し、くそな処刑人のようこ首を刃り落としました。唯香さんの首が胴本か

[illegible]しました。患者さんの首が胴体から切り離されると、頭に乗っていたタコはようやく動き、のろのろと逃げ出しましたが、和夜はそれを無慈悲に踏み潰しました。タコはごく少量の墨を吐いて死滅しました。

気管に血が入りこんだのか、大槻は打ち上げられた魚のように痙攣しながら、咳(せき)をくり返しています。露骨に弱った姿を見るのがいやで、私はうつむいてしまいますが、和夜は大槻のもとに戻ってくると抱きかかえ、その体から命がうしなわれていく様子をじっと観察していました。

「兄さん」

和夜が呼びかけても、大槻は反応しません。反応するだけの力が残っていないからではなく、意図的に返事をしないのです。くだらなくてセンチメンタルで恥ずかしい言葉を口にしそうになる自分を、強靭な意志で律しているように、一言も発しないのです。私はそんな大槻

な意志で律しているように、一言も発しないのです。私にそんな大槻の態度がいじらしく、左目から涙がこぼれ落ちそうになりましたが、それが一瞬で引っこむような一言を、和夜が云いました。

「稔兄さん……」

その言葉は、幻想という分厚い皮をメリメリと裂いて、内部に隠れていた真実をほじくり出します。そう、この人の名前は大槻涼彦なんかじゃない。家を追い出されたこの人を迎えた家は、大槻なんかじゃない。この人は、大江稔。これが真実なのです。おそらくボルヘスを宿していないために、記憶がよみがえりやすくなってきたのでしょう。私は兄さんが死ぬ寸前になってようやく、真相を思い出すことが

てきました。最後にお話ししたくて、勇気を振り絞って視線を上げましたが、兄さんはすでに事切れたあとでした。私の若い時代が終わった。そう思いました。

「へっくしょん」

場違いなクシャミが聞こえました。見ると腐川さんは、いつもの腐川さんでした。瞳の色も薄闇色（うすやみいろ）に戻り、おなじみの神経症的な顔をあちこちに向けて、「な、なななななな何よこれ。またアイツが出てきたっていうの……」と狼狽の声を上げています。混乱のしすぎで私たちのことも見えていないらしく、路地の壁をよじ登ろうとしていました。

私は深呼吸をします。兄さんが流した血のにおいを体内に取りこみ、吐き出し、その作業をくり返し、自分でもおそろしく感じるほど落ち着きを取り戻したところで、歩きまわりました。もまわりの地獄

落ち着きを取り戻したところで、歩きはじめました。もはやこの地獄に用はありません。いえ……これ以上の地獄を生み出さないために歩きはじめたのです。

「姉さん」

和夜が杖を突きながら追ってきました。

「私は行く。白夜様が私を待っているから」

「こんなときでも十神白夜かい。稔兄さんは、姉さんのことを愛していたよ。たぶん本気で」

「ええ。たぶんね」

「姉さんは？　姉さんはどうだったの」

「愛していた……」

「たぶん？」

「ええ。たぶんね。つり橋効果じゃないけど、そういうものも手伝っ

て、私は兄さんを愛した」

正確には、愛さずにはいられなかった。と云うべきでしょう。兄さんを愛さないままでは、クリスマスプレゼントを受け取る子供のように、彼の暴力的な愛を受け入れることはできませんでした。愛するほかに、私を維持するすべがありませんでした。そういう意味では消極的なものではありますが、愛は愛。私の涙腺をしつこく刺激するこの感情は、防衛本能がもたらす錯覚だったとしても、それでもやはり、まぎれもなく愛でした。

「なのに姉さんは……泣いてあげないの？」

「泣いてあげない。それが私にできる、たった一つの復讐だから」

「お願いだ。ぼくも連れて行ってくれ」

「だめ。私と白夜様の二人で、すべてを終わらせるの」

「姉さん」

「シンデレラなんかになりたくない」私は足を止めました。「私はお姫様じゃない。そんなのは、もういやなの。和夜も兄さんも、私をお城に閉じこめようとしたけど、ちっともうれしくなかった。私にだって、私の道があるから」

「姉さんの道を妨害する気はもうないよ。それにぼくもまた、ぼくの道をさがす必要があるみたいだしね」

「一人で見つけて。私も一人で歩いて行くわ」

「十神白夜に会わせてくれ」和夜は真摯（しんし）な声を絞り出しました。「十神財閥にかかわった者としてケリをつけたい」

　和夜のスタンスは手に取るようにわかります。世界保健機関疫病対策委員実行部隊隊長オルヴィン・エレベーターという新たな身分を得

てもなお、十神に固執しつづけるしかないのです。『仁無村焼失事件』で過去を焼かれ、『十神一族最大最悪の事件』で未来を焼かれた和夜は、白夜様を倒し、十神財閥のトップになることしか考えられないのです。和夜はいまだ、自分だけの道を切り開けてはいない。ここを突破するにはやはり、白夜様に会うほかかない。それは私もいっしょでした。ボルヘスや『白夜行』からどれだけ遠く離れても、白夜様にふたたび会うことしか考えていない。四年の歳月（さいげつ）が流れても、私と和夜は結局、十神の子供たち。

「そうね。十神の引力から抜け出すために、私たちは十神と向き合う必要があるのかもしれない……」

「姉さん、十神白夜は今どこに」

「プラハ城に」

プラハ城よ」

「馬鹿な」

和夜がうろたえるのも無理ありません。プラハ城はチェコを代表する建築物であるばかりでなく、大統領府が置かれているのです。チェコ共和国を運営する中央機関に、世界征服をたくらむ十神白夜が隠れているなんて非常識。ですが私はあの放送を聞いたときから、白夜様がプラハ城にいると確信していました。白夜様はヒントのように、『この俺にふさわしい場所』だと云いました。そのようなところは、チェコ国内においてはプラハ城のほかに考えられないのです。白夜様はなんらかの方法を使い、政府、警察、国連軍の目をすべて掻い潜り、城内に侵入したのです。そこで私の到着を待っているのです。絶対にそうに決まっているのです。

「プラハ城に入るなら、このぼくが必要だと思うけど」和夜は云いました。「ぼくは今、ＷＨＯのお偉いさんだ。ぼくの命令を聞かないやつなんてチェコにはいない」

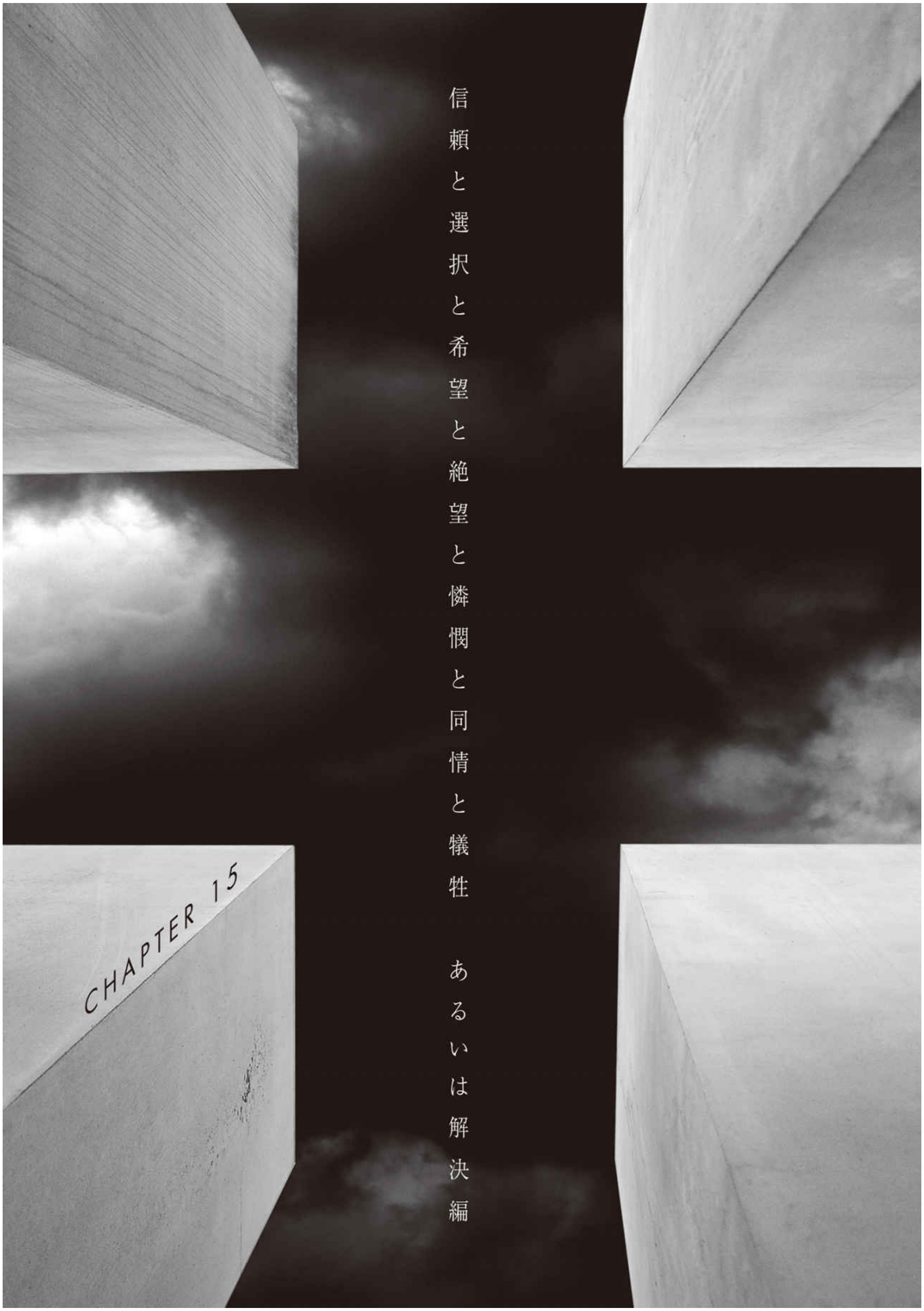
「私たちが入ったら、城内を封鎖して。だれも入れないで」

「了解したよ。じゃ、行こうか」

「ええ……。十神の名にかけて」

プラハ城。

私はお城から抜け出すために、お城に向かいます。


信頼と選択と希望と絶望と憐憫と同情と犠牲
あるいは解決編
CHAPTER 15

1

▼プラハ城に入る

プラハ城に入らない

2

聖ヴィート大聖堂は、チェコでもっとも巨大な教会であり、プラハ城の心臓部であり、チェコのシンボルであり、歴代君主が眠りにつく王の墓でもありました。ヨーロッパを代表するこの建築物は、完成まで六百年かかったそうです。となると大勢の建築家がかかわったはずですが、方向性は一度もブレなかったのでしょうか。はじまり(オリジン)の魂に幸あれ。あるとすればの話ですが。

では恒例のやつを。

3

4

お話は簡単です。ひとりの青年が世界征服をしようとしました。青年はなみはずれた冒険をかさねたすえに、自分のほしいものを手に入れ、無事に帰ることができました。めでたしめでたし。

問題は、そこに至るまでの過程です。

5

物語はハッピーエンドで終わるべきなのです。

6

私たちが聖ヴィート大聖堂に入ると、重厚な祭壇（さいだん）の前には神様が立っていました。ステンドグラスから差しこむ光を全身に受け、金色の髪が、青い瞳が、淡い色によって輝いています。神様はその光を当然の権利のように浴びながら、「フン」と鼻を鳴らし、「時刻は午後五時。早くもなければ遅くもない。俺の予想通りといったところだな」と云いました。美しい声が教会に響き渡り、私は胸がいっぱいになり

ます。
十神白夜。
私の神様。
「大変遅くなりました、白夜様」
数時間ぶりの再会でしたが、百年くらい会っていないような心地の私は、ほとんど泣きそうな声になっていました。
「早くもなければ遅くもないと云ったはずだが。俺の認識をくつがえすな」
「もうしわけありません。お待たせしました」
「お前を待ってなどいない。それより『青インク』、満身創痍(まんしんそうい)だな」
「ひと夏の経験ってやつです」
「そんな状態で『白夜行』を書けるのか」
「あの、それがですね……」

「俺の許可なく云いよどむな」

「ボルヘスをなくしました。私はもう、『超高校級の書記』ではありません。『白夜行』を書くことはできません」

「『白夜行』の書けないお前に用はない。好きなところへ行くといい」

「ここが私の好きなところですし、ここに私を呼び寄せたのは白夜様じゃないですか。聞きましたよ、あの放送」

「お前を呼んだつもりはない」

「はいはい」

軽く受け流す私を見て、旗色（はたいろ）の悪さを感じたらしく、白夜様はわざとらしく咳払いをすると、「質問があれば特別に答えてやろう」と話題を変えました。

「では伺いたいのですが、白夜様はなぜこうして、プラハ城におられるのです？　魔法でも使ったのでしょうか」

「ＷＨＯによって列車内に閉じこめられた俺は、そこから抜け出すために、絶望ハイスクールを利用した」

「利用、といいますと」

「俺のニセモノは絶望的に似ていないが、声の再現性だけは完璧だ。やつのフリをして馬鹿王女に連絡したら、馬鹿騒ぎをしながら馬鹿正直に助けにきたぞ。さすがは馬鹿だ。じつに馬鹿だ」

馬鹿馬鹿馬鹿と連呼されている馬鹿王女とは、むろんソニア王女のことです。牧草地を焼き払った焼夷弾が、ソニア王女によるものということはわかりましたが、しかし車内に監禁された白夜様には、ソニア王

女への連絡手段などなかったはずです。そこを問うと、「電話を借りた」というおどろくべき返答がやってきました。

「電話を？　そんなまさか」

「俺に銃を突きつけている兵士に頼んだら、こころよく貸してくれたぞ。『応援しています』とまで云われた」

「えっと、ちょっと待ってください。なんですかそれは」

「俺のファンというものは、大勢いるらしい。国連にも、絶望ハイスクールにも、そしてチェコ政府にも」

「もしかして、白夜様をプラハ城に招いたのは……」

「政府関係者だ」

白夜様にはシンパがいる。それは当たり前のことでした。『超高校

級の御曹司』である白夜様には、世界中に多くの信奉者がいて、そんな信者たちは、あの十神白夜が世界征服などという安い野望を抱くわけがないことを知っているので、今回の事件を疑い、白夜様をアシストしようという動きが出るのは当たり前のことでした。白夜様のうしろには、目には見えぬ百万の大隊がついているのです。

「というわけで小僧、お前は何も支配しちゃいない。お前の職場には、俺のファンがごろごろいる。お前は裸の王様だ」

「フフ。それでこそ十神白夜ですねえ」

和夜は笑顔を浮かべます。それを見た白夜様は評価したようにうなずき、「ほう。てっきり怒り狂うと思ったが……」とつぶやきました。

「そんなものはないから話を進めてください。ぼくには足りないものがあって、十神白夜がそれを持っているのは、みとめてやっているの

ですから」
「少し会わないあいだに、ずいぶんとしおらしくなったな」
「大江稔が死にました」
「そんな気はしていた」
「笑っちゃいますよ。あんなに強かったくせに、やること全部やったら急に弱くなって、犬のように死んだんですから」
「お前を慰（なぐさ）めるつもりはないが、人はだれもがそうだ。やることをやるまで生きて、やることを終えたら死ぬ」
「きみも？」
「俺は死なん。お前たちの野望を断ち、世界征服を完遂（かんすい）し、十神財閥をさらなる高みへ導いたあとも、まだまだやるべきことがあるからな。俺は決して立ち止まることはない。そう、十神の名にかけて……」

「白夜様、決めゼリフの途中に恐縮ですが質問があります」

「おい『青インク』、もしかしてお前わざとやっているのか。だとすれば極刑に値するが、いったいどうした」

「今、『お前たちの野望』とおっしゃいましたが、白夜様のニセモノはどうなったのですか？」

答えたのは白夜様ではなく和夜で、その内容は、「逃げられた」というものでした。

「混乱に乗じて、小豚さんをふくむ絶望ハイスクール全員が逃亡したという連絡があったんだ。連中は今ごろ、どこか遠くに……」

「俺は逃げん」

声が背後から聞こえました。白夜様の立つ祭壇の前方には、純銀で作られた巨大な棺（ひつぎ）がおさめられていて、そこにはニセモノが立っていました。白夜様と同じ髪型。白夜様と同じ服装。白夜様と同じ眼鏡。白夜様と同じ声。体形だけまるで違う巨体が、俺こそが十神白夜であるというように、堂々と仁王立ちしているのです。ニセモノは肉まんのようにふくらんだ口の端に、白夜様がよくやるような微笑を浮かべ、眼鏡の奥から私たちを見つめていました。

　ニセモノもまた、健在。

「ククク。この舞台においては、俺も役者の一人だからな、逃げるわけにはいかんさ。すべてを終わらせるための解決編を、これからはじめようではないか」

「馬鹿王女が俺を連れ出したとき、こいつもいっしょに回収してしまった。おかげで今まで、見ているだけで汗をかきそうな肉人間と二人きりだった」白夜様はうんざりした口調でした。「おいニセモノ、なんども云うが話すことなどない。俺の無実を信じる一派はチェコ国内にいて、お前はこうしてプラハ城に閉じこめられ、袋のネズミならぬ、袋の豚だ。閉幕(カーテンコール)は見えているはずだが。俺の勝利で終わる舞台の結末は」

「本物サン、貴様は負けるよ。貴様はこれから、絶望的な選択肢を前に苦しみ、のた打ち回り、敗北の選択肢をみずから選ぶ運命にあるのだ。目前まで迫った世界征服を、自分の手で打ち砕く運命にあるのだ」

「フン。そんな話が存在してたまるか――

「ところが存在するのだよ。貴様の歴史は、俺の書いた物語に負けてしまう」
「歴史(ヒストリー)が物語(ストーリー)に負けるわけがない」
「物語(ストーリー)は歴史(ヒストリー)に勝つことができる。永倉新八は『新撰組顚末記(しんせんぐみてんまつき)』を書き、逆賊として忌み嫌われていた新撰組の評価を一変させた。天台宗の大僧正(だいそうじょう)である慈円は『愚管抄(ぐかんしょう)』を書き、自分に都合のいい歴史を後世に広めた」
「『新撰組顚末記』はともかく、『愚管抄』はまともな歴史書だと思うが」
「作者である慈円本人が、『戯言』だと告白しているのにか？　慈円が『愚管抄』を書いたのは、自分が見たい現実を見せるためだ。そんなものは、まともな歴史書ではない。歴史をもとにした偽史……今で

云うところの、歴史小説というやつだ。ククク。『青インク』の仕事と同じだな」

　慈円というお坊さんのことは知らないので、自分自身についてのみ語りますが、かつて私は『白夜行』なる伝記を書こうとしました。史実（ファクト）だけを採用し、虚構（フィクション）を排除した書物を書こうとしました。それは失敗に終わりました。自分が見たいものしか見えないどころか、なんでも捏造してしまう私が書いたそれは、フィクションにすぎないものだったのです。キリストが白人だったり、武田勝頼がアホだったり、西太后が残虐だったり、帝国陸軍が有能だったりといった、読むに堪えない偽書。真実からはほど遠い、ニセモノの物語。

「ククク。真実なんざどうでもいい。物語（ストーリー）には、歴史（ヒストリー）を捻（ね）じ曲げる力がそなわっている。いいか本物サン、貴様という歴史がどれほど完

壁でも、俺は自分の見たい物語を押しつけて、そのまま押し倒してやる。傲慢に。強欲に。どこまでもな」

「フン。ニセモノの物語で、俺という歴史に勝つというのか？　面白い。やってみせろ。俺はここで見ていてやる」

「高みの見物か。まあいい。すぐにオロオロさせて、そこから引きずり下ろしてやる。だが俺の物語を発動させる前に、ほかの偽書を暴いてやらんとな。歴史に残る偽書は、俺だけでいい。それ以外はページをザクザク切り取り、裁断してやる」

　ニセモノが云った瞬間、天井から人間が降ってきました。それは右手にナイフをかまえた戦刃さんでした。『超高校級の軍人』は、さきほど私を助けてくれた戦刃むくろは、教会の床に着地すると、私に突進をかけてきます。この展開にかんして、絶望してやる必要はありません。戦刃さんもまた、絶望ハイスクールの一派だったことと、おど

ろきはありません。唯香さんの襲撃から私を守ってくれたときも、プランがどうこうと云っていました。目的はともかく、あの場で私を救出するのは、プランに沿ったものだったのでしょう。まあそれはともかく、戦刃さんの握るナイフが、私の顔面に迫ってきます。

「姉さんを傷つけるな！」

和夜は仄青い剣をすばやく出現させ、ナイフを弾きました。戦刃さんが左手にシークレットナイフを隠しているのを見つけて、私は自分が囮（おとり）だったことに気づきますが、すでに手遅れ。シークレットナイフの刃が、和夜の右腕を切り裂きました。バリバリバリという音とともに、和夜の右腕から赤黒い液体が飛び散り、剣は消えてしまいます。戦刃さんは追撃の手を緩めず、和夜を蹴り倒すとその上に乗り、おそろしい行動に出ました。和夜の左目に、ナイフの先端を突き刺したの

しい行動に出ました。和夜の左目に、ナイフの先端を突き刺したのです。新鮮なミニトマトをフォークで刺したときのような音がしました。戦刃さんがナイフを引き上げると、眼球もいっしょにググと上がり、和夜の眼窩からコポンと抜けます。戦刃さんはそれをニセモノに手渡すと、「あ、あの、またあとで……」と気まずそうな態度で私に頭を下げて、そそくさと教会の告解室に入っていきました。

「ククク。まずは一冊目」

ニセモノは受け取った左目を手の中で弄(もてあそ)び、その行為に寒気立ちましたが、そんな私をさらにぞっとさせることが起こりました。和夜がゆっくりと上半身を起こすと、自分の右腕を引きちぎり、さらにはポッカリと空いた左目の穴に、点検でもするように指を突っこんだのです。私は最初、和夜が狂ったと思ったのですが、すぐに正気である

です。私は最初、和夜が狂ったと思ったのですが、すぐに正気であることを理解します。あれは義手と義眼なのです。義手と義眼？

「……返せよ」和夜は片目だけになった顔をニセモノに向けました。

「ぼくの才能、返せよ。返せったら。返せよおおおおおおお」

「十神和夜、偽りの力を才能と呼ぶのはよせ」ニセモノは和夜の眼球を転がしながら云いました。「貴様が出現させた剣は、才能でもなんでもない。機械じかけのフェイクだ。それを才能と呼んではいかんな」

「だまれ……。あんたは才能を、天からの贈り物（ギフト）だと勘違いしてないか。冗談じゃない。そんなのぼくはみとめない。才能とは、獲得するものだ。それならこうやって、あとからつけてもかまわないんだ」

「あなたたち、何を云ってるの……」私の声は震えていました。「和夜。あなたの目は、手は、いったいどうしたの？」

「ああ？　姉さんこそ何を云ってるんだ。どうもこうもない。最初からこうだったじゃないか」
「最初から？　最初っていつから？」
「口無村が襲われたとき、ぼくは目と手をうしなった」
「嘘よ……」
「ククク。姉弟そろって、偽書を満喫しているようだな。十神和夜よ、貴様のフェイクはその剣だけではないだろ？　記憶もまた、あとからつけたものだろ？」
「貴様の義眼には、Ｋ２Ｋシステムが内蔵されているな」
「だったらなんだ」
「だったら貴様の存在は何だ。『聖書十画』の失敗から生み出されたこ

――ただ貴様の存在は幻だ。『聖書記録』の分身たちに生み出された

K2Kシステムを使い、長い夢を見ていたにすぎん。いい夢だったろう？　自分に都合のいい夢だものな」
「ぼくはぼくだ。十神和夜であることに変わりはない」

「『口無村焼失事件』と『十神一族最大最悪の事件』は、どちらも実際に起こった事件ではあるが、その両方に、貴様は関係していなかった。貴様はそこにいなかった。これが現実だ」
「違う！　ぼくは十神和夜だ。口無村で体を焼かれ、十鴉城で希望を焼かれた」
「裁断開始」
ニセモノは和夜の眼球をつまむと、ためらいもなく押し潰しました。

「ああ！」
和夜は叫びましたが、あとはもう声になっていません。放心したように口を開け、全身を痙攣させるだけ。眼球を潰されるのと同時に、和夜の中にある大切な何かが潰(つい)えたのを私は知りました。
「ククク。これでもなお、自分が十神和夜と云えるかな？　『十神一族最大最悪の事件』の記憶も、『青インク』との思い出も、十神財閥と関係しているという人生もすべて、物語ＡＩを祖とするＫ２Ｋシステムの見せる夢だった。それは今、こうして破壊され、貴様は歴史からも物語からも見放された。貴様はもう十神和夜ではない。名無しだ」
「ぼくは、ぼくは、十神和夜なんだ……」

和夜の目から、一筋の涙がこぼれ落ちました。敗北の涙を静かに流す弟を見ているのがつらくなった私は和夜の前に立つと、ニセモノをにらみつけて、「いじめるのをやめなさい」と云いました。

「姉気取りか、『青インク』」

「私は和夜の姉よ」

「貴様とて、偽りの記憶しか持っていないくせに」

「あなたなんて、存在そのものが偽りじゃないの。自分の正体も明かせないくせに」

「それこそが俺の強みだ。俺は俺の正体にかんして苦悩するつもりはない。『自分が何者か？』ということに悩まないでいられるのは、貴様らにしてみればうらやましいことだろうな」

「私だってそんなことに悩まない。私は私だもの」

「その『私』が、K2Kシステムによって作られた曖昧な存在ということを、百回は指摘されていると思うが」

「自分の記憶がニセモノだらけでも、私は今、こうやって生きている。縋(すが)るものが頭の中になくても、私という肉体はあるし、意識もある」

たしかに私は曖昧な存在です。生きていること、思考していることと、このかけがえのない実感のほかに、私が私である保証は何一つありません。それでも私は、ブレることなく壊れることなく、大地に踏ん張ります。記憶なんてどうでもいいと、K2Kシステムなんてどうでもいいと強がります。そういう物語を、自分にあたえることができるから。少なくとも、今はまだ。

背後でどさりと音がしました。極度の緊張にやられたのか、自己の

不在に脳が耐えかねたのか、和夜が気をうしない、床に倒れた音でした。不安を知らない子供のような寝顔だったことにほっとしながら、どうか次に目覚めたときは、今よりほんの少しでも幸福でありますようにと祈りました。

「弟は倒れ、姉は元気か」ニセモノがうなずきます。「どうやら貴様は、自分というものを確立したようだな。だがそれは同時に、危うくもある」

「自分を持たないあなたなんかに、何を云われても動じない」
「ククク。俺は十神白夜になる男だぞ？」
「一つ聞かせて。ここにいる和夜が和夜でないのなら、いったいだれなの？」
「そもそも十神和夜という存在が、実在する人物ではないかもしれない」

ん」
「その手の言葉は聞き飽きたわ」
「貴様はだれだ？」
「私は十神忍」
「貴様の拠(よ)りどころは非常にシンプルだ。心と体の二つだけで、自分というものを構成している。では俺が今から、それさえも消し去ってみせよう。そこで死んだように眠っている名無しのように、何もかも破壊してみせよう」
「私は壊れないし、和夜だって立ち直る。自分を信じてあげることができれば、自分でいられる。和夜もすぐにそのことがわかるはず」
「俺の次の言葉を聞いても、同じ主張ができるかな。では二冊目の偽書を裁断するとしよう」ニセモノは云いました。「貴様は自分の正体を知っているか？」

を知っているか？」
「自分の正体？」
「そもそもなぜ貴様にK2Kシステムが組みこまれたと思う？」
「それは……」
　Kが希望ヶ峰学園からK2Kシステムを隠すために、十神財閥の誘いに乗って、ボルヘスに搭載したと聞きましたが。
「K2Kシステムをただ隠すだけなら、わざわざ貴様に埋めこむ必要はない。そうは考えなかったか？　神様からは何も聞いていないか？」
　そう云われて、ほとんど反射的に白夜様へと視線を移すと、白夜様は変化も動揺もなく、私をまっすぐに見返していました。いつもであればうれしいその態度が、とてもおそろしいものに感じられました。
「まったく薄情な神様だよ。貴様にK2Kシステムを組みこめと命じ

たのは、そこにいる十神白夜だ。こいつが、この神様が、すべてを仕組んだ」

「でもそれは、私に『白夜行』を書かせるためにボルヘスを……」

「べつに小型のコンピュータでも問題なかろう。貴様が『超高校級の書記』として活躍するために、ボルヘスでなければならない理由は見当たらない」

「でも」

「K2Kシステムがどのような混乱を引き起こすのか、十神白夜は把握していた。にもかかわらず、K2Kシステムによって動作するボルヘスを、貴様に埋めこんだ。貴様の人格や物語がおかしくなるのは織りこみ済みというわけだ」

「ぎ、ぎ

ても　ても」
「貴様にK２Kシステムを埋めこんだのは、そうしなければならない理由があったからだ。貴様に嘘の物語をあたえて、嘘の歴史を信じこませる必要があったからだ」
　その言葉から、私は大急ぎで真実を見つけようとします。ニセモノが明かすよりも先に真実を探り当て、そうすることで少しでも余裕を獲得しようとします。しかし私がそこに到達するよりも早く、ニセモノは次の言葉を発しました。
「貴様が今、必死になって信じようとしている十神忍のモデルとなった人物は、この世にはいない。『十神一族最大最悪の事件』によって、殺されている」
「[illegible]

「……私は　だれなの？」

「件だよ。貴様自身が、『十神一族の繁栄の秘密』なのだ」

7

脳が決壊しました。と云ってみたところで、この脳は私のものではありません。私が今日まで『私』だと信じていたものは、どうやらすでにこの世のものではないようです。ならば私は、壊れることすらできません。幽霊。そう、私は幽霊。この世に存在しないのですから、壊れるなどという贅沢なことはできないのです。思考することだってできないのです。にもかかわらずこんなふうに、十神忍としてものを考えているのが不自然なものに思え、吐き気がしてきました。一刻も

早く自分を取り戻したい。本当の私に戻りたい。ですがニセモノの言葉を信じるならば、私は件だというのです。『十神一族の繁栄の秘密』であり、『かわいそうな牛』であり、絶望ハイスクールやWHOが必死になってさがしている、予言する獣だというのです。じゃあ、私は、人間じゃない？

「でたらめを、云わないで」私はなんとか反論をはじめます。「和夜は十鴉城で、件と会っている。そうよ、和夜は件と会っている。私じゃないべつの存在と会って……」

「姉弟そろって、似たような夢を見たようだな」

「夢？」

「『十神一族最大最悪の事件』の記録を読んだが、そのような記述はなかったぞ。偽書からいくら引用してきたところで、信じることはで

きん」
「そんな。だって、和夜は件から予言を聞いて……」
「貴様らの中ではそうなのだろうな」ニセモノは相手にしてくれません。「それにしても、うまいことやったものだ。本物サンは件を隠すために、件からその記憶自体を消し去った。隠蔽（いんぺい）工作としては、これ以上のものは思いつかん」
「私は、それだけのために」
「そうだ。件を消す。ただそれだけのために、貴様は生み出された」
「私が実感しているこの意識は、十神忍の意識なの？　それとも件？」
「意識のことなのではっきりとは云えんが、まあ前者だろう。貴様は十神忍を上書き保存されたのだから」

一人をパソコンみたいに」
「大差はない。最初は少ない変化でも、なんども上書きするたびにデータの中身は変わり、最後には件というデータはなくなってしまう。ファイル名が件だったとしても、中身は十神忍……いや、『十神忍を模したべつの人物』というわけだ。ではあらためて聞くが、貴様はだれだ？」
　脳が決壊しました。と云ってみたところで、この脳は私のものではありません。私は十神忍ではないし、件としての意識も消えていて、浮上する気配は皆無。では『私』は何者なのでしょうか。そしてこれからどう生きればいいのでしょうか。十神忍として生きる？　この人格は保持されるかもしれませんが、でも私は十神忍のニセモノです。本来の人格を取り戻す？　そんなことをすれば『私』は消えてしまい

ます、名無しの『私』として生きる？　心は十神忍のニセモノで、体は件として生きるなんて、まるで合成獣（キメラ）。アイデンティティが音を立てて崩れていくのがわかりました。こんなふうにカギ括弧つきの『私』を、必死になって守るのが馬鹿らしく思えてきました。消えたい。消えてしまいたい。だって『私』こそ、世界でもっともニセモノに近い存在だから……。

「真実に負けるな」

そう云ったのは、今まで静観していた白夜様でした。白夜様は眼鏡を指で押し上げながら、壊れつつある私を視界にとらえています。その目には励ましのようなものが宿っていました。あるいはそれも私が勝手に作った物語でしょうか。

「白夜様……お答えください。ニセモノの云ったことは本当ですか？　私は、件なのですか？」

「そうだ」白夜様は即答しました。「俺は件を封印するため、K2Kシステムを使ってお前という人格を作り出した」

「どうして今まで秘密に」

「お前が件であることは最高機密だ。本人だからといって口外するわけにはいかん」

「最低」

「お前からの評価など興味ない。そんなことより、真実に負けるな。お前の正体がなんであろうと、お前はお前だ。いちいち実存について悩むのは、馬鹿のすることだ」

「私には実存なんて最初からありません」
「自分が揺らいでは、世界も揺らいでしまう」
「私の世界なんて、揺らぎっぱなしです」
「どのような真実が現れようと、かまうことはない。すべてが嘘だったとしても自己を確立できる力を、お前は得たのだろう？　ならば真実を前にしてもなお、堂々としていろ」
「無理です」
「信じろ」

「白夜様のことを？」
「そうだ。この俺を無条件で信じろ。俺は自分を信じている。お前も俺を信じろ。必ず導いてやる」
「ククク。やめておけ本物サン。貴様の言葉は、こいつの耳には入ら

ない」ニセモノは大げさに首を振り、ふたたび私に攻撃をくわえました。「あの男は貴様を騙していた。貴様は利用されていた。貴様は件を隠すためだけに、この世界に生み出された。貴様という存在自体に価値などなかった。これが真実だ」

「それは違うな」白夜様が反論します。「今の言葉、一つの嘘が紛れこんでいる。こいつには価値があった。『白夜行』を書くという価値があった」

「残酷だな本物サンは。過去形で語ってやるなよ」

「ポイント稼ぎのために、うまいことを云ってやるほど、俺は卑怯者ではない」

「そんな冷たい態度で大丈夫か？　こいつはもう、貴様への信頼をうしなっているぞ」

「フン。それはこいつが乗り越えるべき試練だ」

「十神白夜の信頼は地に落ちた。騙して、利用して、使い潰したのだから、当然だがな。貴様は血も涙もないやつだ。自分の都合で作り出した相手に対して、優しい言葉の一つもかけないのだから」
「上辺だけの言葉。中途半端な優しさ。必要のない罪悪感。そのようなものを、十神は採用しない。ただ導いてやるだけでいい。ニセモノよ、お前も俺を目指しているのなら、心得ておくことだ」
「了解したよ。この俺が貴様に成り代わった暁には、ぜひそのようなな……」
「うるさいだまれぶたやろう！」
そう云ったのは私でした。私。そう私。私。私です。私が、十神忍が云いました。この私が云いました。みなさんごぞんじ、この私が云ったのです。

「あんたみたいな豚に、白夜様の代わりがつとまるわけない」私はまだまだ云います。「白夜様は神様だから、このスタンスでかまわないの。愚民は、信者は、所有物は、神に慈悲なんか求めないの。神を信じるだけで救われているから」

「なんだ、言葉攻めがまだ足りなかったか？　絶望に堕ちるまでくり返してやる。貴様は十神白夜に利用されていた。貴様は件を隠すためだけに作られた人格だった。貴様は……」

「うるさいだまれぶたやろう！　それが何さ。神が人を作るのは、当たり前のことでしょ。それに……自分の正体が件であろうと、十神忍じゃなかろうと、やっぱり私は私なの。私は十神忍なの。白夜様が神様で、観察して、伝記を書いて、それだけで幸せを感じる十神忍な

の。その事実は変わらない。私が神の言葉を信じることは変わらない。あんたの言葉こそ、だれの耳にも入ってないじゃないの。あんたは孤独な豚として生きて、そのまま死ぬんだ」

「俺を愚弄するか」

「私は信じる。白夜様を信じる白夜様を信じる」

「フン。よくぞ戻ってきた。それでこそ俺の『青インク』だ」

白夜様は出来のいい犬をほめるような顔つきで、満足そうにうなずきました。私もまた出来のいい犬を気取って、ぺろりと舌を出しました。

「白夜様は本当に……神様だったのですね」

「あ？」

「だって白夜様は、私を作ってくださったのですから」

人を作るなど、神にしかできない所業。神だけにゆるされた特権。
だから、
やはり、

白夜様は神様です。

私と白夜様は、棺の前に立つニセモノに向き直りました。ニセモノは贅肉(ぜいにく)を震わせて、怒りとも悔しさともつかない表情を浮かべていますす。私ていどの存在を壊せなかった自分に、すっかり絶望しているのでしょう。
「ニセモノよ、これでわかったか。俺たちはいかなる真実も、いかなる選択肢も、華麗に乗り越える。お前が撃ってくる絶望の弾丸を残らず弾き返す。十神の名にかけて。さて、こんどはお前という偽書が破

られる番だ。お前の目的を話してみろよ。絶望ハイスクールが、なぜこのような舞台を作ったのかを」

8

「いいだろう……。俺たち絶望ハイスクールの目的を、三つの動機によって構成された舞台のすべてを明かすとしよう」ニセモノは語りはじめました。「この世界に、件がいてはこまるのだよ。予言など、あってはならんのだよ。あらゆる才能を網羅する希望ヶ峰学園でさえ、『超高校級の予言者』はいない。それはつまり、世界中のどこにも、予言という才能は存在しないということだ。自然界に青い薔薇（ばら）がないように、世界がその存在を許可していないということだ。なぜだかわ

かるか？　予言はチート行為だからだ。未来が予言できてしまえば、ゲームシステムが壊れる。ルールブックが破られる。『人類史上最大最悪の絶望的事件』を進めるためには、その障害になるものを消去する必要があった」

「『人類史上最大最悪の絶望的事件』とはなんだ」

「絶望ハイスクールの最終目標だ」

「お前たちにふさわしい、恥ずかしい最終目標だな」

「それを成すために、件などという常軌を逸した才能には消えてもらわねばならん。これが一つ目の動機だ。むろん、世界征服というのは嘘の動機だよ。愚民どもを煙(けむ)に巻くためのな」

第一の動機。

件……私の消去。

とはいえ、このようになことをしてまで、件を消す必要があるでしょうか。自分の力を忘れた私には、予言の重みがうまく実感できません。

「予言って、そんなにすごい才能ですか。未来がわかるだけですよ。核兵器のほうがよっぽど危険なのでは」

なのでそう云いました。

「件の能力が常軌を逸しているという意見には、俺も同意だ」白夜様が答えます。「核兵器などは、アーレントではないが『人類の自殺』を可能にしただけにすぎん。いっぽうの予言は、物理や哲学といったレベルを超えた、まさしくチート行為だ。どんなに手を尽くしても変えることのできない未来を先に知ることができる……。そんな才能が

あれば、それこそが世界を壊す要因となる。この世界に、このゲームに、あってはならぬ才能だ」

「では白夜様は、世界を守るために件を隠したのですか？」

「フン。勘違いするな。俺は自分の才能だけで十神を動かしたかった。それだけだ」

「絶望ハイスクールの障害となる存在は、件だけではなかった」ニセモノが言葉を再開させます。「『世界の選択を選択する会』。これは件とはべつの意味で、世界のルールに反している。世界を裏からあやつる組織なんざ、陰謀論を信じるやつの脳内にだけあればいいもので、実在してもらってはこまるのだ。世界の裏側から好きなように手を回されてはこまるのだ。俺たち以上の秘密結社があってはこまるのだ。なので皆殺しにすることにした。こちらには『絶望高校級の王女』という、『世界の選択を選択する会』のメンバーがいるので、内

部情報は筒抜けだった。連中の集まる骸骨教会に戦刃むくろを投入し、虐殺した」

　第二の動機。

『世界の選択を選択する会』の殲滅（せんめつ）。

　ですが。

「俺はまだ生きているぞ」白夜様が云いました。「俺こそが、この十神白夜こそが、お前たちの野望を邪魔する最大の障害であるにもかかわらず、こうして余裕で生きているぞ」

「あいかわらずの自信が鼻につくが、まあ事実だ。本物サン、貴様はきわめて危険な存在だよ。十神財閥の御曹司たる十神白夜が、本当に本当に本当に邪魔だということを、今回、身をもって知らされた。貴様はとんでもない男だ。自分では何もしないくせに、どういうわけか

俺たちの仕事をやりにくくさせる」
「ただ存在するだけで、すべての敵対者を排除できる。これが十神だ」
「やれやれ……貴様が心底うらやましいよ。こんなにもニセモノだらけの物語の中で、唯一の本物として君臨しているのだから」
「本物だからな。俺は負けん。俺は死なん」
「そんな本物サンが、じつは今まで生かされていただけだったとすれば、どうする？」
「あ？　くだらん負け惜しみはよせ」
「負け惜しみではなく、真実だ。俺たち絶望ハイスクールは、十神白夜を殺すつもりはなかった。本物サンには最後まで生きていてもらう予定だった。骸骨教会から逃げられたのも、今回の戦いでいくつものの

死線を潜り抜けてこられたのも、俺たちが見逃していたからだ。そういうプランだったからだ」
「プランとはなんだ。説明しろ」
「俺はただ、プランに沿って動いていたにすぎん」
「首謀者は……お前ではないのか？」
「ククク。とりあえずこの物語の中では、俺をラスボスにしてくれないか。そうでなければ、寂しい」ニセモノは一瞬だけ、息を詰めたような声になりました。「俺とは方向性が違うが、首謀者も貴様のことが大好きらしい。どうも首謀者は、貴様といっしょに学園生活を楽しみたいようなのだ。だからこそ、貴様を死なせなかった」
「首謀者は俺のクラスメイトなのか？　78期生の中にいるのか？」

白夜様はぞっとするようなことを云いました。戦刃さんの例もあるとはいえ、もしそうだとすれば、これこそまさに絶望。本当の意味で、だれも信じることができません。絶望ハイスクールという名の絶望は、希望ヶ峰学園のどこまで根深く浸透しているのでしょうか。
「ククク。俺たち全員で貴様を見ていた。チェコ国内を駆け回る貴様を、ずっと見ていた。その視線は、もはや応援と云ってもいいくらいだった。子供のころ、アリの巣を破壊しながら、必死にあがくアリたちを、応援の眼差しで見つめた経験はあるか？　あれと似たようなものだな」
「俺を見て、笑っていたのか。ゆるせん」
「そうではない。むしろ俺たちは、十神白夜を再評価し、十神白夜を

最大限に危険視した。この事件を引き起こしたのも、本質的には貴様をどうにかするためだ。件や『世界の選択を選択する会』は、副次的な動機にすぎん」

「どういうことだ」

「俺たちは貴様の活躍を目の当たりにして、そのすばらしさに心の底から絶望した。本人は何もせずとも世界を管理・運営できてしまう十神白夜という人格に、『超高校級の御曹司』という才能に、震え上がった。そしてやはり、こいつは消さなければならないということを悟った」

第三の動機。

白夜様の排除。

ですが、白夜様を消したいのに、殺すつもりが最初からなかったと

いうのは矛盾ではないでしょうか。
「それでは裁断といこう。ククク。こんどは偽書ではなく正典の裁断だ。胸が高鳴りすぎて、カロリーがほしくなるな」
ニセモノの言葉を合図に、告解室から戦刃さんが現れたかと思うと、一瞬にして私の背後に回り、ナイフを首に当ててました。冷たい刃が肌を刺激して、思わずびくんと震えますが、私は屈しません。
「人質として使うのなら、むだよ。私の命に価値はないから」
「そんなこと云っちゃこまる……」
戦刃さんはびっくりしたような声を上げました。
「本物サン、では最後のイベントをはじめよう。貴様にはこれから、選択してもらう」
「どういうことだ、説明しろ」

「世界征服をするか、世界征服をやめるか。その選択をしてもらいたい」

「選択だと……」

「貴様がどちらを選んだとしても、この物語は終わりだ。ジ・エンドだ。ハッピーエンドかどうかは知らんがな」ニセモノは云いました。

「事態はたしかに、本物サンに有利だよ。だれもが『絶望病』をコントロールできず、貴様はチェコ政府と通じていて、俺はプラハ城のど真ん中にいて、何より貴様を殺すことが許可されていない……」

「今さら弱音を吐くのか」

「これは、貴様の勝ちが決まった戦いだった。俺たちを倒したいのなら、世界征服をしたいのなら、さっさとそれを選択するがいい。選択

肢は今、貴様の目の前にある」

世界征服をする

世界征服をしない

「どうする本物サン。世界征服をするのか？　しないのか？　さっさと決めてくれ。『世界征服宣言』のタイムリミットまで、あと一時間もない。午後六時のリミットをむかえたのに何も起こらなかったら、それは俺の恥になってしまう」

「フン。条件があるのだろう？」

白夜様が確認すると、私にナイフを突きつけていた戦刃さんが、空いた手を使って薬瓶を取り出し、「ええと、これは記憶を消す薬で

す」と云いました。

「そんなものがあるのか？」

「あ、その……嘘です」

「はっきりしろ」

「俺がやるからしゃべらなくていい」ニセモノは云いました。「今のは便宜的な表現にすぎん。記憶をピンポイントで消せる都合のいい薬でも、記憶の一部を自在に消去できる脳手術でも、それこそＫ２Ｋシステムでもかまわん。貴様の好きな解釈でいいが、俺たちはそういうものを持っている。絶望ハイスクールの切り札と云っても過言ではない」

「信じられんな」

「好きにするがいい。信仰は個人の自由だ」

「俺が世界征服をすると選択したら、それを飲ませるのか？」
「いや、逆だよ」
「逆だと？」
「貴様が世界征服をしなければ飲んでもらう」
「わけがわからん。何が狙いだ」
「世界征服を選択すれば、もちろん貴様の勝利だ。十神白夜が勝ち、世界征服は成った。薬も飲んでもらわなくてかまわん。ただし件は、十神忍はここで死ぬ」
「俺が世界征服を選択しなければ？」
「世界征服を選択しなければ、もちろん貴様の敗北だ。十神白夜は負け、世界征服は成らなかった。薬を飲んでもらい、貴様の中から十神忍の記憶を消し、さらには貴様の才能を一部制限する。今後、俺たちが自由に動けるていどにな。それと、チェコにいる貴様のお仲間にも

薬を飲んでもらい、やはり十神忍の記憶を消去する。ただし十神忍は生きのびさせよう」

「殺さなくていいのか。お前たちの目的は、件の殺害のはずだが」

「その必要はない。観察するかぎり、こいつに件としての記憶はすでにないようだからな。とはいえ、このまま十神忍として生きてもらうわけにもいかんので、記憶は完全に消去し、まったくべつの人格として生きてもらうが」

こんなにも簡単な選択肢があるでしょうか。世界征服をすれば、すべてうまくいくのです。むしろ世界征服をしなかった場合のマイナス面が、あまりに大きすぎました。白夜様は恥をかき、才能を制限され、絶望ハイスクールが勝利してしまうのですから。

「白夜様!」私は叫びました。「世界征服を選択してください! 私

の命なんてどうでもいいですから。それに、どっちを選んだとしても、私はいなくなるんですから」
「ククク。そうだな。どちらにしても貴様は貧乏くじを引かされる。まあいいではないか。どうせもともと、貴様はこの世に存在しないのだからな」
「白夜様、こんなのは、考えるまでもありませんよ」
「そうだな、考えるまでもない」白夜様はうなずきました。「俺は決めた」
「ほう。即決とはさすがだな本物サン。ではささやかながら、十神白夜の世界征服成就を祝って……」
「フン。何を云っている。俺は世界征服をやめるぞ」

9 世界征服をする

▼世界征服をしない

10

「白夜様？」

「絶望ハイスクールの思惑に乗るな。これはすべて、連中のお膳立てによって作られた世界征服だ。そんなものを食らうつもりはない」白夜様はいつもと同じく、淡々とした口調で説明しました。「俺がここで世界征服を選べば、こいつらの活動はたしかに阻止できるだろう。

しかしそんなものはトカゲの尻尾切り、一時的なものだ。首謀者がほかにいる以上、ここで俺のニセモノに勝ったところで意味はない」
「そんなことありません。白夜様が世界征服するのですから、世界はより高みへと進むことができます。このような輩(やから)が跋扈(ばっこ)しない世界を作ることができます。それは希望のある世界です」
「違うな。俺が世界征服をすれば、世界から希望が消える」
「どういう……ことですか？」
「そこがやつらのねらいだ。今ここで絶望ハイスクールを仕留めたところで、首謀者による新たな罠が、俺の知らないところで作られるだろう。そのとき、俺がそこに気づき、止められるかどうかはわからない」
「できますよ。白夜様ならできますよ」
「不確定だ」

「できますって」

「こいつらは害虫のようなものだ。部屋を這い回る一匹を駆除したところでたいした意味はなく、本隊を叩いて絶滅させなければならない。ここで俺が世界征服を選択すれば、とりあえず目の前にいる害虫を消すことはできるだろう。だがそれは、希望の消滅につながる大悪手だ。俺が世界征服を選択した瞬間、本隊は一時的に身を隠す。こうなるとやっかいだ。俺が次にそれを見つけられるかは不確定だからな」

「だからって、見逃すのですか？」

「俺が見逃すことで、絶望ハイスクールの動きはむしろ限定される。そこに希望が生まれる」

「希望？」
「あとは愚民どもにまかせよう」
「は？」
「俺は神ではないからな」
「白夜様は神様です！」
私の残された左目から、ぼろぼろと涙があふれました。

「神ではない。ただの人間だ。それはお前が、一番よく知っているはずだが」
「絶望ハイスクールが何よりもおそれているのは白夜様の存在です」
私は涙を流しながら一気に云いました。「もし、もし白夜様が世界征服をしなかったら、薬を飲まされるんですよ。才能を制限すると云っ

てるんですよ。白夜様の才能を破壊されることが、本当の意味で絶望です」

「いや、希望は残る。俺が世界征服をしなければ、こいつらは次の作戦行動にうつるだろう。このメンバーで、この力で、『人類史上最大最悪の絶望的事件』とやらを引き起こすだろう。それも即座に」

「根拠は」

「こいつは今、俺が世界征服を選択しなかったら、チェコにいる78期生にも薬を飲ませ、お前にまつわる記憶を消すと云った。お前の正体を知っている人間はほかにも多くいるにもかかわらず、そこについての不安がないというのなら、『人類史上最大最悪の絶望的事件』は間を置かずにおこなわれるはずだ。首謀者が、本隊が、このあとすぐに

動き出すというわけだ。俺はそう読んでいるが、ニセモノよ、どうだ違うか？」

　白夜様は視線をやりますが、ニセモノは無言と無表情をつらぬくだけ。それは肯定をしめしていました。絶望ハイスクールは、今回の事件を終えた直後に、二手目を指してくるのです。

「十神の視点から見れば、今の絶望ハイスクールはたいした脅威ではない。学生運動に毛が生えたていどの、お粗末な組織といったところだろう。赤潮は知っているか？」

「何を知っているかですって？」

「赤潮だ」

「……プランクトンが増えて海が赤くなるやつですよね」

「そうだ。人間の暮らしがもたらす影響で海に栄養分が過剰供給され、それを食ったプランクトンが異常増殖することで海水が赤く染ま

り、人間の暮らしに悪影響が出る」
「なんでこんなときに環境問題の話なんか」
「まあ聞け。絶望ハイスクールと赤潮は、発生条件がいっしょだ。こいつらは世界が垂れ流す膿（うみ）を食って増殖し、世界をぶち壊そうとしているのだからな。ならばプランクトンよろしく下水道を整えて、増殖を抑制してやればいい。環境整備だ。それくらい、俺がいなくてもできるだろう」
「白夜様がいなかったら私は、私は……」
「こいつらの次の作戦行動には、かならず隙があるはずだ。そこに希望を叩きこめ。そうすれば勝てる」白夜様は眼鏡を押し上げました。
「俺は……そうだな、仲間を信頼しているからな」
「でもその仲間の中に、首謀者がいるかもしれないんですよ！」

「あいつらなら、首謀者を見つけ出すことができる。だが、この機を逃しては、それはむずかしくなるかもしれん。絶望ハイスクールに力をあたえる時間を作らせてはならない。俺が世界征服を選択するのは、やつらとしては、願ったり叶ったりというわけだ」

「そんなことありません。白夜様が統治する世界では、こんな連中はカスです」

「どんな世界だろうと、希望の前では絶望などカスだ」

「だったら白夜様が世界を……」

「まだわからないのか？　俺が世界征服を選択しないことで、多くの希望が託されることを」

「今ここで世界征服しなかったら、世界が滅ぼされるのに！」私の顔

は、涙でぐしょぐしょになっていました。「薬を飲まされた白夜様は、滅んだ世界の中で、ただの雑魚キャラになるかもしれないんですよ。かませ眼鏡になるかもしれないんですよ」
「問題ない。俺の代わりに、仲間が解決してくれるからな。俺のクラスメイトはそこそこ優秀だ。まあ俺ほどではないので苦労はするだろうが、最後には勝利できるだろう」
「私は、いやです。白夜様の活躍しない世界なんていやです。白夜様が笑われる世界なんて見たくない」
「笑いたいやつには笑わせておけ。もし俺が、かませ眼鏡とやらになっていたとしても、導いてやることはできるからな。どんな俺であろうと、かならず導いてやる。十神の名にかけて」
「わかりません。私には全然……」
いったい何を云っているのでしょう。自分が自分ではなくなるとい

うのに、しれっとした顔でそんな言葉を吐く白夜様が、私には理解できません。自分が消えることが、自分が終わることが……怖くないのでしょうか？
「何より、俺が世界征服を選択しなければ、お前は生きのびることができる」
「そんなことどうでもいい！　それにどうせ記憶を消されます。私を消されます。そんなの、死んでいるのといっしょです」
「お前には最初から、記憶というものはない。お前にあるのは、心と体だけ。そのうえで今こうして、生きているじゃないか。記憶を消される薬だろうがなんだろうが知るか。かまうな。勝て。虚構に勝ち、真実に勝ったお前ならできる」
「いやです。いやです。白夜様！」

「いや、、いや、、白夜様」

「お前との議論はここまでだ。さっさとすませるぞ」

白夜様は泣き叫ぶ私を無視すると、ニセモノのもとへ歩き出しました。

「本当にいいのか」

「何がだ」

「本当にいいのか」ニセモノの顔には、露骨な困惑が浮かんでいました。「世界征服は、貴様の目の前にあるのだぞ。やわらかいベッドの上で脚を広げた処女のように、貴様を待っているのだぞ。貴様はただそこに飛びこめばいい。なのにどうして、そんな簡単に世界征服をやめることができる」

「フン。俺は欲求不満ではないからな。世界をほしがる欲望を、最初

から持っていない。俺はただそこにいるだけで、俺という存在を護持できる。なぜなら俺は本物だからだ。ニセモノのお前にはわかるまい」
「ああわからんよ。まったくわからん。貴様の強さが、俺にはわからん」
「子供だからだ」白夜様は口もとに笑みを作りました。「だが、いつまでも子供のままではいられない。お前にもいつか、だれかを導くときがくるかもしれん。そのとき、俺の真意を理解して感涙にむせぶがいい」
「これでは勝った気にならん」
「フン。本音が漏れている。やはり最初から、俺に世界征服をさせな

いつもりだったか」
「…………」
「世界征服をしないという選択をさせて、俺を苦しませるのがお前の計画だったのだろうが、残念だったな。そういくものか。悩んだり叫んだり乱れたり壊れたりするのは、十神白夜ではない」
「……薬で弱体化した貴様は、悩んだり叫んだり乱れたり壊れたりする男に成り下がるかもしれんぞ」
「そいつはキュートだな。今の俺より可愛げがあるから、人に愛されるだろう」
「準備がある。五分だけ時間をやろう」ニセモノは背中を向けました。「本物サン」
「なんだ」
「、、、世界征服だったんだ……

い世界征服だったぞ」

ニセモノはそれだけ云うと、大聖堂を出て行きました。戦刃さんはあわてて私から離れて、そのあとについていきます。

そして二人だけが残されました。

「これで終わった」白夜様は静かに息を吐きました。「やれやれ、とんだ土日だったな。明日は、普通の月曜日であってほしいが」

「私は……どうすればいいのでしょう」

「自分で決めろ。ここからは本当に、お前だけの人生だ。俺も『白夜行』も関係ない、お前だけの人生だ」

「白夜様のいない人生なんて考えられません」

「たがいを忘れたとしても、俺たちは生きている。希望的観測かもしれないが、どこかで接点もあるだろう」

「そのときに白夜様をおぼえていないのなら、意味ないじゃないです

そのときは白夜様を忘れているのですか。意味がないじゃないです
か」
「意味を作るのは、これからの俺たちだ。いつも通りにやれ」
「その『いつも通り』ができなくなるんですよ。記憶を消されてしまうんですから」
「お前には、苦労ばかりかけたな」
「苦労だなんて」私は涙をぬぐい、嗚咽と不満をなんとかこらえます。「私は……白夜様に作られたことを、心から感謝しています。私に心があればの話ですけど」
「心はあるさ。そして、そう云ってもらえると救われる」
「白夜様、その……」
「俺の許可なく云いよどむな」
「怖くないのですか？」

「怖くないのですか」
「怖くはない。ただ、少しだけ」
「え？」
「少しだけ、寂しいものがあるな」
「ええ……寂しいですね」
「今の俺ではなくなるという感覚が、どうにも想像できん」
「そこにかんしては、私のほうが先輩ですからね」私は無理に笑ってみせました。「私にだって、白夜様より知っていることはあるんですよ」
「そうだな。俺は知らないことばかりだ。やはり、神とはほど遠い男だよ」
「白夜様は神様です。少なくとも私にとっては、神様です」
「俺にできることはすべてやった。自分の選択が間違っているとは思わない。絶望し、信じなくなった人間は、そう遠くないうちに消滅するだろう」

えん、絶望ノインクールに、そう遠くないうちに崩壊するだろう」

「見たかったな……。白夜様が征服した世界を」

「俺は満足している。今日までの自分に、一片の悔いもない」

「白夜様を最後に論破できなかったことが、唯一の心残りです。でも、泣き言はこれでおしまい。だって白夜様は私の神様で、そして私は……きみのお姉さんなんだから」

「フン。いい顔をしているじゃないか。『青インク』よ、お前はどうやら、自分のほしいものを手に入れたようだな」

その言葉によって、私は最後の真理を獲得しました。

お話は簡単です。ひとりの青年が世界制服をしようとしました。

青年はなみはずれた冒険をかさねたすえに、自分のほしいものを手にして、無事に帰ることができました。めでたしめでたし。

に入れ、無事に帰ることができました。めでたしめでたし

この『青年』とは白夜様であり、私でもあったのです。

それなら……帰らなくちゃ。家に帰らなくちゃ。家に帰るまでが世界征服なのですから。とはいえ私は、次なる私となってどこに帰り、どんな冒険をかさねて、どこに行くのでしょう？　旅のしおりを持たないまま修学旅行に出かけるような気分でしたが、意外なことに地獄というほどではありませんでした。

「おっと」白夜様は眼鏡に触れます。「いつのまにか、眼鏡が曲がってしまった。替えをよこせ」

「ただちに」

私は眼鏡を取り出すと、ちっとも曲がってなどいない、白夜様の眼鏡

私は眼鏡を取り出すと、ちっとも曲がってなどいない白夜様の眼鏡を取り替え、ふと一つの発想を宿します。

「白夜様……これを」

私は自分の万年筆を差し出しました。

白夜様はそれを受け取ると、ジャケットの胸ポケットに入れました。

「『青インク』よ」

「はい」

「『白夜行』の執筆、ご苦労だった」

「つたない文章でもうしわけありません。せいいっぱい、書かせていただきました。

たたきました」
荒っぽい足音を立ててニセモノが戻ってきたので、私は少し憤慨します。まだ三分もたっていません。ですがニセモノは私の心情などかまうことなく、大きな携帯電話を白夜様に押しつけました。
「世界中のスピーカーにつながっている。これで、愚民どもに真実を教えてやれ」
ニセモノから携帯電話を受け取った白夜様は、迷うことなくそれを耳に当てると、やはり迷うことなく言葉を発しました。
「俺だ。
くだらん『絶望小説』を読み、『絶望病』を楽しむお前たちに告げる。手短にやらせてもらおう。
俺は世界征服をやめた。

*******ebook converter DEMO Watermarks*******

だから、お前たちもやめろ。世界を破壊するのをやめろ。そして現実に立ち向かえ。この世界をうまく進むには、破壊ではなく建設が有効であることは、さすがのお前たちも知っているはずだろう?

お前たちがすでに読み、あるいはこれから読もうとしている『絶望小説』には、『絶望病』を引き起こす効果などない。

ただの書物だ。

ただの物語だ。

ただのフィクションだ。

そこにはなんの効果もない。

『絶望小説』には、[illegible]力などない、お前たちの[illegible]

『絶望小説』には　人を狂わせる力などなく　お前たちもそれを知っていた。すべてを承知しながらも自分自身を騙し、狂ったような気分になっていた。思い通りにならない世界を壊したくて、『絶望病』という名の熱病にかかっていた。世界から逃避できるチャンスと判断して、この大騒ぎに乗っていた。

ふざけた真似はやめて、我に返れ。

勉強しろ。仕事しろ。人生を進ませろ。くだらん理由を作って逃げるな。くだらん思想に染まって遊ぶな。くだらん文句を垂れて安心するな。くだらん仲間を見つけて安住するな。くだらん世界とほざいてあきらめるな。

世界はつづく。

世界は終わらない。

お前たち[illegible]

お前たちがその心を、体を、記憶を正しく使い、正しく生きているかぎり、世界はお前たちが動かしているという事実を、決して忘れるな。
明日は月曜日。一週間のはじまりだ。お前たちが立ち直るチャンスがさっそくやってきた。まさか、そこからも逃げるようなことはしないよな？
以上だ。
おやすみなさい」

これが真相。
読むだけで人を狂わせる本とか、人類のDNAに虐殺のシステムがインプットされているとか、人の脳をあやつる未知の虫とか、そういった都合のいい展開は、この世界に用意されていませんでした。本は

本。物語は物語。人生は人生。それ以上でもそれ以下でもありませんでした。

私はKの言葉を思い出します。たしか彼は、『絶望病』はボルヘスと同じタイプの嘘によって発症している可能性があると云っていました。K2Kシステムを宿していない一般の人々は、自分に嘘を吐き、みごとに騙していたのです。うまく進んでくれない世界を壊すために、うまく進められない人生から逃げるために、みずからすすんで『絶望病』という架空の病にかかり、自分の見たい現実だけを見ていたのです。いつか裁きを受ける日がくる。私のように。

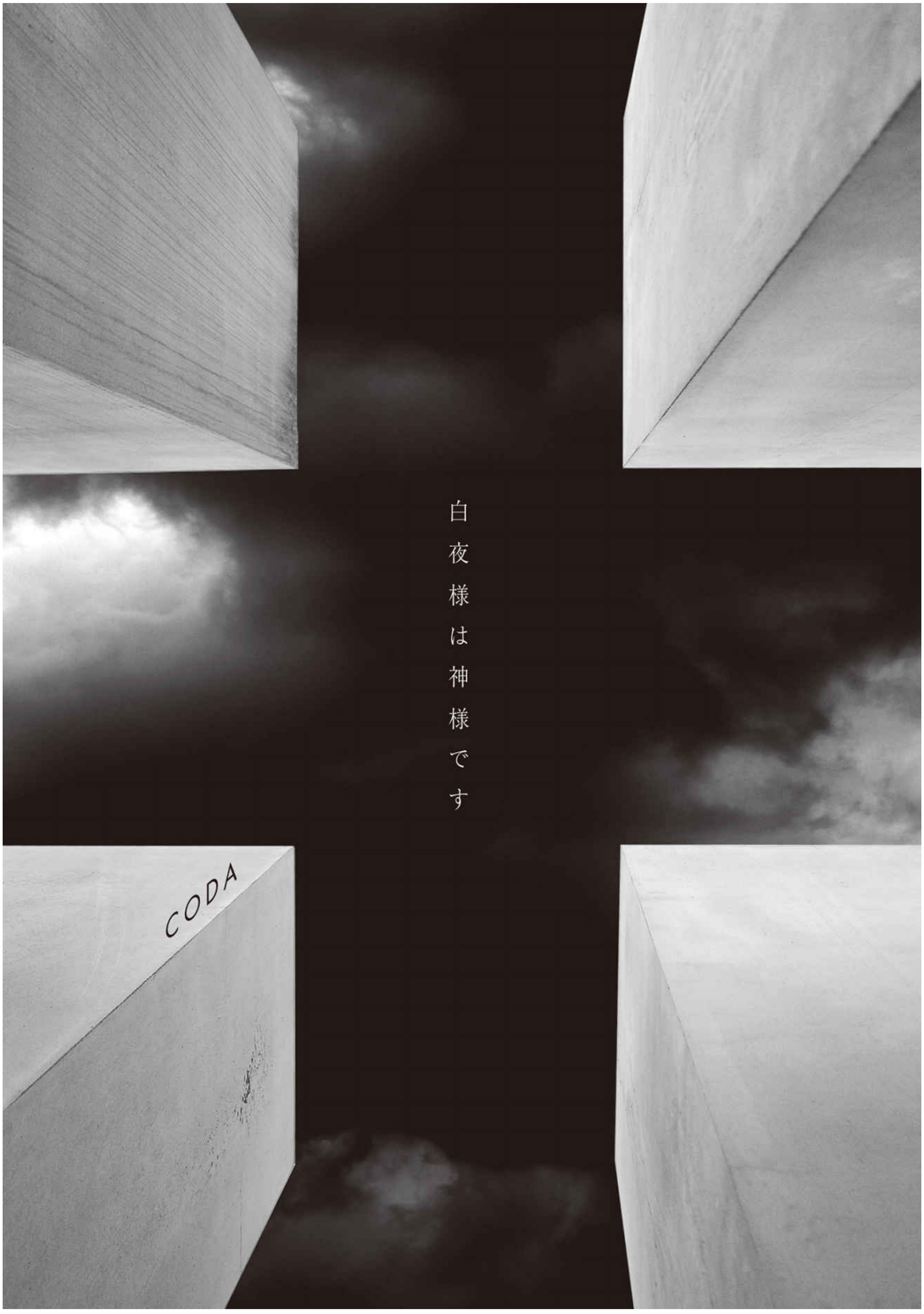
「ククク。俺たちは『絶望小説』になんの効果もないことを知っていた。やつらはただの本を読んで、暴れ回っていたのだ。『人類史上最大最悪の絶望的事件』の前哨戦としては、なかなか見物だったよ。ま

ったく絶望的だ。まったく救いようのない愚民どもだ。だがな、いか本物サン……これが人間だ。絶望は感染する。はたして希望は、それを食い止めることができるかな？」ニセモノは二つの薬瓶を取り出しました。「これは普通の睡眠薬だ。まずは眠ってもらおうか。処置は眠っているあいだにおこなう。安心してくれ。悪いようにはしないと約束しよう。俺は貴様の……ファンだからな」

白夜様は無言のまま二つの薬瓶を受け取ると、一つを私に手渡しました。これを飲めば、私は終わります。少しだけ寂しいですが、おそれることはありません。希望が残るのですから、おそれることはありません。私と白夜様は、同時に液体を飲み干しました。私には次の私がある。いつかまた、白夜様と会うことだってあるかもしれない。そ

のときはこんどこそ、二人で世界征服できますようにと予言のように祈りつつ、かくして私は終わります。
　それではみなさん、いい夢を。
　おやすみなさい。

（『白夜行』了）


白夜様は神様です
CODA

月曜日。
希望ヶ峰学園へとつづく道を、十神白夜は歩いていた。
周囲にはごく当然のように、『超高校級』の生徒たちが歩き、学園へと向かっている。才能それ自体にはなんの特権性もないというような光景が、十神には心地よかった。才能とは、勝利という名の列車に乗るための切符にすぎず、切符がなければ車を使えばよく、車がなければその足で歩けばいい。己の人生を勝利に導くのはあくまで個人の努力というのが、十神の信じるところであった。
後方から、脳天気な声がやってくる。
十神と同じく、希望ヶ峰学園第78期生、江ノ島盾子（じゅんこ）によるものだった。

「おハロー十神！　朝から辛気くさい顔しちゃってさ！　アンタはヒーローなんだから、もうちょっとヒーローにふさわしい表情できないワケ？　キャハハハ！」

「お前こそ、朝にふさわしい声で挨拶できないのか。頭痛がする」

正確には、それは日本に帰国した直後からつづいていた。体調管理のミスが、『超高校級の完璧』を自称する十神にはゆるせない。

「盾子ちゃんのボイスは朝から晩まで魅惑的だっつーの。それより問題ないの？」

「何がだ」

「アンタの人生よ。逮捕とか裁判とかないの？」

「フン。俺は世界を救った男だぞ」

この週末に、世界を終末に向かわせた『世界征服未遂事件』は、オルヴィン・エレベーターなる青年が引き起こしたものだった。蓄積されたルサンチマンと、世界征服したいという幼稚な欲望に支配され、今回の事件を実行したのだ。

オルヴィン・エレベーターは十神白夜を騙り、世界保健機関疫病対策委員実行部隊隊長という身分を利用して、『絶望小説』をはじめとするいくつもの火種を世界にばら蒔いた。しかし相手が悪かった……と十神は心から思う。偶然にもチェコにいた十神は、なみはずれた冒険をかさねたすえに、『絶望小説』の真実をあばき、オルヴィン・エレベーターを確保し、自分の無実を証明した。こうして世界を救ったヒーローとなったわけだが、十神本人にしてみれば、ちょっとばかりいそがしい週末でしかなかった。

世界は終わらなかった。
世界征服は成らなかった。
今まで同様に。

「それにしても、世界を救うとかすごくね？」江ノ島が顔を近づけてくる。「アタシ正直、十神のことを見くびってたわ！」
「はっきり云われると腹が立つ」
「アタシは日本から出なかったけど、アンタといっしょに世界を救ったメンバーってことになってんの。イエーイ！　かしこいかわいい盾子ちゃんに、また一つ金ピカバッジが付属されちゃった。おかげで雑誌の仕事がめっちゃ増えて、ポッキー食べるひまもなくて馬鹿ウケ！」

ふたたび後方がさわがしくなる。ふり返ると、ＩＱの低そうな金色の牛車（ぎっしゃ）に、ソニア・ネヴァーマインドが乗っていた。帽子をかぶった目つきの悪い男子生徒が、汗だくになってそれを牽（ひ）いている。

「お控えなすって！　わたくしは、世界を救った王女様であらせられますぞ。皆の衆、ヘッドが高ぃ。下にぃー下にぃー……。あ、これは十神さん、おはようございます」

開け放たれた簾（すだれ）から、ソニアが顔を出した。

「馬鹿王女、朝からやかましいぞ。あと自慢するわけじゃないが、世界を救ったのは俺だからな。お前はたまたま近くにいただけだからな」

「十神さん、今朝はお一人ですか？」

「俺はいつだって一人で登校しているが」
「ご学友、いなそうですものね」
「はっきり云われると腹が立つ」
「はあ、はあ、はあああメッチャ重い……」牛車を牽く男子生徒は、疲労のせいか目を回していた。「あっ、ご、誤解です！　ソニアさんが重いわけじゃないスよ。むしろオレ、ソニアさんの重みを顔面だけで感じてみたいタイプだから安心してください！」
「では十神さん、ごきげんよう」
　ソニアは男子生徒を相手にせず手をふり、牛車は先に進んでいった。その場に残された十神と江ノ島は、なんとなくといった感じで、希望ヶ峰学園への道をならんで歩く。

「結局……世界、終わんなかったね」しらばくして江ノ島がつぶやいた。「アタシとしては、ちょっと期待してたんだけどさ」

「お前、終末論者だったのか」

「そんなんじゃないけど、でも世界が終わるっつーなら、ちょっと見てみたいかなって。十神にはないの？　そういう気持ち」

「ない」即答してやる。「世界の終わりを見たがるのは、現実に満足していない証拠だ。『世界征服未遂事件』を引き起こしたあの男のようにな」

「今まで完璧に忘れてたけど、事件の犯人って、あれからどうなったの？」

「俺も今まで完璧に忘れていたのでよく知らんが、獄中（ごくちゅう）で発狂し

て、意味不明なことを口走っているらしい。裁判に出廷するのはむずかしいだろう」

「つまんねーオチ。絶望したわ」

江ノ島は歩きながら背伸びをすると、前を歩く戦刃むくろを発見し、「あ、お姉ちゃんだ。ほんじゃね十神。また教室でー」と云って駆け出した。まるで似ていない姉妹は、それでも仲良さそうに歩いていった。

十神は校舎に入る。廊下にも大勢の生徒がいて、十神の目からは、一人の例外もなく呆(ほう)けた顔つきに見えた。平和な日常。退屈な毎日。どこにでもころがっている学園生活。うんざりするほどくだらない景色に、十神は満足した。吐き気がするほど凡庸な世界で、自分がすばやく動けていることに満足した。

廊下の向こうで、一人の女子生徒が待ち受けていることに気づく。

全身をゴシックロリータの衣装で包んだその人物は、クラスメイトのセレス……正確には、セレスティア・ルーデンベルクだった。

「おはようございます十神君。あいかわらず勝ち誇った歩きかたですわね」

「俺の歩行に文句をつけるな」今日はよく挨拶されるなと十神は思った。「腐れラードはどうした？」

「わたくし、いつも山田君といっしょというわけではありません。それはともかく、口座を確認しました。報酬、たしかに受け取りましたわ」

「フン。十神は嘘など吐かん」

「これでわたくしの夢に、また一歩近づきましたわ」

「夢の話はよせ。この週末、自分の夢を語るやつらにばかり会っていたから、その手の話はたくさんだ」

「では話題を変えまして、教室に入る前に、一つ忠告して差し上げましょう」

「忠告？」

「これからクラスのみんなで、十神君を祝福するサプライズパーティを開きます。十神君が教室に入ったとたん、大量の紙吹雪と、大量のクラッカーと、黒板に書かれた『ありがとう十神君！』の文字が、あなたを出迎えてくれますわ」

「……せっかくのサプライズなのに、どうして俺に教えたんだ」

「意外ですわね。サプライズなんてお嫌いだと思ったのですが」

「愚民どもの企画に乗ってやるのも、上に立つ者のつとめだ」
「同情いたしますわ。ところで十神君、例の噂はごぞんじですか？」
セレスの口調が変わる。
「噂だと？　なんのことだ。説明しろ」
「十神君のおかげで世界に平和は戻りましたが、物騒な『パレード』はつづいていますし、またいつ今回のようなことが起こるかもわからないので、学園は警戒を強めたようなのです。絶望に対する警戒を。十神君はもう、『希望ヶ峰学園シェルター化計画』の噂……お聞きになりまして？」
「『希望ヶ峰学園シェルター化計画』だと？」
「わたくしたち生徒を守るために、学園内にシェルターを作るという噂です」
「ひどい冗談だ。古びた考え方だ――

」

正直な感想だった。冷戦時代に作られた映画でも、もう少しまともな対応をしただろう。

「わたくしには、冗談ですませられる話ではありませんわ。世界がどうなろうと知ったことではありませんが、世界が終わってしまうのはこまりますもの。だってまだ、夢の途中なのですから」

「フン。無用な心配はするな。俺が存在しているかぎり、世界は終わらん」

「うふふ」

「何がおかしい」

「いえ、ただの思い出し笑い……」セレスは頭を押さえた。「チェコのことを思い出すと、偏頭痛がするのです。山田君と必要以上にいっしょにいたせいです。ストレス発散に、あの腐れラードに罵倒を浴び

せてきますわ」
云いたいことをすべて口にしたらしく、セレスは去っていった。階段を上がるセレスの背中を見るともなく見ながら、仕入れたばかりの『希望ヶ峰学園シェルター化計画』について考えようとしたが、どうにもうまくまとまらない。十神は自分の思考の鈍さを新鮮に感じつつ、教室へと向かった。
そして腐川冬子を見つけた。
腐川は陰険な表情を浮かべて、「な、なんであたしが荷物運びなんか……」と文句を云いながら歩いている。見ると、両手で段ボール箱

をかかえていた。
「腐川、その箱はなんだ」
「びゃびゃびゃ！」
「奇怪な声を出すな。その箱はなんだと聞いている」
「び、びゃびゃびゃびゃ白夜様。これは……その、猫の死体です！」
「気色悪い」
「河川敷で拾ってきました！」
「俺のサプライズパーティに使う小道具だろ？」
「ど！　どうしてごぞんじなのですか」
「この十神に、隠しごとなど通用せん」

　そう言葉を返すと、腐川は段ボール箱を手から落として、がっくりとうなだれた。ただでさえ陰気な表情がさらに悪化し、長い三つ編み

が廊下に垂れ、全身で悲しみをアピールしている。
「終わったあああぁッ……。あたしが立案した『白夜様のハートをつかむためのビックリパーティ大作戦』を自分で白状(ゲロ)って、しかもなぜかすでにバレていたなんて完全に終わったあぁ」
「なんかもう全部聞こえてるぞ」
「手首を切るどころか手首を切り落としたい……」
「フン。案ずるな腐川。サプライズパーティは知らなかったことにしておいてやる」
「はいっ？」
「愚民どもをよろこばせてやるのも俺の仕事だ」
「ぐへへ」
「どうしてそういうリアクションになるんだ」
「ぐふ。うふふふふふふふふふ。びゃ、白夜様ったら、なんてお優

[illegible]

しいの。た、たまらないわ。子宮が降りてきちゃうううぅ……ッ」

瞳がハートマークになった腐川は、薄ら笑いを浮かべたまま段ボール箱を拾い上げようとしたが、「痛ッ」と短く叫んで手首を押さえた。

「お前、怪我しているのか」

「はい……手首を捻挫しました。チェコでやってしまったらしくて。き、き、きっとアイツのしわざに決まってるわ……。ううう、なんであたしがこんな目に遭わなきゃいけないのよぉぉぉ」

「お前はお前の役割を果たしたぞ。記憶にはないだろうが」

「そう、なのですか？」

「俺の[illegible]

「俺の仕事に貢献した」
「いえそんな……。あたしなんかいなくても、白夜様ならお一人で、事件を解決できたはずです」
「当然だ。とはいえ、『世界征服未遂事件』を俺が解決したのは、たまたまその役割が、俺だったからにすぎん。立場が、状況が違えば、主役は俺じゃなかった。世界を救うという行為は、そのていどのものだ」
「世界を救ったのにご謙遜されるなんて！　すばらしいいい……ッ」
「近寄るな」
「一生ついていきます！」
「涎を垂らすな」
「白夜様の体液ならなんでも飲めます！」
「おぞましい宣言はやめろ。さて、手が痛むのなら俺が運んでやろう

「おぞましい宣言はやめろ！　それ言う病ものから何か運んでやろう」
「ひゃあああああああああああああ⁉」
「いちいちうるさい。こんどはなんだ」
「な、なんなの、この優しさ成分１００％の白夜様は。あ……あたしったら夢でも見ているのかしら」腐川は自分の頬を限界まで引っぱった。「それとも来週あたり、世界が崩壊するんじゃないのかしら」
「もしそうなったら、こんどはお前たちで世界を守ってみせろ。お前たちが背負う希望の文字が、伊達ではないことを証明してみせろ」
「あたしには、そんなことできません……。あたしができるのは、だれよりも白夜様のおそばにいることだけです。空気のように」
「こんなにも自己主張する空気があるか」
「じゃあ真空になります！　無になります！」

「フン。いいか腐川、量子の世界においては真空は無ではない」
「なんのお話です？」
「真空には『ゆらぎ』があり、物質がつねに現れたり消えたりしている」
「あたしゴリゴリの文系なので……ちょっとイメージできません」
「譬え話をしてやろう。お前の親しい友人が死んだとする」
「白夜様死なないで!!」
「譬え話だと云っているだろ。それから俺とお前は、ちっとも親しい間柄じゃない」十神は即座に云った。「友人が死んで、そいつの部屋に入ったと想像してみろ。部屋とはつまり、真空だ。部屋の中には、友人が使っていた机や手帳があるだけで、もちろん友人はいない。にもかかわらず、このとき、友人の実在をむしろ色濃く感じてしまう。無の中からでも、友人のことを強く感じ取ってしまうわけだ。この世

無の中だからでも、友人のことを強く感じ取ってしまえばた　この世に、完璧な無など存在しない。どこかで観測し、観測され、影響をおよぼし合っている。わかったか？」
「あたし、そもそも友達がいないので……」
「お前との会話はここまでだ。さっさと教室に入るぞ」
段ボール箱を持つために体を屈めると、ジャケットの胸ポケットから何かが落ちる。
万年筆だった。
落下の衝撃によるものか、キャップの縁から青インクがあふれ、少女の涙のように流れ出た。廊下に広がるそれを見つめる十神の脳に、まるで天使の羽がふと触れていたように、優しいイメージが宿る。そし

はほんの刹那のできごとで、十神の脳はすぐに我を取り戻した。
　それだけだった。長い夢から覚めたように、長い物語を読み終えたように、あとには何も残らなかった。

（了）

『参考文献』

読者が興味を持つよう、おもしろくてためになる戯言を書きました。とはいえ、知識人を気取って自惚れている読者は、『おもしろくてためになる＝くだらない』と考え、ほくそ笑んでいることでしょう……内心では『おもしろくてためになる』と思いながら。本書を読んで何かを学んだ気になっているならば、勘違いにすぎません。本書はくだらなく書いてやりましたが、云っていることはたしかで、真実です。魅力的な題材で読者を誘い出し、むずかしい箇所はわざわざ削り、浅薄な文章にしたのもすべて、『現実に立ち向かってほしいから』という意図ゆえです。『くだらない』で済まさせる気はありません。それを心に刻み、さらには『ちゃんと知りたい』と考える読者がいるのなら原典にあたるしかなく、ここに内典・外典の書物を紹介す

るので、どうか読んでください。（意訳著者）

（慈円／愚管抄）

（内典）

小高和剛・小松崎類『ダンガンロンパ　希望の学園と絶望の高校生』スパイク　２０１０年

同右『ダンガンロンパ／ゼロ』（上・下）星海社FICTIONS　２０１１年

同右『スーパーダンガンロンパ２　さよなら絶望学園』スパイク・チュンソフト　２０１２年

同右『絶対絶望少女ダンガンロンパ　Another Episode』スパイ

ク・チュンソフト　２０１４年

（外典）

岸誠二『ダンガンロンパ　希望の学園と絶望の高校生 The Animation』小高和剛監修　ラルケ　２０１３年

北山猛邦『ダンガンロンパ霧切』（１・２・３）星海社FICTIONS　２０１３年〜

『ダンガンロンパ THE STAGE　希望の学園と絶望の高校生』小高和剛監修　CORNFLAKES　２０１４年

『スーパーダンガンロンパ２ THE STAGE　さよなら絶望学園』小高和剛監修　CORNFLAKES　２０１５年

『ダンガンロンパ THE STAGE 2016　希望の学園と絶望の高校生』

小高和剛監修　CORNFLAKES　２０１６年

（その他）

アラルコン・ダニエル『夜、僕らは輪になって歩く』藤井光訳　新潮クレスト・ブックス　２０１６年

伊藤計劃『虐殺器官』ハヤカワＳＦシリーズＪコレクション　２００７年

同右『ハーモニー』ハヤカワＳＦシリーズＪコレクション　２００８年

同右『METAL GEAR SOLID GUNS OF THE PATRIOTS』角川書店　２００８年

今枝由郎『ブータン仏教から見た日本仏教』ＮＨＫブックス　２００５年

今川泰宏『ジャイアントロボ THE ANIMATION 地球が静止する日』バンダイビジュアル他　１９９２〜１９９８年
海猫沢めろん『ワールズエンド×ブックエンド』（『本をめぐる物語　小説よ、永遠に』所収）角川文庫　２０１５年
楳図かずお『わたしは真悟』小学館　１９８３〜１９８６年
大江健三郎『遅れてきた青年』新潮社　１９６２年
同右『万延元年のフットボール』講談社文芸文庫　１９８８年
大澤真幸『社会性の起源』「本」講談社　２０１３年〜
同右『量子の社会哲学　革命は過去を救うと猫が言う』講談社　２０１０年
大塚英志「角川歴彦とメディアミックスの時代」（http://sai-zen-

sen.jp/editors/blog/works/kadokawatsuguhiko/?page=3）「最前線」星海社　２０１４年～
大波篤司『図解ハンドウェポン』新紀元社　２００６年
折口信夫『死者の書』（『死者の書・口ぶえ』所収）岩波文庫　２０１０年
神林長平『敵は海賊・海賊版』ハヤカワ文庫　１９８３年
同右『言壺』中公文庫　２０００年
同右『いま集合的無意識を、』ハヤカワ文庫　２０１２年
キュアロン・アルフォンソ『ゼロ・グラビティ』ヘイデイ・フィルムズ　２０１３年
京極夏彦『姑獲鳥の夏』講談社ノベルス　１９９４年
黒田洋介『魔法少女プリティサミー』富士見ファンタジア文庫　１

９９５年
クンデラ・ミラン『小説の技法』西永良成訳　岩波文庫　２０１６年
小島秀夫『METAL GEAR SOLID V:THE PHANTOM PAIN』コナミデジタルエンタテインメント　２０１５年
佐藤友哉『フリッカー式　鏡公彦にうってつけの殺人』講談社ノベルス　２００１年
同右『エナメルを塗った魂の比重　鏡稜子ときせかえ密室』講談社ノベルス　２００１年
同右『水没ピアノ　鏡創士がひきもどす犯罪』講談社ノベルス　２００２年
同右『鏡姉妹の飛ぶ教室　鏡家サーガ例外編』講談社ノベルス　２

００５年
同右『青酸クリームソーダ　鏡家サーガ入門編』講談社ノベルス　２００９年
ザ・ブルー・ハーブ『STILLING,STILL DREAMING』リアルライフレコーディングス　２００２年
サナリー『学園少女　夢から、さめない』ＢＭＧビクター　１９９６年
さやわか『僕たちとアイドルの時代』星海社新書　２０１５年
シェイクスピア・ウィリアム『リチャード三世』福田恒存訳　新潮文庫　１９７４年
慈円『愚管抄』（日本古典文学大系８６）岡見正雄・赤松俊秀校註　岩波書店　１９６７年
同右『愚管抄　全現代語訳』大隅和雄訳　講談社学術文庫　２０１

２年
シュテュンプケ・ハラルト『鼻行類　新しく発見された哺乳類の構造と生活』日高敏隆・羽田節子訳　平凡社　１９９９年
スミス・コードウェイナー『ノーストリリア　人類補完機構』浅倉久志訳　ハヤカワ文庫　１９８７年
多賀宗隼『慈円』（人物叢書）日本歴史学会編　吉川弘文館　１９５９年
ツルゲーネフ・イワン『あひゞき』（『あひゞき・片恋・奇遇他一篇』所収）二葉亭四迷訳　岩波文庫　１９５５年
ティビット・ポール『スポンジ・ボブ　海のみんなが世界を救Woo!』パラマウント・アニメーション他　２０１５年
富野由悠季『機動戦士ＺガンダムA New Translation』（Ⅰ・Ⅱ・

Ⅲ）サンライズ　２００５〜２００６年
同右『ガンダムＧのレコンギスタ』サンライズ　２０１４年
とり・みき『パシパエーの宴』チクマ秀版社　２００６年
中野実『革命』（現代政治学叢書４）猪口孝編　東京大学出版会　１９８９年
中屋敷法仁『天邪鬼』柿喰う客　２０１５年
同右『完熟リチャード三世』（女体シェイクスピア００７）柿喰う客　２０１５年
橋本治『言文一致体の誕生』（失われた近代を求めてⅠ）朝日新聞出版　２０１０年
刃頭 feat.イル・ボスティーノ『野良犬』ビクターエンタテインメント　２００２年

ビネ・ローラン『ＨＨｈＨ　プラハ、１９４２年』高橋啓訳　東京創元社　２０１３年
深沢徹『「愚管抄」の〈ウソ〉と〈マコト〉歴史語りの自己言及性を超え出て』森話社　２００６年
フリード・セス『筆写僧の嘆き』（『大いなる不満』所収）藤井光訳　新潮クレスト・ブックス　２０１４年
ベック・ウルリッヒ『世界リスク社会論　テロ、戦争、自然破壊』島村賢一訳　ちくま学芸文庫　２０１０年
ホッファー・エリック『大衆運動』高根正昭訳　紀伊國屋書店　１９６９年
同右『現代という時代の気質』柄谷行人訳　晶文社　１９７２年
真木悠介『自我の起源　愛とエゴイズムの動物社会学』岩波現代文庫　２００８年

麻耶雄嵩『翼ある闇　メルカトル鮎最後の事件』講談社ノベルス　１９９３年
同右『夏と冬の奏鳴曲』講談社ノベルス　１９９３年
丸谷才一『横しぐれ』講談社文芸文庫　１９８９年
みっくすJUICE『The IJIN-DEN 天才の法則』ランティス　２００３年
夢野久作『ドグラ・マグラ』（上・下）角川文庫　１９７６年
同右『猟奇歌』（『夢野久作全集７』所収）三一書房　１９７０年
リテル・ジョナサン『慈しみの女神たち』（上・下）菅野昭正・星埜守之・篠田勝英・有田英也訳　集英社　２０１１年
『aruco　チェコ』（地球の歩き方１５）地球の歩き方編集室編　ダイヤモンド・ビッグ社　２０１１年


星海社
FICTIONS
サ2-04
十神
下
十神の名にかけて
佐藤友哉
星海社
「どんな世界だろうと、
希望の前では絶望などカスだ」
ついに姿を現した「十神一族最大最悪の事件」の
犯人・十神和夜! 超高校級の御曹司・十神白夜は、
世界保健機関疫病対策委員実行部隊隊長となった彼に
「絶望病」蔓延の諸悪の根源として逮捕されてしまう。
移送のさなか語られる謎の「『聖人計画』と『聖書計画』」。
そして、血の抗争の果てで
ついに明かされる「件」の正体……!
「いい、世界征服だったぞ」
佐藤友哉×しまどりる×ダンガンロンパ 堂々完結!
佐藤友哉 yuya sato
1980年生まれ。
2001年『フリッカー式 鏡公彦にうってつけの殺人』(講談社ノベルス)で第21回メフィスト賞を受賞しデビューする。
2007年『1000の小説とバックベアード』(新潮社)で三島由紀夫賞を最年少で受賞。近年では純文学をメインフィールドとして活躍している。『星の海にむけての夜想曲』(星海社)、『ベッドサイド・マーダーケース』(新潮社)など著作多数。
しまどりる shimadrill
イラストレーター。
『ニューダンガンロンパV3 みんなのコロシアイ新学期』イベントイラストおよび一部デザインを担当。RPF『レッドドラゴン』でイラストとアートディレクションを担当。TVアニメーション『ケイオスドラゴン 赤竜戦役』ではキャラクターデザイン原案を務める。


佐藤友哉
yuya sato
ダンガンロンパ
十神の名にかけて
下
Illustration
しまどりる
十神
星海社FICTIONS
俺たちはいかなる真実も、
いかなる選択肢も、華麗に乗り越える。
お前が撃ってくる絶望の弾丸を残らず弾き返す。
十神の名にかけて。
©Yuya Sato
©Spike Chunsoft Co. All Rights Reserved. 2017 Printed in Japan
星海社 FICTIONS
サ2-04
ダンガンロンパ
十神 下 十神の名にかけて
佐藤友哉
星海社


星海社 FICTIONS
サ2-04
ダンガンロンパ
十神 下 十神の名にかけて
佐藤友哉
星海社
「どんな世界だろうと、
希望の前では絶望などカスだ」
ついに姿を現した「十神一族最大最悪の事件」の
犯人・十神和夜! 超高校級の御曹司・十神白夜は、
世界保健機関疫病対策委員実行部隊隊長となった彼に
「絶望病」蔓延の諸悪の根源として逮捕されてしまう。
移送のさなか語られる謎の「「聖人計画」と「聖書計画」」。
そして、血の抗争の果てで
ついに明かされる「件」の正体……!
「いい、世界征服だったぞ」
佐藤友哉×しまどりる×ダンガンロンパ 堂々完結!
佐藤友哉 yuya sato
1980年生まれ。
2001年『フリッカー式 鏡公彦にうってつけの殺人』(講談社ノベルス)で第21回メフィスト賞を受賞しデビューする。
2007年『1000の小説とバックベアード』(新潮社)で三島由紀夫賞を最年少で受賞。近年では純文学をメインフィールドとして活躍している。『星の海にむけての夜想曲』(星海社)、『ベッドサイド・マーダーケース』(新潮社)など著作多数。
しまどりる shimadrill
イラストレーター。
『ニューダンガンロンパV3 みんなのコロシアイ新学期』イベントイラストおよび一部デザインを担当。RPF『レッドドラゴン』でイラストとアートディレクションを担当。TVアニメーション『ケイオスドラゴン 赤竜戦役』ではキャラクターデザイン原案を務める。
ファン必読の"星海社FICTIONS×『ダンガンロンパ』"シリーズ!
ダンガンロンパ/ゼロ (上)(下) 小高和剛
ダンガンロンパ霧切 1〜4 以下続刊 北山猛邦
ダンガンロンパ十神 (上)(中)(下) 佐藤友哉
サ2-04


佐藤友哉
yuya sato
星海社FICTIONS
サ2-04
ダンガンロンパ
DANGANRONPA
TOGAMI
十神の名にかけて
下
Illustration
しまどりる
十神 下 十神の名にかけて
俺たちはいかなる真実も、
いかなる選択肢も、華麗に乗り越える。
お前が撃ってくる絶望の弾丸を残らず弾き返す。
十神の名にかけて。
佐藤友哉
十神
三島由紀夫賞作家による
至高のノベライズ！
佐藤友哉
×しまどりる
×ダンガンロンパ
「いい、世界征服だったぞ」
星海社FICTIONS
©Takekuni Kitayama
©Yuya Sato
©Spike Chunsoft Co. All Rights Reserved. 2013 Printed in Japan
©Spike Chunsoft Co. All Rights Reserved. 2014 Printed in Japan
©Spike Chunsoft Co. All Rights Reserved. 2016 Printed in Japan

Illustration　しまどりる

ブックデザイン　Veia

編集担当　太田克史
編集副担当　今井雄紀

フォントディレクター　紺野慎一
電子書籍ディレクター　松島 智
オペレーションチーム　阿万 愛＋三本絵理

校閲　鷗来堂

フォント制作協力　字游工房＋リアルタイプ＋凸版印刷

制作協力　新藤慶昌堂

本作品は、2017年2月、小社より星海社FICTIONSとして刊行されたものをe-FICTIONSとして電子書籍化したものです。
e-FICTIONSでは、訂正部分や図版点数などが異なる場合があります。

JASRAC 出 9018729001Y43128

ダンガンロンパ十神（下）十神の名にかけて

2020年10月1日発行（01）

著　者　佐藤友哉

発行者　太田克史

発行所　株式会社星海社
〒112-0013
東京都文京区音羽1-17-14
音羽YKビル4F
https://www.seikaisha.co.jp

発売元　株式会社講談社
〒112-8001
東京都文京区音羽2-12-21
https://www.kodansha.co.jp